

〈旅館『吉野川』登場人物〉

碓氷 瑞穂…居酒屋『かま田』元店員。

霧島 翼…運輸安全委員会委員。

霧島 燕…旅館『吉野川』の主人。霧島翼の父。

霧島 朱鷺子…旅館『吉野川』の女将。霧島翼の母。

津軽 洋子…旅館『吉野川』の料理人。

島風 真里…客人。安政大学政経学部教授。

潮路 大輔…客人。安政大学政経学部新4年、島風ゼミ

のゼミ長。

白鷺 快二…客人。安政大学政経学部新4年。

常盤 涼香…客人。安政大学政経学部新4年。

有明 浩成…客人。安政大学政経学部新4年。

日向 海里…豊永診療所医師。

黒潮 祐介…高知県警捜査一課警部。

瀬戸 遥…高知県警捜査一課刑事。黒潮の部下。

児玉 実里…碓氷の義理の母親。故人。

〈『電車館』登場人物〉

劔 礼士…秋田新幹線運転士。現在休職中。

釜田 神威…居酒屋『かま田』店長。

大和 叶…居酒屋『かま田』店員。碓氷の後輩。

比叡 暁…『月刊サフィール』記者。大和叶の姉。

水郷 真矢…『月刊サフィール』カメラマン。

播磨 敦史…『電車館』初代当主。『エルム模型』創業者。

山鳩 宗吾…『電車館』当主。『エルム模型』会長。

鹿島 ひばり…山鳩の妻。秘書を兼任。

羽黒 華…『電車館』お手伝い。

敷島 丈…客人。『三辺製作所』現取締役。

三辺 治作…『三辺製作所』前取締役。

島海 高志…客人。宝永大学商学部講師。

矢野 友久…秋田県警捜査一課警部。

犬塚 麗央…秋田県警捜査一課刑事。矢野の部下。

安部 滯…秋田県警鑑識課。

〈路線概説〉

土讃線…：香川県の多度津から徳島県の阿波池田、大歩危などを経て高知、さらに高知県西部の窪川に至るJR線。琴平以南は非電化。途中、峻嶒な四国山地を縦断するために急曲線と急勾配、トンネルが続く劣悪な環境を有している。特急『南風』が岡山〜高知間を一時間ごとに結んでいる。

〈前回までのあらすじ〉

劔に自分の過去を明かした碓氷。しかし劔の想いは変わらず、婚姻を申し込まれる。その返答は全て彼女に委ねられた。彼女は劔に帰還を約束できず、一人彷徨う。一方、笠原の強襲から辛くも生き延びた劔。碓氷は劔の前から姿を消してしまふ。そんな折、劔の友人である大和が姉からある奇妙な館の話聞き、傷心した劔を連れて行くことにする。その館の名は、『電車館』……。

〈車両概説〉

JR四国2000系…：JR四国が鉄道総研と共同で設計・製造した特急列車用気動車（ディーゼルカー）。急曲線を高速で走行するために、カーブで車体を内側に最大5度傾けて、遠心力を打ち消す機能を備えた世界初の「振り子式気動車」。非電化路線の大幅な高速化の礎となった世界的名車である。現在は老朽化により後継車両への置

き換えが進み四国西部での活躍に留まるものの、かつては四国ほとんどの特急で使用されたJR四国のエース車両である(写真①・②)。



→写真①

→写真②

第九話 南風に吹かれながら(前編)

プロローグ 郷愁

*矢野友久 —— 秋田県秋田市・県警本部

あの頃、私はまだ駆け出しの刑事だった。十文字町の山中に建つ館で変死体が発見されたとの報を受け、パトカーを駆った。

見つかったのは、本棚の下敷きになって死んでいた男だった。確か館の当主だったはずだ。部屋は鍵がかかっており、人が出入りするような細工は無かった。本棚の中身を取ろうとしたら本棚が倒れて下敷きになったのだろう、当時の上司はそう結論付けた。結果、あの死体は事故死として処理された。

しかし、だ。
今でも時々考えてしまう。

あれは本当に事故なのか？

自殺だったたり、ましてや殺人を示すような根拠は発見されていない。だからあれは不幸な事故だ。そう考えるのが妥当ではある。

しかし、その「妥当な結論」がああ館に素直に当てはまるのだろうか？

あの奇怪な館に？

時が流れ、私も歳を取った。刑事から警部に昇進し、部下もできた。妻子もできた。その年月の中で私は最初に取り扱った変死体の事件を段々と忘れていった。しかし、館は私のことを忘れていなかったようだ。

また死体が出た。

あの館……『電車館』で。

*剣礼士 —— 秋田県秋田市・居酒屋『かま田』

瑞穂さんが秋田を発ってから1週間が経った。連絡は取っていない。彼女が決断を下すまで待つべきだ。僕が何か連絡をしてそれが圧力になり、彼女の決断を狂わせることがあつてはならない。

しかし、僕の心にはぼつかりと穴が開いてしまったようだ。瑞穂さんが隣にいないことが、どれだけ自分を無力化させるのかを味わう日々を送っていた。

彼女がいけないことは僕以外にも悪影響を及ぼしていた。剣よお、どうにかして確水を呼び戻してくれねえか？ あいつがいねえと店がちつとも回らねえ」

「そんなことを僕に言われましても、僕も彼女の行先を知らないんですよ」

「連絡すればいいじゃねえか。別れたわけでも喧嘩したわけでもねえんだろ？」

釜田さんが好き勝手なことを言う。でもそれは、瑞穂さん以外の人を雇う気はさらさら無いことの裏返しでもある。

「はあ、確水はいなくなつちまうし剣は燃え尽き症候群だ。こりや参ったな」

開店前のがらんとした店内に釜田さんのぼやきが響いたが、すぐに店の引き戸が開く音が響いた。

「こんにちはー」

白いダウンコートに身を包んだ大和さんが入ってきた。もこもこして暖かそうだ。

「おう、大和。来たか……姉貴も一緒なのか。いらつし

やい」

「どうも、お久しぶりです。叶、あの人が劔さん？」

大和さんの背後には黒いダウンコートに身を包んだ女性がいる。僕に話があるというのはこの人のようだ。

「初めまして、『月刊サフィール』記者の比叡と申します。いつも妹がお世話になってます」

大和さんとは違って髪型がローテールなために印象が異なるが、姉妹なだけあってよく似ている。苗字が違うということは結婚しているのだろう。

「劔です。秋田新幹線で乗務員をやっております。現在は休職中ですが」

それにしても、雑誌記者が僕に何の用だろうか？ 大和さんに頼まれて話を聞くことになったけど、何の心当たりも無い。カウンター席に隣り合って座る。釜田さんが熱い麦茶を出してくれた。

「3月になったというのに冷えますね」

「この時期の秋田は最後の大雪が降ることがあるんです。この雪が終わったら春になりますよ」

僕は麦茶を啜り、本題に入る。

「それで、お話というのは？」

比叡さんも麦茶を啜り、鞆から水色のバインダーを取り出した。

「劔さん、まずはこれを見て下さい」

バインダーを開くと、建物の写真が載っていた。山の斜面にめり込むように建っているレンガ造りの洋館だが、僕は建物の奥に目が行った。

「この奥のは……保存車両ですか？」

比叡さんは軽く頷いて話を始める。

「今度、このお屋敷の主人に雑誌取材に行くんです。ゲストも交えた対談も行いますが、それに劔さんにもついで

てきて欲しいんです」

「僕に？ どうしてまた？」

比叡さんはページをめくった。室内に立つ白髪交じりの男性の姿が載っているが、またもや僕は背景に注目せざるを得なかった。数々の鉄道グッズが壁を埋め尽くしている。

「この人、どうやら鉄道愛好家の方ですね」

「そうなんです。劔さん、『エルム模型』って聞いたことがありますか？」

「ええ」

秋田県を本拠地とする中堅の鉄道模型メーカーだ。横手市増田にある模型工場は僕の実家の近所だ。

「この人は『エルム模型』会長の山鳩さんで、この屋敷は山鳩会長の別宅です。『電車館』って呼んでいるとか」

「あ、会長さんってこっちの方だったんですね。この人に取材をするんですか？」

「そうなんです。で、ここからが本題です」

比叡さんは少し僕の方に身を乗り出した。

「私は鉄道について詳しくないので、劔さんに通訳をお願いしたいんです」

「通訳？」

思わず聞き返したが、言わんとすることは何となく察した。

「鉄道の専門知識や専門用語といったものが私には無いので、詳しい人にレクチャーしてもらいながら取材を進めようかと思ひまして。そしたら叶がびつたりの方がいるって言って、劔さんを紹介してくれたんです」

僕は横目で軽く大和さんを見た。彼女は何食わぬ顔で釜田さんと熱い麦茶を啜っている。

「劔さんは現在休職中とのことですし、引き受けてもら

えませんか？ 諸々の費用はこちらで負担しますので」

正直なところ、あまり気が進まない。

「僕は現業畑ですし、模型には詳しくありませんよ？」

「山鳩会長は鉄道愛好家ですし、劔さんがいれば取材も楽なんですよ。現業の鉄道員が記事を監修したって書けばマニア受けもしますし」

「僕は手土産が何かですか？」

今はどこにも行きたくない気分だった。いつ瑞穂さんが帰って来るか分からない中では尚更だ。

「願わくば、劔さんが過去に解決した事件の話も聞かせてもらえたらなあ、って」

「それはお断りします。少なくとも、僕自身は取材に応じるつもりはありません」

事件については放っておいて欲しい。

「今までの事件は全て警察が解決しました。僕はただ巻き込まれただけです」

新幹線が乗っ取られた時もマスコミがしつこくて大変だった。それが笠原の事件に繋がったと考えると、取材には一切応じたくなかった。

「では、山鳩会長の通訳は引き受けて下さるんですね？」

「いいえ、それについてもまだ承諾していません」

条件を引き下げても相手をするつもりは無い。

「ねえ劔さん、ここは一つ折れてくれませんか？ お願い！」

大和さんが拝むポーズをしながら近寄ってきた。

「劔さんのことが心配なんです。先輩がいなくなつてからずっと元気が無いんです。だから鉄道ネタで元気づけようと思っただけなんです。取材に付き合ってくださいというのほただの口実なんですよ」

「……心配してくれるのはありがたいですが、あまり気

が進みませんね」

正直にそう言うと、大和さんはふくれっ面をした。

「仕方ないですね。こんなことは言いたくなかったんですけど。劔さん、恩を返してもらいますね。お姉ちゃん
の取材に付き合ってください」

「え？」

大和さんにはやりと笑い、僕は眉をひそめた。

「劔さんには輸血してあげましたよね？ それで命が助
かったんですから、忘れたとは言わせませんよ？」

そこから先、僕を巻き込んだ取材の日程はとんとん拍
子に決まった。

*確氷瑞穂 —— 高知県香美市・特急『南風』車中

『南風』と書いて『なんぷう』と読む。決して『みな
みかぜ』ではない。私は夕焼けに染まる四国山地の中、
特急『南風』に揺られていた。

この列車に乗るのは10年ぶりくらいだ。10年前、
まだお父さんが捕まる前。私の育ての母の法事に行く時
にはいつもこれに乗った。

列車は甲高いエンジン音を響かせながら、右へ左へと
山間の隘路を飛ばす。ぐらんぐらんと乗客を振り回すよ
うな遠慮の無い走りは列車というよりもラリーカーと呼
ぶのが相応しい。

車窓は連続するトンネルを頻繁に挟みながら深い渓谷、
葉を落とした寒々しい山々を掠める。徳島県との県境付
近では吉野川沿いの崖つぶちに線路が敷かれていて、少
しでも間違えたら谷底に真つ逆さまだ。川の対岸に渡る
ないのに数多の鉄橋を渡ることからも、いかに峻嶒な地
勢かが分かる。

礼士さんなら、この列車について聞いたら色々と教え
てくれるだろうか。

気が付いたらまたあの人のことを考えている。

あの人の所に帰っていいのか、そしてそのまま生涯を
添い遂げていいのか。私はあの人と幸せを味わってもい
いのか。私は自分を赦してもいいのか。それは、私が決
めないといけない。

でも、決めようとすればするほど泥沼に嵌まっていく
感じがして、思考が堂々巡りになってしまふ。

そうやって思考が空転を繰り返すうちに、ふと、育て
の母のことを思い出した。そういえば、もう10年くら
い墓参りも何もしていない。できなかった、そんな余裕
が無かった。10年という長すぎる歳月も言葉にすれば
それだけ。でも、無性に母の面影が懐かしくなった。

気が付いたら、私の手には母の故郷に向かうきつぷが
握られていた。今は静かに眠る母に甘えなくなったのか
もしれない。

物思いにふけていたら車窓の奥、眼下に狭い平野と
街並みが見えてきた。列車はあと15分もすれば終点、
高知に着くだろう。

*

*

この時期の高知県、特に海沿いの地域は晴天に恵まれ
る日がほとんどだ。日本海から来る雲雲は中国山地、四
国山地に阻まれて、太平洋に辿り着く頃には雪を落とし
切って乾ききったから風を吹かす。

その高知県の中心に高知市は位置し、県の人口の約半
分が集中している。私とその玄関口、高知駅に着いた時
には既に夕方になっていた。

高知に戻るのには十年ぶりだ。お父さんが逮捕されてか
ら人生が狂い、とても高知に戻る余裕なんてなかった。

気が付いてみれば十年も経っていた。その歳月は大きく、
もう取り戻せない。

駅は新しくなっていた。私の知っている古ぼけた駅は
どこにもなく、立派な高架駅になっている。驚いたこと
に自動改札まである。周りの人の言葉が、辛うじてここ
がお母さんの故郷だと教えてくれた。

路面電車に乗り継ぐ。相変わらずぼろつちくて、何だ
か安心した。礼士さんに写真でも送ろうかとも思ったが、
やめた。ところどころ数分揺られて、はりまや橋で降りる。

高知の言葉で「お街」、繁華街にほど近いターミナルだ。

♪ 土佐の〜高知の はりまや橋で〜

坊さん かんざし 買うを見た〜

ペギー葉山『南国土佐を後にして』でも歌われたはり
まや橋は、とんでもなくしょぼい橋だ。10秒もあれば
渡り切ってしまう、小さく赤いだけの橋だ。その横の帯
屋町商店街。店の数が前より減っている気がしたが、目
当ての花屋はやっていて、明日行こう。

平日の夕方とあって学生の姿が多い。高知も少子高齢
化が深刻なはずだ。それでも過疎化が進む秋田より人が
多いのは、そもそもその街に使える土地が狭いからだろう。
礼士さんに連れられて秋田に来た頃、日本の過疎化進行
率第一位は秋田、第二位は高知だとテレビでやっていた。
こうして実際に来てみると、あまり実感が湧かない。

商店街を西に10分も歩くと終点で、そこからもう少
し歩くと高知城や県庁に辿り着く。その道中で私は明日
必要になるものに目星をつけていった。線香、蠟燭、軍
手、菓子折……母の墓参の準備だ。

買い物は明日に回すことにして、私はホテルにチェック

クインした。部屋に上がると窓から橙色に染まった電車通りと高知城が見える。

夕食はひろめ市場、高知市民の胃袋で済ませることにした。10年ぶりに食べる鰹のたたきは、塩気を覆い尽くすような薫と薬味と血の匂いがした。大葉、青ネギ、厚切りの生にんにく、みょうがを大量に乗つけて口に運ぶ。肉厚、もちもち、その中に存在を主張するぱりっと焼けた皮の食感を楽しむには少し賑やかすぎる。煙草の煙、ひっきりなしに交わされるジョッキ、どこからともなく湧き上がる見ず知らずの人間同士の饗宴。私には明るすぎる。食べるだけ食べて、さっさと引き上げた。

* * *

熱いシャワーで煙草とにんにくの匂いを落とす。お湯が伝う私の肌は、古傷だけではない。まだ新しい傷跡も生々しい。傷が増えても、あの人は私をきれいだと言ってくれるだろうか。

ユニットバスに身を浸す。体は暖まっても、気は晴れない。

そういえば、礼士さんと最後にお風呂に入ったのはいつだろう？ あの人の抱かれる前、抱かれた後、よく一緒にお風呂で暖まった。浴槽の中で私を後ろから抱きしめるのがあの人は好きだった。私もそれが満更ではなかった。力強くもとても優しいあの腕に、静かに身を任せているのが大好きだった。

風呂を出る。バスローブを身に纏い、そして部屋に戻る。トランクの奥底から出したのは、小さな紺色のケース。秋田駅で渡された、小さな包みの中身。

「礼士さん……」

開いたケースの中、指輪の輝きが網膜に反射する。

「私、どうすればいいの……？」

瞳の奥に、あの人の穏やかな微笑みが浮かぶ。

「どうすれば……」

私の過去を全て知ってもなお、あの人は私に笑顔を向ける。

私みたいな人間が、それに応えていいの？

私みたいな人殺しが。

第一章 到着

* 釧路士 —— 秋田県横手市・『電車站』

カーステレオからは水樹奈々『Chronicle of sky』が元気いっぱい流れている。霧降荘の道中でも流れていたけど、大和さんの選曲だ。釜田さんの愛車である白いトヨタ・マークIIは順調に秋田道を飛ばしていた。

「晴れて良かったっすね」

後部座席でそう言うのはカメラマンの水郷さんだ。髪をざっと赤色に染めている彼女を大曲で拾い、また高速に乗って十文字に向かっている。

「ええ。でも、この時期の天気は気まぐれですからね。」

もう一、二回は多めの雪が降るかもしれません。それが終われば春ですよ

「まあ、少なくとも今日一杯は大丈夫じゃねえか？ ほら、鳥海山が見えるぞ」

釜田さんが窓の外を指すと、やや霞がかった出羽富士が厚く雪化粧をしていた。水郷さんは大事そうに抱えていた一眼レフを構え、何度もシャッターを切る。前触れもなく現れる雪避けの壁に苦戦しながらも、ある程度モ

ノになる写真が撮れたみたいだ。

横手ICで高速を降り、雪がうず高く寄せられた車道を進む。

「この辺を含め県南は秋田でも有数の豪雪地帯なんですよ」

「へえ、本格的に雪国らしい景色になってきましたね」

僕の説明に比叡さんも興味津々だ。

「昼飯にするぞ」

釜田さんはそう言い、大きな駐車場を併設したラーメン屋に車を進める。

「三角ラーメンだ。美味いんだぜ、ここ。秋田県民のソウルフードだ」

お昼には遅い時間なのが幸いしてすぐに通してもらえた。これも雑誌記事の一部にするようで、比叡さんは盛んにパソコンを操作し、水郷さんは片っ端からシャッターを切っている。程なくして名物の中華そばが運ばれてきた。

「懐かしいなあ、昔はよくここで食べたものですよ」

久しぶりに食べるラーメンを前に心が躍った。あっさりとした魚介ベースの醤油ラーメンは、瑞穂さんにも食べさせたら好評だった。

「あれ、釧路さんってこの辺の人なんですか？」

大和さんがなるとを口に放り込みながら聞く。僕はちぢれ麺を勢いよく啜りながら目で頷く。変わらない美味しさにほっとした。

「そうですね。高校までここで過ごしました。そこから専門学校に出て、釜田先生にあれこれ教わったんです」

「その呼び方は驕るからやめろっていつも言ってるだろうにしても、先生って響きも懐かしいな」

釜田さんが海苔を口に運びながら少しだけ笑う。

「そう言えばずっと気になっていたんですが、どうして釜田さんや大和さんも一緒なんですか？」

「ああ、それは」

比叡さんがチャイシューを噛みちぎった後に続けた。

「山鳩会長が是非、って。釜田さんは鉄道学校の元教官ですし、叶はトワイライトエクスプレスでクルーをやっていたって話をしたら会いたいって。こつちとしても山鳩会長には色々話をしてもらった方が都合なので、話題の引き出しとして参加してもらおうことにしたんです」

それなら僕の出る幕は無いと思う。ラーメンを堪能したら回れ右をして帰りたい気分だ。

「で、その『電車館』ってのにはここからどれくらいかかるんだ？」

「ここからだと言ったら20分くらいはつかねー」

一番早くラーメンを食べ終えた水郷さんがスマホを見ながら答える。メンマが歯の間に挟まったみたいで、さつきからずつと爪楊枝を使っている。

「山の麓みたいすよ」

* * *

ラーメンで体を暖めた後、マークIIは県道を進んでいった。市街地を出ると延々と雪に覆われた田んぼの間を進み、やがて山の方に進路を取る。道はから空きで、県道から外れた辺りでバキュームカーとすれ違ったくらいだ。

水郷さんが言っていたよりも幾分早く目的地に到着した。山の麓というに相応しく、雑木林の向こうに山影が見え、その雑木林で覆われるように館は建っていた。

「県道まですぐだし、いつぞやのように雪崩になるような所じゃねえな」

エンジンを止めながら釜田さんは少しほっとしたよう

に呟いた。昨年末の霧降荘の事件では友人を亡くしている。それを思い出したのかもしれない。

「それにしても、変わった建物ですね。山にめり込むように建っているなんて」

大和さんが白い吐息と共に言う。彼女の目線を追うと、確かに建物の後ろ側が山の斜面にめり込むようになっていく。地表に建っている部分は赤レンガ風のタイル張りだが、山にめり込む部分は年月で汚れが積もったコンクリ造りだ。

「それはほら、あそこにあるあれのせいじゃない？」

比叡さんが指差したのは館の隣にあるトタン造りの大きな小屋だった。これもまた山にめり込んでいるみたいだ。

「あの中に保存車両を置いてあるみたいで、スペース的に厳しいんじゃないの？ ほら、ここって山の麓で平地が少ないし」

なるほど、あのトタン小屋の中に車両を保管してあるのか。

寒い中で立ち話を続けるのも馬鹿馬鹿しいため、比叡さんが玄関に向かいインターホンを鳴らした。女性の声で返答があり、一言二言の応対の末にドアを開けてくれた。

「お世話になります、『月刊サフィール』の比叡と申します」

「話は主人から聞いております。遠路はるばるご苦労様です。さ、中へ」

小太りな中年女性は想像以上に人が多いことに少し驚いた素振りを見せた。それでも玄関には来客用のスリッパが人数分ある。もしかしたらこの後、僕達以外にも来客があるのかもしれない。

しかし、そんなことを考えていた僕の意識は簡単かつ完全に奪われてしまった。

「……凄いですね、これは」

建物の中には所狭しと鉄道グッズが陳列されていた。

「応接間にご案内しますね」

女性はそう言い、玄関ホールから廊下に進む。廊下も例外なく壁は鉄道グッズで埋められている。水郷さんはカメラを構えつつ、まだシャッターは切らない。アングルを考えているのかもしれない。

「お部屋には後のご案内します。まずはお掛け下さい、主人を呼んできますので」

応接間も鉄道グッズで埋め尽くされ、むしろ鉄道に関係していないものを探す方が大変だった。

「こりや……やべえな」

釜田さんもそう絶句したきり、物珍しそうに周囲を見回している。

「お待ちせしました。遠くからわざわざごうも」

そう言いながら入ってきたのは壮年の男性だった。写真よりは老けているものの白髪で少し腰が曲がっている以外は若々しく、元氣な老人という感じだ。僕達は一同に立ち上がり、比叡さんが代表して挨拶をした。

「本日よりお世話になります、『月刊サフィール』の比叡暁と申します」

『エルム模稜』会長の山鳩宗吾です。何卒、どうぞよろしく」

少し入れ歯が合っていないのか元々滑舌が微妙なのか、多少フガフガしながら自己紹介をする。

「立ったままでも難でしょう、どうぞお掛け下さい」

言われるままに座っても、その椅子さえも普通のソファではない。列車の座席を移設したものだ。

順々に自己紹介を済ませる間に先程の女性が紅茶を入れてくれた。

「なるほど、比叡さんに大和さんがご姉妹、カメラマンの水郷さん、鉄道学校元教官の釜田さん、秋田新幹線運転士の劔さんですか。覚ええました。あ、これは妻のひばりです。秘書も兼ねておりまして、仕事では鹿島と呼んでおります」

「鹿島です。よろしくお願い致します」

丸盆を抱えて丸い体で一礼する。

「それで、取材と対談をしたい、とのことでしたな？」

「ええ、そうです。取材は山鳩会長の半生とこの『電車館』について、対談は明日になりますね。対談相手の鳥海先生がお見えになるのは夜頃です」

比叡さんがバインダーに挟んだメモを見ながらスケジュールの打ち合わせをする。

「こちらが把握している通りですね。では今日はこの館を見てもらうのと、わしへのインタビュということがありますな？ 失礼ながら、インタビュや対談の中には結構専門的な話も混じりますが、その辺は大丈夫ですか？」

「ええ、助っ人を連れてきましたので」

比叡さんの目線を追うように山鳩会長が僕を見た。

「ふむ、劔さんが解説をしてくれるんですか。それにしても随分大きいすなあ……180くらいあります？」

「185ですね」

「それはそれは、列車に乗る時も頭をぶつけて大変でしょう？」

「全くです」

僕は少し苦笑を浮かべた。

「それにしても、物凄いコレクションですね。古今東西の様々な鉄道の道具、グッズ、集めるのは大変だったの

ではありませんか？」

「なめに、自分が集めたのは3〜4割に過ぎません。多くは先代の播磨社長が集めたものです。これについては追々お話ししましょう」

僕の疑問を軽くいなしてから、山鳩会長と比叡さんの間でインタビュの打ち合わせが進んでいった。僕はその間手持無沙汰なため、ただしげしげと室内のコレクションを眺めていた。腕木式の信号機がある、ホーロー製の駅名標がある、錆が浮いたキロポストがある……。

「では4時半からインタビュということで、それまで館内を鹿島に案内させましょう。皆さんも荷物を置いてゆっくりしたいでしょう」

インタビュにはどういうわけか僕も同席することになっていく。4時半開始ということは、あと1時間ちよつとある。コレクションを見物するにはとても足りないが、館の構造を掴むには十分な時間だ。

「では皆さん、また後程。鹿島、後は頼んだ」

「はい。皆様、こちらへ」

鹿島さんについて行くべく、僕達はめいめいに荷物を持ち直した。

*確水瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・児玉の墓

高知駅から普通列車に揺られること1時間半、私はようやくやく目的地に着いた。きつぷを運転士に見せ、運賃箱に入れる。ぺんぺん草が生えたホームには私の他に誰もおらず、列車の屋根上から吐き出されるディーゼルの甘い煤煙が私の鼻を突いた。列車が走り去ると、後には川の流音と静寂の中に取り残された私がいるだけだった。豊永と書いて「とよなが」。徳島県との県境に近い集落

にある、普通列車が日に数本しか停まらない山奥の鄙びた駅だ。今は昼下がりで、初春の穏やかな陽光が苦むしたホームを明るく照らしていた。時が止まったかのように10年前から何も変わっていない。

普通列車のボックスシートに揺られ続けて少し疲れた。大きく伸びをすると肩関節が鳴った。20代もどうに折り返し地点を過ぎ、ふとしたことに自分の老いを感じる。こが増えた気がする。これからの重労働を覚悟し、気合を入れるように深呼吸した。澄んだ山の空気が爽快だった。

ログハウス風の駅舎を出て右折したら鉄橋に出る。白く、所々に錆が浮いた三角形の骨組みをした鉄橋だ。吉野川の支流を下目にそこを渡り、また右折。踏切を渡ると今度は左折。しばらく国道沿いにそんな感じで歩いていくが、十年経つても道を覚えているものだ。横道に入るとその先は段々細くなり、落ち葉が積もっている杉木立の細道になる。十分くらい森の中を歩いただろうか、やがて目的地に着いた。

お墓だ。十年もほったらかしにされて、すっかり苔むしている。

「……」

言葉を発しようとしても、ここで初めて十年という歳月に圧倒された私は、あれでもないこれでもないと言葉に迷った。いや、正確には思考が空回りしていただけだ。

「……ただいま、お母さん」

そう言うのがやっとだった。

児玉実里。育ての母親が眠る墓の前に、私は不思議と心穏やかだった。

「ごめんね、すっかり遅くなっちゃって……」

語りかけても、返事のあるはずがない。時折、冷た

い風が木々を揺らすだけだった。

* *

育ての母とは必ずしもうまくいっていただけではない。私があまり懐かなかったこともあって冷淡な関係だったが、愛人の子に対する態度としては相当マシな方だ。彼女は私を育てるのに手を抜いたりしなかった。ちゃんと食べさせてくれたし、教育にも一応力を入れていた。ただ、病気で逝くのが早すぎただけだ。

軍手を嵌め、ペットボトルの水と雑巾を手にする。墓石の上から水を垂らし、力を込めて苔を削ぎ落とす。ぼろぼろ、ぼろぼろと脆い深緑の下から、黒い地肌が露になっていく。

私の独力で綺麗にするのは中央の墓石だけがやっとで、苔むして落ち葉が積もった石段やその他は諦めることにした。水を入れ、花を生ける。

「線香は……あつた」

蠟燭は短いものを一本。軍手を脱いだ手でマッチをいじり、火を点ける。

線香を火にかけ、細い煙が上がる。

手を合わせ、祈る。

母は、今の私を見て何を思うのだろうか。

* *

蠟燭が燃え終わり、線香の煙が尽きるまで私は石段に腰かけていた。風が吉野川の流音を運び、時折思い出したように国道を走るトラックがそれを遮る。

物思いに耽る。

十年。長い十年だった。お父さんが叔父を殺してから、私の人生は暗転した。

自分の過去をゆつくりと辿り直そうとするも、どうしてもあの人の面影が浮かんできてしまう。鞆に少し目を

やる。奥底には未だに嵌めることができずにいる指輪が眠っている。

ここでお母さんに縋っても、答えが見つかるわけがない。分かっていたはずだ。それでも、墓の中で沈黙を貫く彼女が少し恨めしかった。

「お母さん……」

私は両手を開く。3年前、どす赤い血に染まった両手を。

「私、どうすればいいの……?」

眩きは轟音に掻き消された。『南風』が私の横を駆け抜け、荒々しい音を立てて鉄橋を渡って行った。

* *

幸せになれ。そう礼士さんは言った。

そうすれば、誰かを笑顔にできるから。そう言った。

……。

そんなこと言われても、私にどうしろって言うのよ。

線香が燃え尽き、蠟燭は溶け切った。私は眠る母に背を向け、道を引き返す。

が、私はこの時、足元に気を付けるべきだった。墓石から削ぎ落した苔を踏みつけ、私は足を滑らせた。

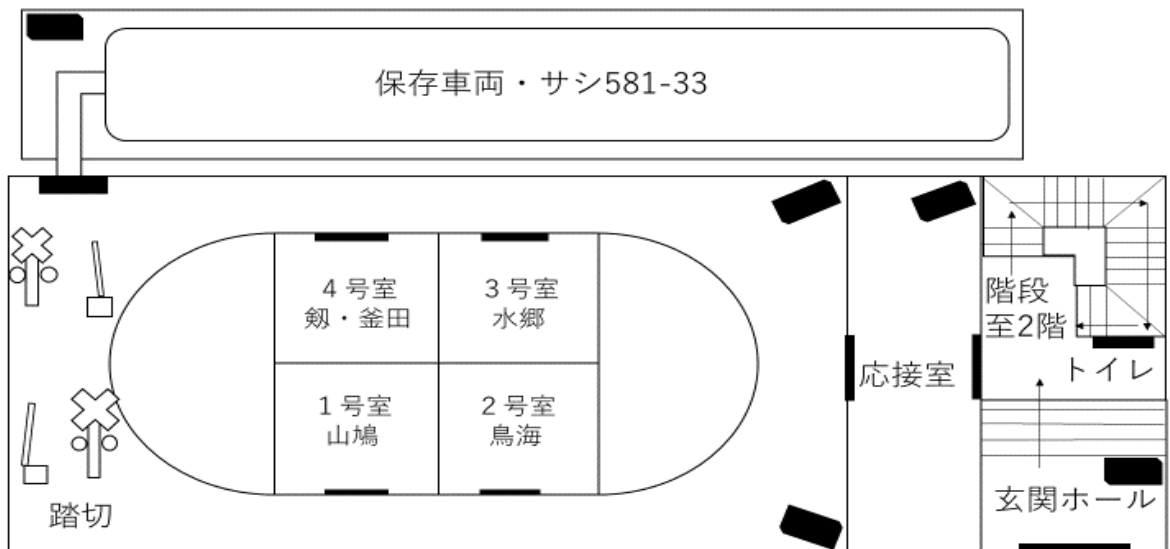
杉木立に私の悲鳴が響いた。

* 剣札士 —— 秋田県横手市・『電車館』

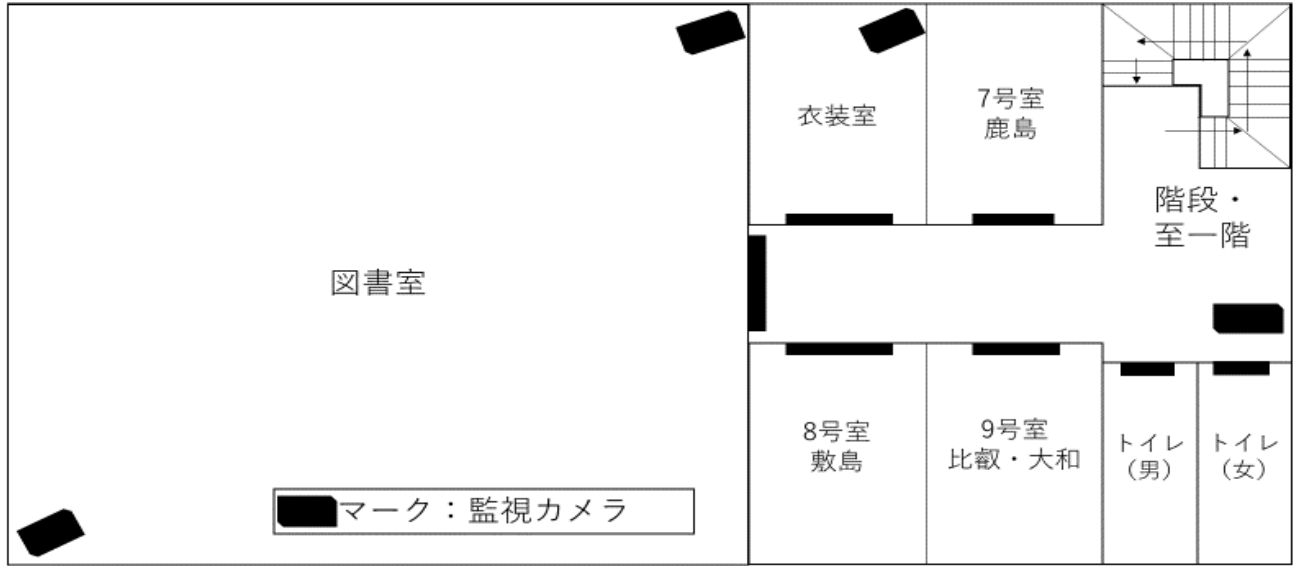
「にしても、とんだ数寄者もあったもんだな」

釜田さんは僕だけに小声で言う。僕もそっと頷き、半ば感心しながら、半ば呆れながら廊下を進んだ。廊下は二股に分かれており、僕は右側に通された(図①・②参照)。

『電車館』1階



『電車館』 2階



廊下も御多分に漏れず鉄道グッズで埋め尽くされていたが、玄関ホールや応接間とはいささか様子が異なった。

「凄じ種類の模型っすね」

水郷さんが目を丸くしている。両側の壁一面を天井までガラス棚が埋め尽くしており、その中には整然と大小様々な、古今東西の鉄道模型が並んでいる。

「ええ、『エルム模型』のみならず同業他社の模型もほぼ全てコレクションしてあります。『天賞堂』『マイクロエース』『KATO』『トミックス』……様々です。国内のみならず海外製品も収集しています」

職業柄かもしれないが、ここまで集めるとなれば収集癖を通り越して病的なものさえ感じる。最も、病的な感じを醸し出しているのは模型だけではない。

「……さつきからずっと気になっているんですが、この足元の線路は何ですか？」

「見ての通り、鉄道模型を走らせるためのものです。この館の一階全体が巨大な鉄道ジオラマとなっています。廊下はNゲージ規格しか走らせることができませんが、部屋によっては比較的大き目なHOゲージや、逆に小さなZゲージを走らせることも可能です」

僕達が歩いている床には肉厚透明なアクリル板が敷き詰められている。そのアクリル板の下には何本もミニチュアの線路が敷かれている。ただ敷かれているだけではなく、分岐したり合流したり、トンネルやら駅やら鉄橋やら踏切やら、様々なミニチュアパーツも一緒だ。ゴジラにでもなった気分だ。

「うへえ……」

大和さんは薄気味悪そうに線路と模型、そして鹿島さんの背中を見比べている。僕も何だか落ち着かない。冥王星で氷の下に大量の人間の抜け殻を見た星野鉄郎も似

たような心境だったのかもしれない。

「ここにある鉄道模型って全部走るんですか？」

「いえ、走らないものも多いです。入手した模型は製造された時と完全に同一の仕様に復元するのですが、生産終了などで手に入らない部品も多いです。現在の部品に取り換えて走らせることもできますが、オリジナリティを尊重してあえていじらないようにしています。もちろん、現在でもパーツが入手できるのであれば部品交換をして修理します」

そう言われてみると、ガラス棚の中の模型には年代物らしき代物も多い。

「また、主人はフル編成でしか模型を走らせないようにしています。だから全車両が揃っていない模型は走らせず、棚に保管してあります」

「フル編成？」

比叡さんの疑問に答える。

「列車は何両もの車両が連なって編成を作ります。例外も多いですが、それにはパターンや法則があることが多いんです。東海道新幹線は必ず16両編成だとか、山手線は11両編成で例外は無いだとか、ですね。1両でも欠けた状態では実際と異なる編成になってしまい、再現性という観点で劣ります。恐らくそれを良しとしないのでしょう」

「めんどくせえ御仁だな。模型なんて値の張るおもちゃに過ぎねえだろ」

釜田さんの身も蓋も無い発言に少しひやりとしたが、鹿島さんは意外にも鷹揚に頷いた。

「現実と同様の編成がフル編成で、それを再現できない模型は走らせないということです。……まあ実際のところは、走行可能な模型は定期的に走らせませすよ。メンテ

ナンスなども兼ねて。フル編成という縛りでもつけないと、どれを走らせるかで延々迷って決まらないんですよ」
 鹿島さんの声も心なしか多少うんざりしているように聞こえた。これだけ鉄道に埋もれているのはいささか気が滅入るのかもしれない。廊下には窓の一つもなく、両壁も天井近くまで棚に収められた鉄道グッズ尽くしだから猶更だ。

「鹿島さんも鉄道がお好きなんですか？」

比叡さんがさらに質問をぶつけた。鹿島さんは静かに首を縦に振った。

「元々は旅行好きですが、この職に就いてから段々好きになりました。人並みにしか知りませんし、この館はさすがにやりすぎだと思えますけど。あ、模型については職業柄人一倍知っているつもりではありません」

鉄子なのは少し意外だった。どちらにせよこれだけの鉄道用品やら模型やらに囲まれて仕事をしていたら、否応でも鉄道の知識は身に着くに違いない。

部屋の前に着いた。ドアの部分だけ模型棚が無く引込んであるが、そのドアもまた奇妙な物だった。

「何だか見覚えのあるドアですね」

僕は少し面白がりながら言う。見覚えがあるどころの話ではない。どう見ても鉄道車両の先頭部分のドアだ。窓が無い室内の様子は分からない。

「開閉はこのボタンを使います」

鹿島はそう言い、ドアの右横にあるボタンを指す。ワンマン運転を行うローカル線なんかによくある『あける』と『しめる』のボタンだ。

「JR四国で使われているボタンと同一ですね」

「観、分かるのか。恐ろしい奴だな」

後で気付いたがJR四国以外にもJR東日本、JR北

海道など異なる会社で使われている異なるメーカーのボタンが各部屋のドアに設置されているみたいだ。デザインが違うだけで役割は同じだ。

『あける』のボタンを押すと、ドアが作動音と共にゆっくりと両側に開いた。すると向こう側に現れたのは同じような両開きのドアだった。

「列車の連結を再現したドアです。まずはボタンを押した側の貫通扉が開き、次に反対側の貫通扉が開きます。そして両側から幌が伸びて連結、通路になります(図③参照)」

大和さんが姉の方を見た。

「貫通扉っていうのは、車両と車両の間を行き来できるように結ぶドアのことね」

「大和さんの言う通りです。車両と車両だけでなく、異なる列車同士の間も行き来できるようになったりします。このドアみたいな構造を持つ車両としては『成田エクスプレス』用のE259系、『サンライズエクスプレス』用の285系、『こうのとり』『きのさき』『まいづる』など北近畿地方の特急に使われる287系などがあります」

僕は補足し、背後の模型棚を指す。ちょうどE259系の模型が展示されていた。先頭の運転席の真下が両開きの貫通扉となっていて、そこに大きく飛行機のマーク、NEXの文字がペイントされている。

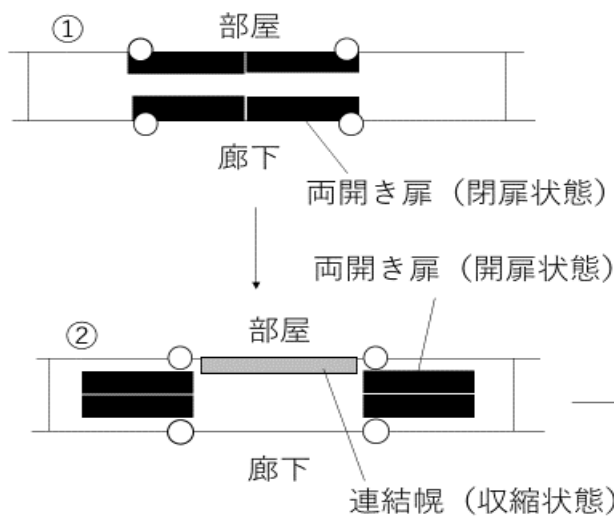
「観さんのおっしゃる通りです。このドア機構は583系の先頭部分の機構をベースに、センサー類やモーターなどを独自に付け加えて完全自動化したものです。イメージとしてはE259系に極めて近いですね」

お喋りをしているうちに廊下と部屋が連結された。

「ここは4号室です。二人部屋となっておりますが、誰が使いますか？」

『電車館』一階

ドア開閉システム



- ① 部屋・廊下双方の両開き扉が閉まっている状態
- ② 部屋・廊下双方の両開き扉が開き幌が展開準備中の状態
- ③ 幌が展開され、廊下と部屋が幌で接続され行き来可能になった状態

→ 図③

少し顔を見合わせた結果、僕と釜田さんで使うことにした。中に案内されるとまともや度肝を抜かれることになった。

「これ、24系寝台のですか？」

鹿島さんは今度は首を横に振る。その表情はほとんど変わり映えないが、どこか自慢げにも見える。

「廃車になった20系寝台客車の二段寝台をそのまま移植しました。元々は国鉄で『あさかぜ』などに使われていたものだそうです」

20系といえは俗に言う日本の元祖ブルートレインだ。高度成長期に活躍し、「走るホテル」として人気を集めた。部屋の片側に固定された二段寝台は、過去の栄光を今に伝えるには十分だった。

「20系のものでしょうか、そんな貴重なものを手に入れるのは大変だったのではないですか？」

「入手経路は存じませんが、廃品をタダ同然で貰ってきた、みたいな話を主人から聞いたことがあります」

こうやって話を聞いているといつまでも終わらない。しびれを切らした釜田さんは荷物だけ置いて廊下に戻ろうとしたが、僕はこのびっくり屋敷の虜になってしまい、まだ動きたくなかった。最初はあれだけ渋っていたのに、我ながら現金なものだ。

「シャワーとトイレはここのです。これは24系のレプリカですね。水タンクごと同じメーカーに発注して作らせたそうで、本物同様に20分くらいしか使えません」

トワイライトエクスプレスと全く同じものだ。大和さんも懐かしそうに見ている。

「レプリカというと、廃車発成品が手に入らなかったんですね」

「ええ。どうせなら実際に24系で使われていた本物を

使いたかったらしいですけど」

寝台にシャワーに、全部鉄道車両と同じにしないと気が済まないらしい。

「では、次の部屋にご案内します」

「ああ、鹿島さん。最後に一つだけ。これってもしかして……？」

僕はさつきからずつと気になっていたものを指差した。部屋に入った時、真つ先に目に飛び込んだものだ。

「209系の運転台です。レバーやボタンくらいなら本物同様に動きますよ。保安装置とかライトとかワイパーとか、そういうのは接続する先のメカが無いのですがに動きませんけど」

部屋の奥に堂々と鎮座するのは列車の運転台だ。運転台の奥、本来の鉄道車両なら前面の窓ガラスがある部分にはテレビがある。テレビで列車の前面展望でも流したら本当に運転している気分になれるだろう。スイッチ類は一切光っておらず、死んだ機械のようだ。

「マスコンキーを差し込んで起動させたら今にも動き出しそうだな。教習センターにもあったな、懐かしい」

そういえば、僕もこれで釜田さんにあれこれ教わった。思えば随分前のような気がするが、まだ数年前のことだ。足元で何かが動いた。僕がいじった運転台は、どうやら床下の鉄道模型に繋がっているようだ。赤とクリーム色を組み合わせた国鉄特急のミニチュアが走り出した。

*碓氷瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

右足首を起点に、ズキズキとした痛みが神経を伝う。少し曲げると痛みが耐えかねて声帯がびくりと跳ねる。どうしよう、完全に足をくじってしまった。

何か助けになる物は無いかと周りに視線を走らせる。

すると、幸いなことにそこそこ太さがある折れ枝が目に入った。膝立ちで歩きながらようよう近付くと、どうにか杖代わりに使えそうだ。

絶え間ない痛みを堪えつつ、枝にしがみつきのながらどつこらしよと立ち上がる。立ち上がってみると大きく痛むのは右足だけで、腰や背中などはそんなに痛めていないようだ。

これで歩くには歩けるが、豊永駅まで戻るのはとても無理だ。脂汗を流しながらどうにか国道まで出た。仕方ない、ここはタクシーでも呼んで病院に行こう。こんな山奥に病院があればの話だけだ。

立っているのが辛くて、縁石に腰掛ける。見ると、服もトラックも苔や土にまみれている。ポケットの中のスマホは幸いにも無傷だ。タクシーの番号を調べようとしていると、遠くから野太いクラクションが聞こえた。

新しめの二トントラックがハザードランプを点け、私のすぐ横で停まった。窓が開き、中から女の声が出た。

「大丈夫ですか？」
窓から身を乗り出すのは、トラックに似合わず女物のスーツに身を包んだ女性だ。黒いスーツが黒っぽい肌の色と微妙にかぶって見えた。

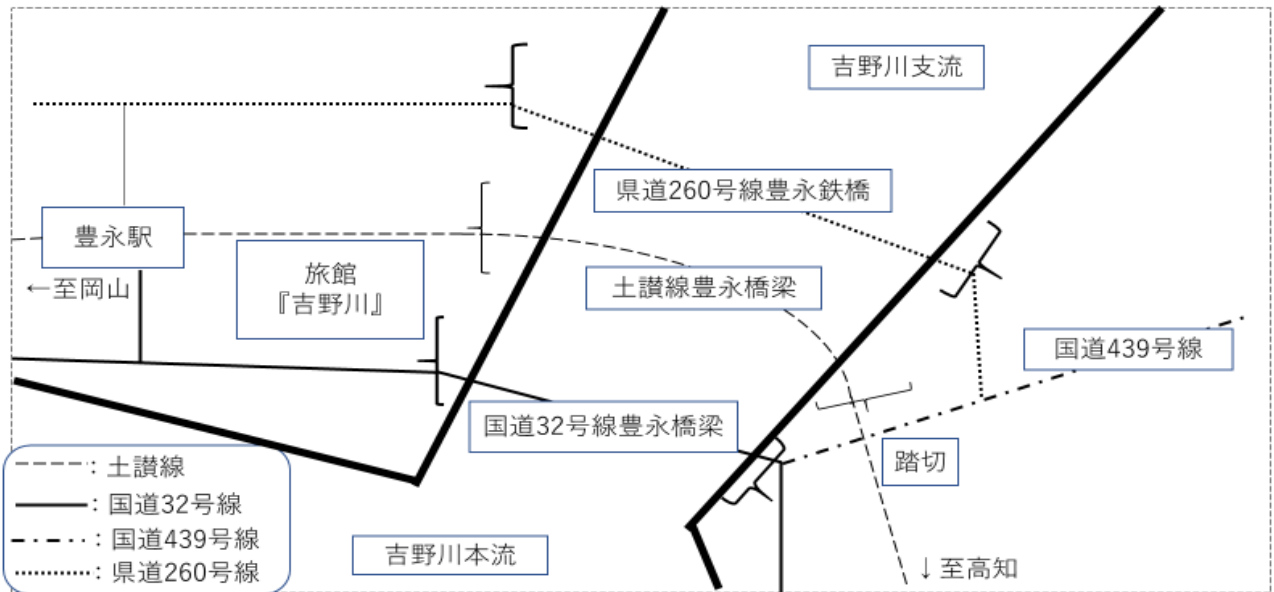
「え、あ、その、足をくじいてしまってます……」
「あらあら、それは。歩けますか？」

「……厳しいですね」

私の視線を追い、アラフォー女性の少しじつとりしたような目が私の右足を見る。小馬鹿にした、というわけではなさそうだ。元々そういう感じの顔なんだろう。

「近くの旅館まで積んで行きませうか？ とりあえずそこで氷を貰うなりすればいいでしょう」

高知県大豊町・豊永駅周辺地図



躊躇う。でも、こんな辺鄙な所にすぐにタクシーが来るとも思えない。結局はお言葉に甘えることにした。「肩につかまって、それっ！」

運転手はわざわざ運転席から降りてきて、私が助手席に収まるのに肩を貸してくれた。

女性は私がシートベルトを締めるのを待ってからサイドブレーキを下ろし、アクセルを踏む。トラックはすんなりと走り出した。

「あの橋を渡つてすぐの所に『吉野川』っていう旅館があるんです。とりあえずそこに運びますね。必要ならお医者さんの往診も呼べますし」

女性の言った通り、国道32号線の橋を渡つてすぐの所に割と大きめの建物が見えてきた(図④参照)。旅館と言うよりも小型のビジネスホテルみたいで、あまり風情のある造りではない。

「業務用駐車場には後で回せばいいか……着きました。降りるのを手伝うのでベルトを外してちよつと待つて下さい」

入口の目の前にトラックを停めると、女性はそのまま私の方に回り、ドアを開けてくれた。トラックは車高があり降りるのは難儀だったが、肩を貸してくれて助かった。

建物の引き戸をくぐると、黒いスーツに身を包んだ小太りの男性が出てきた。

「津軽さん、その人はどうしたか？」

「足を怪我してるんです。とりあえず氷と湿布で応急手当をするので、日向先生を呼んで下さい」

小太りの男性はどنگりのような目で私の足を一瞥した後、フロントの電話に早足で向かった。私はロビーのソファに座らされた。

「どこを怪我したのですか？」

フロントから男性が声を投げた。電話を取っていると、このことは、往診の医師に電話で症状を告げているのだろう。……それにしても、どこかで見た覚えのある顔だ。

「右の足首です。他はどこにも」

私は右足の靴と靴下を脱いだ。足首の辺りが真っ赤に腫れ上がっている。

「先生は10分ばあで来てくれるようです。とりあえず津軽が手当てしてくれるので、しばらく待ちよつて下さい」

安心させるように笑顔を浮かべる。その人懐っこい笑みも何だか見覚えがある。

さっきの女性が戻ってきた。湿布と氷嚢、それに松葉杖を手にしていて、手際よく貼ってくれた。

「ええと、まだお名前を聞いておりませんでしたね」

電話をかけた終えた男の人がフロントを出て私の所に来た。

「確氷です。確氷峠の確氷つて字を書きます」

「確氷さん、ですね。その足、どうしたんですか？」

「転んでしまつて」

墓参などの話をするのが面倒になり、雑な説明をする。湿布を貼ってくれた女性は入口の前に停めたトラックをどかしに行った。

「今日はどちらまで？」

「いえ、もう用事は済んだので帰るだけ……」

聞かれてから私は気付いた。この足でどこかに行くことは不可能に近い。それ以前に、墓参を済ませてからどうするかを何も考えていなかった。秋田に戻るにはまだ早いかな、と漫然と考えていたくらいだ。

「その足ではどこかに出るのも難しいでしょう。どうします、今なら一部屋用意できますけれど」

そういうえばこの建物は旅館と銘打っていた。行く当ても無いし、急ぐ用事も無い。乗せられたような気もするが、大人しくここで療養していくことにした。

宿帳に記入していると入口の向こうから誰かが来た。

「ああ、日向先生。こちらです」

医師が往診に来てくれたみたいだ。こんな片田舎に似つかわしくなく、現れたのは若い女医だった。

「大変やっただでしょう、ちよつと見させてもらいますねー」

少し間延びした方言で話しかけながら患部を調べる。

この地域だと老人を相手にすることが多いのかもしれない。

「動かしますよー」

足首をそつと動かす。私は短く呻いた。

「うーん……折れてはいないみたいです。ですが、診療所でレントゲンを撮った方がええですねー」

面倒なことになった。でも、こればかりは仕方ない。

そのまま日向先生の車で診療所に向かうことになった。

* * *

「そーいや、まだ名前を聞いていませんでしたね」

「確水です」

「確水さん、なるほど。その足はどうしたんですかー？」

日向先生はハンドルを切りながら聞く。このまま車内で問診をしてみようみたいだ。

「転んでしまったて」

「何もないところですか？」

「……山の中に母の墓があります。その墓参の帰りに転んでしまったんです」

墓参についてはあまり話したくなかったこともあり、口数が減るのが自分でも分かった。

「お母さん、こつちの人ながですね」

幸いにして、問診はそこで終わった。目的地がフロントガラスの奥に見えたからだ。

診療所は支流に沿って山の方に向かうこと、車で5分くらいのところにあった。ぱつと見では普通の民家だけ

ど、やや大きめの駐車場と診療所の看板が民家ではないことを訴えていた。

「肩、貸しましょうか？」

「大丈夫です。あの、車のドアだけお願いできますか？」

えつちらおつちらと屋内に案内されると、受付カウンターを併設した待合室に通された。

「準備をするので、ちよつと待ちよつて下さいねー」

待合室の窓からは、吉野川に注ぐ支流が見えた。既に南国の春を目前に控え、水の流れは豊かに見えた。

「確水さん、どうぞ」

声に導かれて速足のつもりで、しかし結局はのろのろとレントゲン室に向かった。冷たい寝台に横になり、腹

当てをしてみよう。暗くなった部屋の中で大仰なシャッター音が響いた。

* * *

日向先生が黒っぽいレントゲン写真を見せてくれた。

「骨に異常は見られませんでした。恐らく靭帯に損傷がありますね。端的に言うると大きな目の捻挫やと思います。

二日三日くらい安静にしていれば治りますよ。明日になれば、ゆっくりなら歩けると思います」

逆に言うると、今日一杯は松葉杖が手放せないみたいだ。三分分の湿布と痛み止め、足首の固定具を出してくれた。

帰りはタクシードった。足の怪我でなければ歩いて帰る距離だけど、まあ仕方ない。川沿いに来た道を戻る。

「今夜は雨になりそうねえ」

踏切待ちをしながら白髪の運転手がフロントガラスの奥を見上げた。西の空に雲が広がりつつある中、『南風』が車体をくねらせながら鉄橋を駆け抜けていった。

第二章 来客

* 剣札士 —— 秋田県横手市・『電車館』

4時半になるまで少しも退屈しなかった。この館に保管されている鉄道グッズは僕が想定していたよりもずつと多く、多岐に渡っていた。数日泊りがけでないとな全容を把握することはできそうにない。

4時半の少し前に僕は山鳩会長の部屋に向かった。1号室だ。ドアが二重になっているためノックをしても通じるはずがなく、インターホンが設えてあった。

「まさかこのスピーカー、車外放送用のものか……？」

「あ、剣さん」

スピーカーに気を取られていると、比叡さんと水郷さんが駆け寄ってきた。

「では、打ち合わせの通りです。インタビュは基本的に私の方で進めるので、剣さんはその時々に応じてアドバイスなり解説なりをお願いします」

「分かりました。水郷さんの方からは何か？」

「そうっすね、写真を撮ることがあるんで、その時に写り込まないように場所を変わつてもらうことがあるかもしれないっすね」

「了解です」

最終確認を済ませ、比叡さんがインターホンを押した。

やり取りの末にドアを開けてくれた。

「ああ、皆さん。時間ぴったりですな」

中に入る。僕は比叡さんの隣にある椅子に通された。

どうやら何かの車両の運転席に使われていた補助椅子のようだ。

山鳩会長の部屋は僕の部屋とそこまで変わらず、鉄道グッズが壁を埋め尽くしていた。当の本人は鉄道のレールを背景にしつつ、どっしりした机の向こうにゆったりと座っている。

「この机は旧国鉄本社から貰ったものでしてな。国鉄総裁も使っていたものなんだとか。後ろのレールは、新幹線用の太いものから操車場の細いものまで、様々です。全て実際に使われた本物ですよ」

ここまでたくさんグッズがあると、一つくらいは口から出まかせを言っているだけの様に聞こえなくもない。真偽はさておき、重厚なマボガニー製の机はもつと広々としたオフィスの方が似つかわしいような気がした。

「では、取材を始めましょうか」

山鳩会長はゆったりと足を組んだ。淡いクリーム色のセーターに横皺が走る。

「では、よろしくお願ひします。既に説明した通りですが、今回は『業界人に聞く』のコーナーのインタビューです。時間は小一時間くらいを想定していますが、前後するかもしれません。インタビューが終わり次第、休憩を挟んだ後に会長に改めてこのお屋敷の中を案内して頂いて、写真撮影を行います」

「ふむ」

「インタビューの一部始終はこのICレコーダーで録音をさせていただきます。後で文字起こしをする際に必要なので。構いませんか？」

「もちろんです」

それからいくつかの確認事項があり、ようやくインタビューが始まった。

「今回のインタビューでは業界の先端に行く人々にお話しを伺っています。今回は鉄道模型業界の雄『エルム模型』会長の山鳩宗吾氏にお話を伺います」

「雄とはまた大袈裟ですな」

和やかな笑いが起きる。僕も空気を乱さないように微笑んでおいた。助っ人としてこの場にいるが、相手も見ただ所相当の鉄ヲタだ。何が飛んでくるか分からず、少し身構えていた。

「まずは会長の来歴を教えてくださいませんか？」

「はい。わしは1950年に千葉県に生まれました。最寄り駅は京成線の宗吾参道駅、成田の宗吾霊堂と言えば分かりますかな？ わしの下の名前も地元の英雄である佐倉宗吾こと木下惣五郎から取られています」

50年生まれということは、還暦を過ぎたばかりだ。最初に会った時は若々しい老人という印象を受けたが、実年齢を考えるとかなり老け込んでいた。

「わしが鉄道好きになったのは64年の新幹線の登場が大きかったですな。あれはまさに革命だった。小さい頃から手先が器用で、よく海苔の空き缶か何かを加工して乗り物のおもちゃを作って遊んでいたようですが、この時はまだ鉄道には人並みの興味しか持っていませんでしたな。それが新幹線で一気に鉄道に集中した、という感じですよ」

男の子はえてして鉄道が好きだ。多くは成長に連れて鉄道への興味を失うが、中には僕みたいに鉄道好きのまま大きくなったり、拗らせたりする人間もいる。

「2年後の66年でしたかね、近所に京成の宗吾車両基地

地ができたのも大きかった。あの頃はまだ大らかで、近所の悪ガキとつるんで基地の中に入り込んで今ほど大事にはなりませんでした」

かっかっか、と嗤笑が溢れ出る。

「その後は色々あって鉄道会社への就職が叶わず、出版社に入ったんです。そこは現在で言うミリタリー誌を出す会社で、わしは雑誌付録の模型企画を任せられました。鉄道とは似ても似つかない分野でしたが、手先の器用さを鍛えることができましたな。しかし、そこでの仕事はそう長続きしませんでした。会社が他の出版社に吸収され、リストラされてしまったんです」

山鳩会長はカップの中身を啜った。湯気の立つそれはココアのような匂い。

「ですが、捨てる神あれば拾う神ありとはよく言ったものです。わしを拾ってくれたのが『エルム模型』の創業者、播磨社長でした。その時の当社はまだまだ規模が小さく、当時はここまで大きくなるとは思っていませんでした」

「播磨社長とはどのような縁で出会ったんですか？」

「雑誌の付録で模型を出していたのはお話ししましたよね？ あの模型を発売していた先が『エルム模型』だったんです」

「なるほど、じゃあ昔は鉄道模型以外にも模型を手掛けていたんですね」

「今でも手掛けていますよ。規模は小さいですが、主に鉄道会社の系列企業が運営する路線バスや高速バスなどの模型も作っています。ミリタリー系からは手を退きました」

山鳩会長は机の引き出しから模型カタログを出した。見るとバスの項目も多い。

「ここまで成功するとは思っていなかった、と言いましたな？ バブル崩壊後、『エルム模型』もまた苦境に立たされました。しばらくはじっと耐える日々が続きました。ですが、96年に出した商品がヒットするんです」

96年？ 何だろう。鉄道関連では地下鉄サリン事件があった翌年で、ロマンスカーEXEやJR貨物の『桃太郎』がデビューした年だ。でも、それらが会社の規模を変えるほど大ヒット商品になるだろうか？

「あるフィギュア会社とのタイアップ企画で、機関車、貨車、モノレール、その他情景部品をまとめて作るようになったんです。95年に社会現象になったアニメ、『新世紀エヴァンゲリオン』の模型です」

「エヴァンゲリオンって……ああ、あのアニメですか」
「はい。アニメと鉄道模型の組み合わせ、というのは先例の無いものでした。人やロボットなどは先方が、武器などはミリタリー系の模型メーカーが担い、我々は建物や鉄道車両を担当しました。建物を担当することになったのは意外かもしれませんが、鉄道模型は橋梁やトンネル、駅舎など意外と手広く建物のミニチュアも作っています。さすがにアニメに出てくるような秘密基地を作るのは大変でしたが、あの企画で一部の界限には広く認知してもらえようになりました」

そんなに鉄道が出てくるアニメなら時間を見つけて確認してもいいかもしれない。

「ですが、エヴァといえほとんでもなく売れたアニメじゃないですか。失礼ながら、もっと大手の鉄道模型メーカーに仕事が入るかと思いました」

「そう思われるのも無理はないでしょうな。しかし、アニメの世界観を再現するためにアニメそっくりの建物を多くこしらえる必要がありました。それを工場で大量生

産するとすれば、莫大な資金が必要となります。バブルが弾けた頃でもあったため、大規模投資に尻込みするところがほとんどだったんです。我々としても社運を賭けた一世一代の大勝負でした」

会長は昔を懐かしむように背もたれに体を預けた。柔らかな照明の色に白髪が染まる。

「エヴァ企画の遺産は建物パーツの緻密さとなって現れました。東京駅や門司港駅、梅小路蒸気機関車館の扇形車庫などは特に評価され、今なおロングセラーとなっています。ですが、鉄道模型メーカーの本分はやはり鉄道車両です」

少し沈黙する。脳内を整理しているのかもしれない。
「それについても21世紀初頭に出した模型が知名度向上のきっかけになりました」

山鳩会長はそっと立ち上がり、背後にある運転台に向かった。どうやら全ての部屋に運転台が置かれているようだ。マスコンを倒す。

「足元にご注目下さい。わが社が誇る傑作模型です」
音も無く走ってきたのは、近未来的と呼ぶにふさわしい乗り物だった。

「これは……新幹線ですか？」
「いいえ」

比較さんの問いを僕は否定した。驚きで口の中が乾くのが分かった。

「MLX001系、リニア新幹線のプロトタイプですよ」

* * *

リニアモーターカー。普通の鉄道は鉄の車輪と鉄のレールに生じる摩擦で走る。その動力源を磁力にすることで車体を浮上させ、車輪とレールの摩擦抵抗を無くし、更なる高速化を可能とする超高速鉄道だ。

「さすが親さん、分かっておられるのであれば話は早い。我が社は独自技術でリニア新幹線の模型化に成功しました。本物のリニア同様に磁力で浮いて走り、通常の鉄道模型よりもずっと速いです」

山鳩会長は自慢げに言い、マスコンレバーを更に倒した。白に濃青のリニア新幹線は一気に加速し、弾丸のような勢いでコースを何周もする。水郷さんがシャッターを何枚も切った。

「リニアは世界最速の鉄道ですから、我々が作る模型もそれ相応の速さと品質にせねばなりません。磁力を模型に使う試みは前代未聞でしたから苦心しましたが、その甲斐あっていいものができました。発売した2003年にリニアが最高速度の世界記録を塗り替えたことも広告効果をもたらしました」

「時速581キロでしたね。今の鉄輪式高速鉄道の営業最高速度は日本とフランスの時速320キロ、試運転でもフランスの時速574.8キロ。リニアの速度は桁外れです」

世界最速、というのは商品化する上でも大きなセールスポイントになったに違いない。

「リニアそのものは鉄道愛好家の間でもやや特殊なものという認識が強いものです。そのため正直なところ売り上げにはさほど貢献しなかったのが実情です。しかし我が社の知名度の向上には貢献し、その後に発表した模型は年を追うごとに売り上げが拡大していきました」

そして今に至る、ということのようだ。

「山鳩会長は鉄道愛好家でもあるということですが、この館の中にある鉄道グッズも全てご自身で集められたんですか？」

会長は片頬で笑い、首を横に振った。

「わしが集めたのはこの館全体の3割程に過ぎません。多くは先代の播磨社長が集めたものです」

さつきも聞いた名前がまた出てきた。山鳩会長はまた机の引き出しを開けた。中から引つ張り出した本は社史のようだ。

「この人が播磨社長です。この館を建てたのもこの人なんですよ」

本を最初の方のページを開くと、会社の年表の横に男の人の写真が載っている。色白でじつとりとした目がカメラを見ている。古そうなカラー写真だが、明るい茶色の双眸が鮮明に映っている。

「ん？」

比叡さんが怪訝な声を上げた。

「山鳩さんが社長になったのは2004年のことなんですね」

「ええ。10年前になりますか。……嫌な事故でした」

「事故？」

僕も比叡さんと同様に怪訝な声を上げる。

「ええ」

会長は少しためらいがちに俯いた。

「播磨社長はこの部屋で亡くなったんです」

* *

ここから先のことは記事にしないで下さい、と山鳩会長は念を押した。僕と比叡さんが頷くのを見届けて口を開く。

「今は二階に上げてしまいましたが、元々の部屋には大量の本がありました。『J.R時刻表』『J.T.B時刻表』『鉄道ジャーナル』『鉄道ファン』『鉄道ビクトリアル』

『国鉄時代』等々雑誌系のものから『日本国鉄百年史』のように史料価値のあるものまで様々な資料を保管

しています。しかしこの部屋に置いてあったのはどちらかという和我が社の資料が中心でした」

この部屋は元々は播磨社長の居室だったようだ。

「当時は今のようにインターネットもそこまで発達しておらず、文書の電子化もほとんど進んでいませんでした。わしの代になってから電子化を進めています。大きくなったとはいえ業界の中ではいつ潰されるか分かりません。効率化できるところは効率化をしなければ」

現在に照らしても随分先進的な取り組みに思える。話がずれたことに気が付いたようで、山鳩会長はわざとらしく咳払いをした。

「怠慢と言ってしまうまでもですが、この部屋に置かれていた本棚には転倒を防止する器具を何もつけていませんでした。それが間違いでした。播磨社長は本棚から何かを取ろうとした拍子に本棚を倒してしまい、下敷きになって死んだんです」

会長の目線を追うと、ベッドと反対側の壁に辿り着いた。運転台とテレビの奥にずしりとした本棚が鎮座している。金具がちがちに天井と固定されている。

「警察の調べでも事故という結論に至りました。部屋には内側から鍵が掛かっていて誰も出入りはできませんでした。その事故が起きた時、わしは専務でした。播磨社長の直属の部下で、大袈裟に言うところのナンバー1だったわけです。わしが社長の椅子を引き継ぎ、その後会長になり、今に至ります。社長職は後進に譲り、今は悠々自適の生活です」

比叡さんは播磨社長について気になったようだ。

「播磨社長も鉄ヲタだったんですか？」

「ええ、わしよりもずっと筋金入りのね。この館を建てたのも播磨社長でした。まあ、鉄道趣味についてはあま

りいい話は聞きませんでした。……良くも悪くも時代の大らかさを堪能した人間でしょう。いや、時代に盗みを強要されたと言わなければならない」

急に歯切れが悪くなった。

「亡くなったのもう時効でしょうしお話ししますが、播磨社長は俗に言う盗り鉄というものでした。撮影をする撮り鉄ではなく、盗む方です」

残念なことだが、愛好家の中にはどうしても違法な手段でグッズを手に入れる人間もいる。

「といっても、それはまだわしを括弧前の話のことです。あの人はわしよりも15歳くらい年上でしたが、戦争を生き抜いた子供でした。父親はミッドウエー海戦で、家族は空襲で亡くしたと語っていました。それが本当なら、むしろ何も盗まずに生き抜く方が困難だったでしょう。

鉄道部品を盗るのも当初は趣味的なものではなく、金物売って稼ぎにするのが目的だったそうです。だから売る相手も闇の金物商がほとんどだった」

「鉄道部品を盗むって、例えばどんな？」

「ナンバープレートなどが多かったようです。取り外し、持ち運びが簡単な金属板です。手頃だったのでしょな」

山鳩会長はまるで自分が終戦直後生き抜いたかのような口ぶりで続ける。

「しかし、いつの世にも救済者はいるものでしてな、あの紳士が鉄道部品を高く買ってくれたそうなんです。名前は分からないそうですが、当時の鉄道愛好家だったの

でしょうな。そのことがきっかけになって播磨少年は手にしているものの価値と魅力に気付く、自らもその虜

になっていったんです」

そこからは金目当てではなく、自らの趣味のために窃盗行為に走るが多かったそう。盗り鉄の先駆者と

盗り鉄の先駆者と

言えるのかもしれない。

「窃盗はやめた、と本人は語っていましたがどこまで本当なのかは分かりません。わしが『エルム模型』に入る前には同業他社から企画を盗んだとして訴訟沙汰になったこともあるようです。良くも悪くも自分の欲求や野心に素直は人でしたからな。いつか自分だけの本物の鉄道を作る、とも息巻いていました。晩年に夢を叶えたと言っていました。事故死したのはその矢先でした」

「夢を叶えた……それはつまり、播磨社長は本物の鉄道を持つていたということですか？」

僕の質問に山鳩会長はまた片頬で笑った。

「本物はさすがに持つていませんよ。恐らく、自分専用の鉄道という意味でこの館に敷いた鉄道模型のことを指したのではないのでしょうか。この館を建てたのが2003年のことでしたので。播磨社長にとつて鉄道模型は天職でもあり趣味でもあったのでしような」

山鳩会長にインタビューをするつもりだったのが、いつの間にか播磨社長について長尺を割っていた。比叡さんは巧みに話題を誘導し、インタビュー用の紙幅を埋めべく話を聞き出していった。

そこから先のインタビューは正直退屈だった。自慢話に付き合うのはあほらしく、気の置けない人間と他愛もないお喋りをしたかった。彼女のことを思い出していたのは言うまでもない。

今頃、瑞穂さんはどこで何をしているんだろう？

*確氷瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

「ほいたら、部屋に案内しますきね。この松葉杖を使うて下さい」

診療所から帰った私を待っていたのは二階の部屋だった。少し不運だが、客室は全て二階のようだ。支配人が私を気遣いながらゆっくりと階段を上がる。

「2号室が空いていますんで、そこにどうぞ。ベランダには出んちよいて下さい、柵が腐って危険なんで。修理中で部屋を閉じちよったんですけれど、急に案内するにはここしかなくて。申し訳ないことです」

「いえそんな、泊めてもらえただけでも満足です」

そこから食事について聞かれたが、とりあえず今夜と翌朝の食事を予約した。さすがに上げ膳下げ膳、というわけにはいかないため毎度毎度食事の度に一階に下りないといけないようだ。

「鍵はこちらです。あまり広くありませんが、ごゆっくりどうぞ」

2号室は階段の目の前だった(図⑤・図⑥参照)。移動距離が少なく済むのはありがたい。部屋に入ると、畳敷きの居間の奥にある窓に四国山地が壁のように見えた。窓下から列車の轟音が響いた。線路がすぐ真下にあるようだ。

板張りの広縁に置かれたソファにどっかりと腰掛ける。普段はこんな座り方がしないけど、足をあまり動かさないのだから仕方ない。コートも脱がないままだけど、今更立ち上がるのは難儀だった。

改めて窓の外を見る。確かに鉄骨造りのベランダは酷く腐食し、錆で元々の塗装すら分からなくなっている。床に開いた穴から線路が見えた。足が無傷で、ベランダも壊れていなかったら出てみたいところだ。さぞ山の空気が気持ちいいだろう。

* * *

せつかく湿布を貼ってもらったのにアレだけど、まず

はシャワーを浴びることにした。衣服の隙間から砂や苔が入り込んで気持ち悪かったからだ。立ち上がった方がマシだった。熱いシャワーを浴びるとだいぶさっぱりした。

湯浴みを済ませ、湿布を貼り直す。痛み止めが効いたのか安静にしていればそこまで痛くない。ただ動かさないうことには変わりなく、しばらくは松葉杖が手放せそうになかった。やることも無く手持無沙汰なため、とりあえずテレビをつけた。

『続いて四国地方の天気予報です。今夜は山沿いを中心に雨、所により雷を伴い激しく降る所もあるでしょう。明日の天気です。四国全域で雨、降水確率は香川県全域で80%、その他は90%です……』

天気予報が終わるとテレビショッピングが始まった。夕方でろくな番組が無い。少ないチャンネルを一回りするのに30秒もかからず、私はテレビを消した。

暇潰しの本でも買っておくんだつな、と少し後悔しながら畳に寝転がる。どうせ誰も見ていない、だらけた姿勢でもいいだろう。

こういう時に礼士さんがいてくれたら、と思わずにはいられない。自然と話が盛り上がるし、話題が尽きても飽きがこない。

怪我をして弱気になつていけるせいかもしれない。秋田を発つてから一番というくらいにあの人が恋しかった。それでも、帰る決心はつかなかった。

このまま何も決められず、糸の切れた凧のように流されて生きていくしかないのかもしれない。過去に流された時は石巻で絡まり、身動きが取れなくなった。

断末魔で目を覚ました。うたた寝をしてしまったようだ。時々、あの二匹の獣の断末魔でうなされることがあ

る。

痛かっただろう。

いや、痛みすら分からなくなるのかもしれない。

死ぬということはそういうことだ。

殺されるということはそういうことだ。

* * *

うたた寝のはずだったが、部屋の中は薄暗くなっていた。長旅の疲れが出たのか、かなり寝てしまったようだ。時計を見ると6時前、予約した時間には少し早いけど夕食にすることにした。

松葉杖を頼りにえつちらとおちらと階段を降りる。階段を降り切った目の前が食堂だ。ナチュラルな明るい雰囲気、左端のカウンターの奥には厨房が見えた。

「いらっしやいませ」

厨房の中から声をかけてきたのは私をトラックで拾ってくれた人だった。確か津軽さんという名前だったと思う。

「6時から予約していた確氷です」

「お待ちしておりました、お好きな席へどうぞ」

わざわざ奥の席まで行くのも面倒で、一番近くの席に陣取った。津軽さんは料理が忙しいのかこっちは来ないで、別の人がお冷を出してくれた。

「大変やっただしでしょう、その怪我。お大事にしてくださいね」

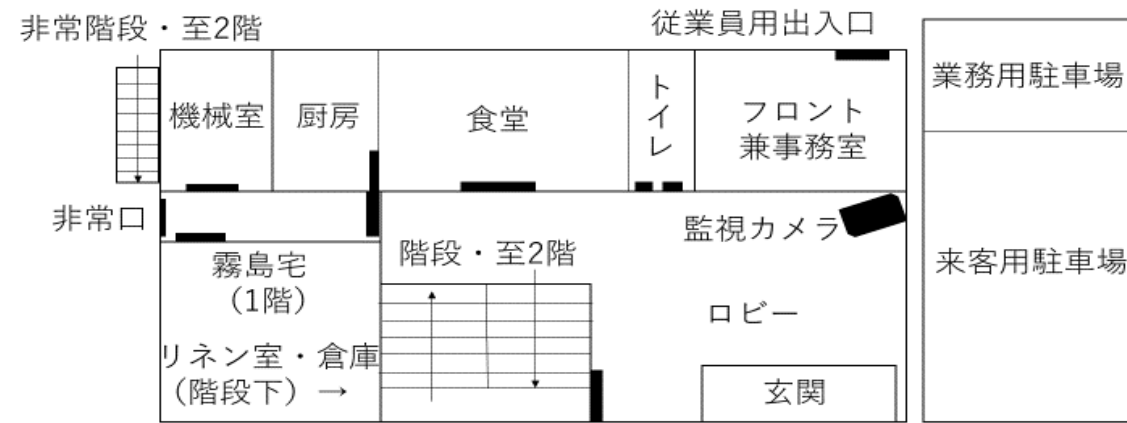
お冷を持ってきてくれたのは達磨みたいに丸々とした体のおばちゃんだった。

「あ、ひろちゃん！ 翼がそろそろ来るき、ご飯お願いしてもかまさん？」

「はい。用意しますね。ここを40分くらいに出るので、そこから後はお願いします」

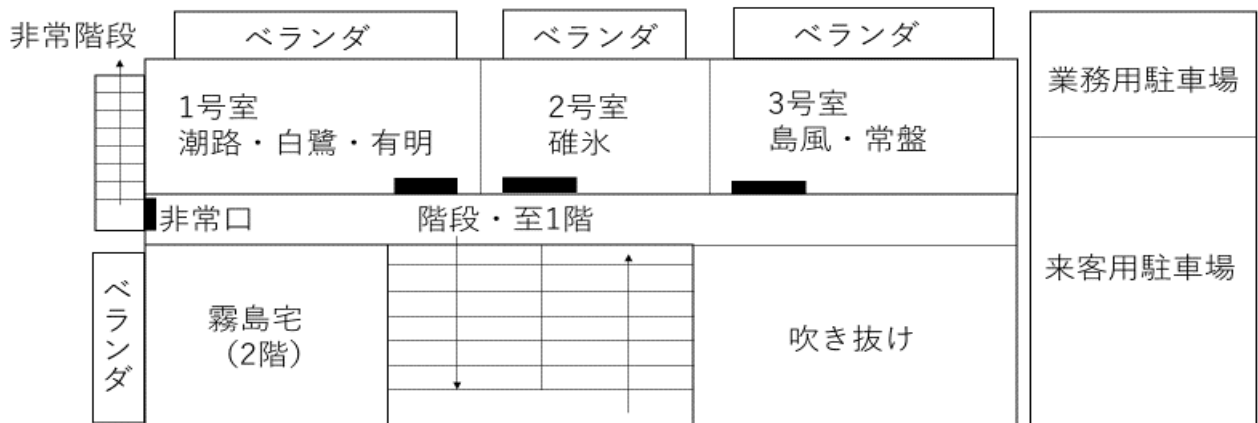
旅館『吉野川』1階

←豊永駅 JR土讃線 豊永橋梁→



国道32号線 豊永橋梁→

旅館『吉野川』2階



→図⑤

→図⑥

「美味しいのを卸してきてよ、頼むで」

津軽さんの下の名前はひろ……ナントカさんのようだ。夕食は唐揚げ定食にした。墓掃除で酷使された肉体が濃厚なたんぱく質を欲していた。

お冷を飲もうとしたが、津軽ひろナントカさんが放った言葉にグラスをひっくり返しそうになった。

「あ、霧島さん。もうすぐ食事ができるので待っていて下さい」

霧島さん、と聞いて人違いかと思った。

「ああ、どうも。……あれ!? 確水さん!？」

決して人違いではなく、オールバックの小男が私の席に近寄ってきた。

* * *

世間は狭いと言いが、こんな所で知り合いに会うとは思わなかった。私は唐揚げを、霧島さんは鰹のたたきを頬張りながら酒を酌み交わした。

「じゃあ、この旅館は霧島さんの実家なんですか」

「そうです。国交省もたまには粋なことをするもんでしてね、地元での仕事を回してきたんですよ」

この宿の支配人に見覚えがあると思ったら、あの人が霧島さんの父親だという。やはり親子だ、似ている。

「よく知らないんですけど、霧島さんのお仕事ってどのような?」

「運輸安全委員会ってこの委員です。早い話が、鉄道事故の原因究明をする仕事ですよ。この間、土電が正面衝突しかけてましたね。その調査です」

土電とは土佐電鉄の略称で、高知の中心部を走る路面電車のことだ。東京都の都電と発音が同じで、間違える人もいるとかいないとか。国交省の役人はそう補足して

くれた。

「確水さんはどうしてここに?」

霧島さんが私にお酌をしてくれる。『豊能梅』の冷た。私はお猪口の中身を飲み干し、そのままお猪口を霧島さんに渡してお酌をする。献杯・返杯という高知の文化だ。若い人は間接キスだとはやし立てるのかもしれない。

「母の墓参に。色々あつてしばらく来れていなかったの。この足はその時に転んでしまつて」

霧島さんは固定具を装着した私の右足を見て、まるで自分の足を痛めたかのように顔をしかめた。

「結婚の報告ですか? 剣さんも一緒に」

私は味噌汁を嘔きそうになった。

「あの人はいい人です」

今度は霧島さんが酒を嘔きそうになり、咳き込んだ。

「おらんつて、別れたんですか!? あんなにラブラブやつたのに」

素の土佐弁が出る。返事に困った。別れたつもりではないのだけれど、傍目から見れば別れたも当然だろう。急ぐ用事も無いため、秋田駅で襲われた事件についてかいつまんで話すことにした。

「……じゃあ、まだ別れたわけではなくてただ別行動をしている、と。いやあ、ただの早とちりでしたね」

霧島さんの照れ笑いに曖昧に微笑む。別れるかどうか迷っていることは、教えるともたうるさそうだから黙っておいた。

「雨降れば地固まるとも言いますし、ほとぼりが冷めたら結婚してもいいんじゃないですか?」

事情を知らないから当然といえば当然だが、お気楽な意見だ。でも、それもまた魅力的な意見でもある。

がやがやと他の団体客が入ってきた。若者が多い。大

学生くらいだろうか?

「先生、こっちはです」

「すいません、6時から予約していた島風です。遅くなりました」

「お待ちしておりました、奥の席へどうぞ」

先生と呼ばれているのは中年の女性だ。化粧が薄く、やや小太りな以外はこれといった特徴に乏しい。津軽さんは忙しいのか厨房から顔を出さずに声だけで案内した。

「いやだからさ、1000円高速は世紀の愚策なんだから。高速だけに金を配分したせいで他の公共交通機関がズタボロになった」

「あー、でも効果があつたのは事実だろ? 公共交通にも金を配らなかつたと言つても、高速バスは恩恵を受け

たはずだ。試算では8000億円の経済効果があつたつて話だろ?」

津軽さんがお冷を配る間も男子学生たちが関連な議論を繰り広げていた。

「ゼミの合宿ですかね?」

霧島さんがそつと横目で集団を見る。大学とは無縁だった私にはよく分からず、黙って首を傾げた。

「高速バスは確かに経路費用の削減というかたちで恩恵を受けたかもしれないけど、結局は1000円高速で発生した需要に高速道路そのものが耐え切れず、渋滞を頻

発し、高速バスも車両や人員のやり繰りでコストが高んだ例もある」

「それに、高速の需要が増えたのは普段は高速を使わな

い、つまり慣れていないドライバーが増えたからだろ? だから事故件数も増え、渋滞も増え、バス以上にトラック物流が大きなダメージを受けた」

「あー、確かにそれはそうかもしれない。だが、リーマ

ンショックで冷え込んだ日本経済を回すには観光を筆頭とする第三次産業を支援するのが手っ取り早い。観光需要を喚起するには移動のコストを下げるのが最短手段。すると国には何ができる？ 鉄道、航空、船舶は民営化してしまい、会社と協調しながらクーポンを出すくらいしかできない」

「国はそれをするべきだったんじゃないのか？ 多少手間がかかるとはいえ、交通産業全方位に向けて適切な施策を打つべきだった。というか、高速道路も民営化してやる」

霧島さんはニヤニヤしながら議論の行方を見守っている。この学生たちは国の交通政策について議論をしているみたいだけど、まさか真横で国土交通省の役人が見ているとは思わないだろう。私には何のことかさっぱり分からないけど、礼士さんはこの辺も守備範囲かもしれない。

「失礼します、生です」

霧島母が人数分のビールジョッキを持ってきたことで議論は打ち切られた。

「じゃあ、乾杯の音頭は潮路ゼミ長に」

中年女性が席の隅から言い、毛先を茶色に染めた男性が立ち上がる。服装はチャラついているかと思ったら意外と垢抜けている。

「えー、皆さん。来年度のゼミ長を担当します潮路です」

知ってるよ、と野次が飛び場がどっと沸く。

「今日から四日間のゼミ合宿、それぞれの勉学と卒論に向けて有意義なものにしましょう！ そのためのエネルギー補給ということだね、今日は呑みましょう！ 食べましょう！ 乾杯！」

「かんぱーい！」

一同はグラスを合わせる。一息に飲み干す強者もいれば、一口でおしまいにする人もいる。先生が一人、生徒が男三人に女一人という布陣だ。

「それにしても本当に山と川しかないっすね、この辺は。よく線路や道路を引きましたね」

「今日は土讃線でしたから運転しなくて済んで楽でしたけど、あれヤバイですよ。揺れが。先生も酔ってしまいました」

「土讃線は戦前の技術で線路を通し、高速は平成の技術で道路を通した。それだけで圧倒的な差があるのに、それを技術でひっくり返そうとしているJR四国には感心させられるわね。冷めた見方をすると、抜本的解決になつていない以上ジリ貧な気もするけど」

奥の女性教授の発言に一同は頷く。乗り物酔いについては黙殺しているのが何だかおかしかった。

「あの人、安政大学の島風教授ですね」

霧島さんがそっと私に耳打ちした。

「知り合いですか？」

「ええ。しばらく前に国交省の方で大仕事をやった時にお世話になりました。ちよつと挨拶してきます」

大仕事って何だろう？ 私の疑問をよそに霧島さんはひよひよいと島風教授に近寄って行った。向こうも霧島さんのことが分かったみたいで話が弾んでいる。

「確氷さんもこっちへ」

霧島さんが手招きした。酔っ払い全般に見受けられる傾向だが、特に高知の人間は大体こうだ。見ず知らずの人間とも酒を酌み交わすことを厭わない。気に喰わない相手は酔い潰すだけだ。私はあまり参加したくなかったけど、無下に断るのも角が立つ。松葉杖を手を取った。

「じゃあ確氷さん、あの時東京駅で爆弾犯をボコボコにした張本人なんですか！」

白鷺と名乗った男子学生がまじまじと私を見た。さっきの議論で1000円高速政策を擁護し、防戦一方だった生徒だ。人は見かけによらない、とでも言いたそうだ。

「まあ、あの時は必死だったもので……」

私は強張った笑みを浮かべた。この話題を出した霧島さんを横目で睨む。

「皆さんは安政大学のゼミ合宿でここへ？」

質問で話題を変えることにした。質問に答えてくれたのは有明と名乗る学生だ。度の強い眼鏡と三段腹の組み合わせで存在感を放っている。

「はい。地域交通について調べることになったんすよ」

「調べるつたつて、この辺には何もありませんよ？ 近くの大歩危とかならまだしも」

霧島さんが不思議そうな顔をする。何もない、と言いつける辺りがさすが地元民だ。

「わ、私が提案したんです。あえて交通の便が悪い所の方が実態を把握しやすい、って考えて」

そう言い、黒髪セミロングの女子大生が小さく手を挙げた。

「常盤さんにしては随分積極的にここを推したよね。驚いたよ」

ゼミ長の潮路君が言うと、常盤さんは顔を赤らめて俯いた。シャイなのかもしれない。さっきの白熱していた議論にも深入りはしていなかったように思える。

「まあ、宿は来てみたら料理は美味しいし部屋もまずまずだし、いいんじゃないの？」

島風教授の評価はそう悪くないようだ。さっきから鯉のたたきと『美丈夫』の組み合わせに舌鼓を打っている。

体型に合点が行く食べっぷりだ。

「皆さんは何のゼミなんですか？」

私はずっと気になっていた質問をした。

「交通経済学のゼミですよ。交通について経済的視点から考えるものです」

潮路君が概要を説明してくれるけれど、そう言われても字面しか分からない。

「例えば、ローカル線をどのように維持するか。大都市の通勤ラッシュや渋滞をどう解消するか。適正な競争を促すにはどうすればいいか。物流をどうやって維持するか。そういう点を考えていくんです。今のはあくまで一例で、本当はもっと難しいこともやります」

そう言われたら少し実感が湧いた。

「今回の合宿では、JR四国を対象にした調査を行っています。他のJRと違って大都市がありませんし、新幹線を敷く計画もありません。事情が特殊なので、現地で個別調査に踏み切りました」

「ふーん……それにしても、こんな時期に合宿というのも珍しいですね」

「来年度の今頃は卒業しているので、こうやって長期休みのうちにでもない合宿みたいな大きなイベントはできないんですよ。春休みは上の学年は卒業してしまうし、下の学年はまだゼミに入室してないのであまり合宿はしないんですが、常盤さんが合宿をよろうと言いついて、ゼミ長は霧島さんにも淀みなく説明する。女子大生はまた顔を赤くして俯いた。合宿を提案するような積極性があるようには見えないけど、人は見かけによらないのだから。」

「失礼します。『ダバダ火振』のお湯割りをお持ちしました」

津軽さんが高知では有名な栗焼酎を持ってきた。

「ああ、どうも……!?!」

島風教授は津軽さんから湯呑を受け取るうとして顔色を変えた。アルコールで赤くなっていた顔は信号機のようにさっと青くなり、湯呑を取り落とす。陶器が砕ける派手な音と共に中身が床にまけ、私のズボンをびしょにした。

「も、申し訳ありません！ すぐに掃除しますので……」

津軽さんが平謝りする。私は慌てて立ち上がったけど、右足を怪我していたことを失念していた。立ち上がった拍子に走った右足首の激痛に耐え切れず、慌てて左足に重心を移した。それが間違いだった。

私の体重を支えるはずだった左足だったが、まけた焼酎のせいで床との摩擦が低減していた。とても私の体を支えるには足りず、私は足を滑らせてひっくり返った。

「確水さん!?!」

「ああ、本当に何とお詫びをすればいいか……その衣服はこちらで洗濯しておきますので!」

「あ痛たた……いや、そんな大袈裟な……」

津軽さんが平身低頭の勢いで謝ってくるため却って気圧されてしまった。汚れ物はすぐに洗濯してもらったことになった、というか勢いに押されて津軽さんの提案に唯々諾々と乗っただけだ。

「災難ですね、確水さん」

霧島さんもしささかばつが悪そうだ。ぱつと見では焼酎はズボンの裾や靴下しか濡らしていないみたいだった。津軽さんは衣服を全部洗濯すると言いついて聞かず、私も最初は遠慮こそしたが押し切られてしまった。乾燥機で乾かしてくれるらしいから、明日着るには間に合うだろう。

とりあえず寝間着に着替えることにしよう。食事も済んだため、私は先に部屋に戻ることにした。したたかに打ちつけた腰が痛んだ。

* 釧礼士 —— 秋田県横手市・『電車館』

インタビュから解放されたのは5時半くらいだったけど、そこから写真撮影に付き合わされたために解放された時には6時を回っていた。僕くらいの背丈があると照明を持たせて被写体を照らすのに便利らしい。館全体を撮影して回るには時間が足りず、山鳩会長の部屋の中と廊下を撮影するだけで終わった。

「お疲れ様でした、釧さん。明日もお願いします」

比叡さんと水郷さんは慣れているためか、手早く荷物をまとめて姿を消した。やけに疲れた。大怪我で寝ている期間が長くて体力が落ちているのかもしれない。

「お、釧。ここにいたか」

釜田さんが模型で埋め尽くされた廊下を僕の方に駆け寄ってきた。

「そろそろ飯だぞ。来いよ、面白いもんがある」

面白いもの？ 釜田さんの後に続いて廊下を歩く。模様ばかりに埋め尽くされている廊下かと思つたら、曲がり角には踏切が設置されていた。警報機も遮断機も少し古い型ながら本物で、今にも動き出しそう。どこかの踏切が高架化か廢線かで撤去されたものを移設したのかもしれない。でも、鉄道模型ばかりが置かれた廊下ではかなり異彩を放っていた。

湾曲した廊下を曲がり終えると、4号室の前に出る。

さつきは気付かなかつたけど、その目の前には別の建物に続く渡り廊下への入口が現れた。

「食堂はこの先だ。きつと気に入るぜ」

渡り廊下は5メートルくらいで終わった。ドアを開けると、そこには僕の想像を超える物が留置されていた。

「これは……583系!？」

「ああ、本物だ」

クリーム色をベースに窓回りに深青色の帯を巻いた鉄道車両が鎮座していた。廊下は建屋内に入ると橋になっていて、車両妻面の貫通扉に直結していた。

「食堂車ですか？」

「みてえだな。妻面にはナシ581・333って書いてある」

ナは重量、シは食堂車のことだ。

「でも、どうしてこんな所に？」

「どっかからツテを辿って貰い受けたんじゃねえか？聞きゃ分かるだろ、入るぞ」

車内に入ると、厨房の横の狭い通路を抜けて食堂に出た。そこでまた驚かされることになった。

「あ、剣さん。お疲れ様です」

「大和さん、その恰好は……!」

彼女は深緑色の制服に身を包んでいた。

「懐かしいでしょう、トワイライトエクスプレスの車掌用制服ですよ。私はホールクルーだったので着る機会はありませんでしたけど。二階の衣装室で見つけたのを鹿島さんが貸してくれたんです」

「おお、なかなか似合ってるじゃねえか」

似合ってはいるが、583系のいささか安っぽい室内にはあまり合っていないかった。それにしても、この館には衣装室まであるのか。

「もうすぐ夕食ができますので、しばらくお待ち下さい」
常盤さんはそう言って厨房に消えた。

「驚きましたかな？」

背後から自慢げな声が聞こえた。

「この車両はもう走ることはいりませんが、食堂としてはまだ生きています。配管などは老朽化もあって交換したり、外部給電のためにケーブルを引いたりしていますから、完全に実車オリジナルというわけではありませんが」

山鳩会長にとっても本物の鉄道車両を保有することは自慢なのだろう。

「えーと、この車両はどうやって手に入れたんですか？」
そう質問を投げかけたのは聞き慣れない声だった。振り返ると、厚手の作業衣を着た男の人が座っている。側頭部の髪は黒々としているが、頭頂部には申し訳程度に胡麻塩模様のちぢれ髪が生えているだけだ。

「そういえば、剣さんにはまだご紹介していませんでしたな。こちら、わしの取引先の『三辺製作所』の敷島です。日頃からご懇意にしておりますが、一度一緒に飲もうと思ってお誘いしたら取材とダブルブックングしていたことをすっかり失念しておりました」

敷島さんは立ち上がってぺこりと一礼した。早くも一杯やったのか、肌が茹蛸みたいな色になっている。

「どうも、敷島です。えー、『三辺製作所』っていうちゃんな金属加工会社をやっています。大手に入っても良かったんですけど、何でしたっけ？ 鶏口となるも牛後となるなかれ、でしたっけ？ そんなこんなで取締役をやっています、ハイ」

笑いながら福の神のような太鼓腹を揺する。賑やかな人だ。服装のせいかもしれないが、『男はつらいよ』に出てくるタコ社長を彷彿とさせる。

「山鳩会長」

比叡さんが会長を呼んだ。立ち上がり、隣に座っている人を手で示した。

「こちら、明日の対談に参加してもらおうことになっている宝永大学の鳥海先生です」

かっちりとしたスーツを着こなした小柄な男だ。頭にはポマードの光沢が眩しい黒髪がへばりついている。

「鳥海です。宝永大の商学部で講師をしております。明日の対談ではよろしく願います」

度のきつい眼鏡の奥から視線を投げる。生真面目そうな口元には笑みを浮かべているが、トータルで見ると爬虫類のような冷ややかな印象を受けた。本人としては愛想良くしているつもりなのだろう。

「ああ、『エルム模型』の山鳩です。お話がかねがね。こちらこそ、何卒」

双方の少しぎこちない反応を見ると初対面のようだ。いや、山鳩会長は顔だけは知っているのか？ そうこうしているうちに厨房からいい匂いが漂ってきた。

「お食事の用意ができました」
また聞き慣れない声だ。

「おお、羽黒さん。そのまま運んでくれますかな」
「はい、すぐに」

お手伝いさんなのだろうか、エプロン姿の若い女性が料理を手に厨房から姿を現した。

「こちら、お手伝いで雇っている羽黒という者です。住み込みではありませんが、週一で通ってもらって館の維持管理などを任せています。今日は臨時で来てもらいました」

「羽黒華です。皆さんの滞在をサポートします。何かご用がありましたらお申し付け下さい」

若いとは思ったが、社会人になって日が浅いのかも

れない。あどけなさが残る顔に僕と同じくらいの垂れ目が目立った。

「食事なら運ぶのを手伝いますよ」

大和さんが立ち上がった。列車内で食事を運んでいたし、昔取った杵柄というやつかもしれない。

* * *

ここまで鉄道一色に染まった館のために半分予想していたことだったが、夕食のメニューも鉄道に関係するものだった。オードブルの前菜は帆立貝柱とサーモンのマリネで、それぞれの身の色が組み合わさって紅白みたいだ。

「寝台特急『北斗星』の食堂車、グランシャリオのディーナーメニューを再現したものです。レシビは門外不出ですから見よう見まねでして、味の保証はしかねますがな」

山鳩会長がまた自慢げに笑う。

「けっ、自分で作ったわけでもねえくせに。それにしても肉厚で旨そうだな、この帆立」

釜田さんが僕にだけ聞かせるようにそっと悪態をついた。鼻持ちならない相手という認識を下したようだ。僕はそっと苦笑いを浮かべてなだめた。

テーブルは四人掛けで、明日のインタビュウの打ち合わせをするグループが固まった以外は三々五々に適当に座った。敷島取締役と羽黒さんが同席し、僕のテーブルは始終賑やかだった。料理はフランス料理のコースで、オードブルの次は魚料理。牡丹海老と鱈のワイン蒸しは、赤ワイン風味のソースと合わせるとコク深い。

「へえ、じゃあ羽黒さんはまだ大学生なのか」

「そうなんです。ここは週一で掃除をするだけの楽なバイトなので。下手に模型とかに触ったら後が怖いんですけど」

それくらいの仕事なら大学生にも務まるだろう、と思つたがこの館全体を一人で掃除するのは骨折りだろう。

「ふうん、若いのに偉いねえ。僕だったらこんな……ああ、いや」

敷島取締役はわざとらしく山鳩会長の方を振り返り、先を続けた。

「こんな奇妙な館を任されるのはごめんこうむるよ」

羽黒さんは俯いて必死に笑いを堪えた。程よく肉がついた背中が小刻みに揺れる。

「確かに……ふふっ、最初はびっくりしましたけど、慣れたらどうってことはないですよ。コレクションの類は何も管理しなくていいので」

「じゃあ、電車とかには何にも興味がねえのか」

釜田さんが口を挟んだ。

「ええ、全然。電車に名前があることすら、この館で知つたくらいです」

「名前……ああ、形式のことかな？」

さすがにこの女子大生も『のぞみ』『ひかり』『こだま』くらいは知っているだろう。0系とか500系とか、そういう形式を知らないのは無理もない。この館では珍しいことに、ただの一般人のようだ。

「大学では何を？」

「あ、社会学部で文化人類学をやっています。方言の研究がしたくて文学部を目指したんですけど、落ちちゃつて」

おじさん三人に囲まれながらも彼女は屈託なく笑う。

いつまでも彼女を質問攻めにするのは可哀想な気がしておじさん最年少の僕は敷島取締役に話を振った。

「三辺製作所とはどのようなものを作っているんですか？」

よくぞ聞いてくれました、と言いたげにタコ社長はプラスチック製の椅子の上で座り直し、付け合わせのアスパラガスを口に放り込んだ。

「えー、ウチは金属加工がメインの仕事でしてね、ハイ。まあ早い話が模型を作る機械、これを作っているんですよ。だからプラスチック製品を製造するラインの部品がほとんどで、何も模型会社にはかり納入しているわけはないんです、ハイ」

「なるほど、『エルム模型』との付き合いもそれ絡みか」

「えー、そうなんです、ハイ。と言っても、エルムさんとの付き合いが出来たのはここ10年くらいの話なんです。とびぬけて長い付き合い、というわけでもないです。元々はウチに仕事を仕込んでくれた親方の会社と取引をしていたんです、ハイ」

そこでふと、ごきげんだった顔が急にしおらしくなつてしぼんだ。

「親方の会社が10年前に火事になってしまつて、それでウチとの取引に切り替ええたんです。元々、ウチの会社は親方の会社を暖簾分けしてもらったものなんです。親方の会社は船頭を喪つて火事から立ち直ることができずに廃業、それに合わせて生き残った人員と設備、社名を引き継いだんです、ハイ」

話しぶりから察するに、その親方というのは火災に巻き込まれてしまったのだろう。

「そりや大変だったな。辛かっただろ」

「いえ、こんなことでめめそしていたら天国から親方が雷を落としますよ」

敷島さんは気丈に笑つた。羽黒さんはそっと立ち上がり、次の料理を取りに向かった。

「羽黒さん、赤ワインを。冷蔵庫に入っていますので」

「はい、ただいま」

山鳩会長はサッポロクラシックを飲み干し、ほんのりと赤らんだ顔で女子大生に頼んだ。同席している島海先生もビールグラスを空にしていた。

「ただ、親方が熱心に取り組んでいた事業を手放すことになったのは今でも残念でなりません。自分の会社でやるには大きすぎて、身の丈に合わないので手放したことは正解だと思っっていますけどね」

「事業って何ですか？」

僕は何の気なしに聞いたけど、その答えは予想外のものだった。

「鉄道車両を作っていたんです、ハイ」

* * *

羽黒さんと常盤さんが手分けして肉料理とパンを配膳する。牛フィレ肉のソテーと野菜をマスタードソースで味付けしたものだ。

『牛フィレ肉のソテー 大地の野菜添えマスタードソース』北斗星の車内ではそう呼ばれていた一品です。肉を地球に見立て、12時の方向から時計回りに盛られた野菜は流れ星、満月、太陽、三日月、地上の森をイメージしているものです」

山鳩会長はまるで自分が監修したかのように解説する。とりあえず僕は流れ星と星形に切り抜かれた人參とヤングコーンを口に運んだ。

「ん……結構マスタードが効いていますね」

つんとした辛みも赤ワインと合わせるとますますの塩梅だった。

「それで、鉄道車両を作っていたというのは？」

僕は話の先が気になって促す。タコ社長は半月状に切られたカボチャを食べていた。三日月と呼ぶには少し無

理がある形状だ。

「えー、鉄道車両を作ると言っても、大手のようなものではありません。ウチが手掛けていたのは鉱山用のトロツコとか、遊園地のミニ電車とか、そういうのです。新幹線とか通勤電車とか、そういう本格的なものではないんです、ハイ」

「それでも大変だったろ？」

釜田さんが肉を頬張りながら聞く。断面から薄い赤みが見えた。焼き加減はミディアムレアのようだ。

「そうなんですよ、ハイ。正直言って持て余し気味の事業でした。他の会社に事業を売り払うことも考えましたけど、火事の後処理ついでに事業廃止に踏み切りました」

鉄道車両を作るといっことは大仕事だ。日本では川重や日立などの中々大規模な会社が担うことがほとんどだ。

パーツごとに見れば三菱電機や東芝など、他の大手が関わってくることも多い。

「えー、事業規模としてはかなり小さいものですが、それはそもそも需要が大きくないからなんですよね、ハイ。親方は火事で死ぬ直前に車両を作って納入したらいいんですが、それも数年ぶりの発注だったみたいで……火事でデータも全部焼失してしまって、どこに発注されたのか、どのような車両が発注されたのか、どれくらい発注されたのか、何一つ分かりません」

羽黒さんは地上の森に見立てられたブロッコリーをかじりながら口を開いた。

「あの、こんな事を聞くのは不謹慎かもしれませんが……火事の原因は何だったんですか？」

僅かに車内に緊張が走った気がした。敷島取締役が顔を強張らせたせいだろう。躊躇いの末に教えてくれたのは、想像を超えた原因だった。

「……放火、らしいです」

「放火!? また物騒だな」

満月に見立てられた大根を食べようとしていた手を止め、釜田さんがまじまじと敷島さんの方を見た。

「あの、ご、ごめんなさい! そんな話だとは知らなくて」

「ああいやいや、羽黒さんは何も気にする必要はありませんよ、ハイ」

女子大生はべこりと頭を下げるが、取締役はぶんぶんと首を横に振り、そして寂しそうな笑みを浮かべる。

「犯人は捕まったんですか？」

僕の質問に取締役はまたぶんぶんと首を横に振る。

「警察もかなり頑張って捜査してくれたんですがね、どうも……」

お茶を濁しながら、敷島さんはなぜか山鳩会長の方にちらりちらりと視線をやっている。もしかして、と僕は更に疑問をぶつける。

「その事件、容疑者はいたんですか? いたとしても逮捕に至らなかったということは、逮捕するにも決め手に欠けたんでしょうけれど」

敷島取締役の赤ら顔が更に赤くなった。

「凶星ですか。社長、もう一杯いかがですか?」

僕は先を促すかのように赤ワインを注ぐ。フランスはボルドー・メドック地方のシャドー・ルデンヌだ。これも『北斗星』の車内で供されていたものなのだろう。

「内密に願いますよ」

敷島さんは今までになく低い声で囁き、そつと顎をしやくった。その先にいた人物が容疑者だったと理解するまで数秒かかった。

「山鳩会長が放火の容疑者だったんですか?」

敷島さんは小さく頷いた。顔の赤みは消え、タコみた
いな顔ではなく米ナスみたいな顔になっていた。

* * *

事の経緯を山鳩会長に聞こえないような小声で説明し
てくれた。まとめると次のようになる。

2004年10月、敷島さんの恩師である三辺治作氏
が運営する『三辺製作所』の工場で火災が発生した。工
場は三辺一家の住居と社員寮も併設しており、三辺氏は
住居寝室の焼け跡から遺体となって発見された。他にも
多数の怪我人が発生したという。

「火元は事務室でした。取引先や注文履歴、新商品など
の情報を保管したりする役割も担っていて、ちょうど親
方の寝室が隣接していたんです。石油ストーブを置いて
あった辺りの燃え方が激しかったので当初は失火として
捜査されたんですが、調べたところだとストーブの燃料
は空だったそうなんです、ハイ」

「なるほどな、それで放火と睨んで捜査したってわけだ。
しかし、どうしてあの爺さんが容疑者になるんだよ？」

釜田さんが隣のテーブルに座る館の当主にちらりと目
をやり、先を促す。敷島取締役につられて小声になって
いる。

「工場を燃やして三辺親方を殺すような動機を持つてい
る人が我々の中になかったんですよ、ハイ。そこで警
察は取引先を当たっているうちに、別件で事情を聞いて
いた山鳩会長、いや正確には放火される直前に事故死し
た播磨前社長に行き当たったんです」

別件、というのは先代の播磨社長の事故死のことだろ
う。すると当時の山鳩会長の周りでは立て続けに不審死
が二件も発生したことになる。敷島さんは少し興奮して
きたのか、段々と声量が上がっていった。

「変でしょう？ 播磨前社長が事故死した直後にウチが
放火されて親方が焼け死んだ。どっちも山鳩会長と関わ
りがあります」

「そうですね、わしを疑うのは無理も無いことだ」
いつの間にか山鳩会長が僕達のテーブルの真横に立っ
ていた。聞こえていたようだ。少し気まずい空気が流れ
る。

「羽黒さん、そろそろデザートの準備を頼めますかな」

「あ、ひや、はい！」

あくまでも好々爺じみた口調にも関わらず女子大生は
弾かれたように立ち上がり、厨房へと速足で姿を消した。
残された僕達はそれぞれに鼓動が速まるのを感じていた。

「で、話はどこまで進みましたかな、敷島取締役？ わ
しが播磨社長の死亡事故と三辺製作所の放火の件につい
て、立て続けに警察から話を聞かれた辺りですか？」

口調は変わらないが目は笑っていない。むしろ、静か
に怒りをたたえているように見えた。

「ああ、その辺だな。どうなんだ、爺さん？」

こういう時に全く臆することがないのが釜田さんだ。
山鳩会長の視線を跳ね返ししながら、わざとなのか素なの
か神経を逆撫でするような口ぶりで聞いた。

「確かに警察に疑われはしました。それぞれの件で亡く
なった方に深い関係がありましたからな。ですが、わし
はいずれにも無関係でした。それについては警察も認め
ています」

山鳩会長はさすがと言うべきか何と言うべきか、全く
変わらない口調で話す。隣のテーブルでは鳥海先生と水
郷さんが話をしている。水郷さんがカメラを手にして笑
顔を見せているところを見ると、鳥海先生は聞き役に回
っているのかもしれない。

「播磨社長については、部屋に内側から鍵が掛けられて
いて犯人がいたとしても出入りできないこと、その他現
場の状況から事故と判断されました。三辺さんについて
は事件当時、わしにはアリバイがあった。もう10年も
前のことなのでどんなアリバイだったかはすっかり忘れ
てしまいましたがな。あと、わしにも三辺氏を殺す動機
が無かった」

密室にアリバイ、動機の欠落か。

「あの、デ、デザートをお持ちしました……」

張り詰めた空気を破ったのは羽黒さんだった。

「おお、持ってきてくれましたか。『スペシャルガトーと
ガラスの盛り合わせ』になりますな」

山鳩会長は自分の皿を取って自席に戻った。ガトーシ
ョコラの上には桃色のジュレが薄く載っていて、その上
には北海道の形にかたどられたミルクチョコレートが鎮
座している。付け合わせはバナナアイス、ミントの葉が
添えられたいちごの砂糖煮だ。

「もちろん、ウチも山鳩会長を疑ってはいません。今は
お世話になっている取引先と想っています、ハイ」

タコ社長はまた顔を赤くして弁明がましく言うと、早
速バナナアイスに手を伸ばす。僕はガトーショコラにス
プーンを伸ばした。ジュレは白桃で甘ったるいはずなの
に、過去の事件に思いを馳せる中では味がよく分からな
かった。

「食後はコーヒート紅茶、どちらになさいますか？」

常盤さんがめいめいに尋ねて回る。僕はコーヒーにし
ようかと思ったが、紅茶にした。瑞穂さんが好んで飲ん
でいたのを思い出し、紅茶に懐かしさを覚えたからだ。
どうして彼女のことをここで思い出したのか……居心地
の悪さから逃れたいのかもしれない。

運ばれてきた熱いダージリンは懐かしさよりも、彼女への恋しさを掻き立てるばかりだった。

*碓氷瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

寝間着代わりに部屋に備え付けてあった浴衣を着て、汚れ物は津軽さんがそそくさと持って行った。明日朝には綺麗にして返す、とは女将さんの口から伝えられた。「先程は津軽が大変失礼致しました。せめてものお詫びにと、ホットコーヒーをお持ちしました」

「いえいえ、ご親切にどうも」

「普段はあんなこと無いんですけどね……」

一人きりの客室、文机は隅に寄せられ布団が敷かれていた。私は広縁の椅子に座り、文机にあったお茶菓子を齧りながらコーヒーを啜った。

そういえばコーヒーを飲むのは久しぶりだ。私は紅茶を飲むことが多く、礼士さんは熱いブラックコーヒーを好んで飲んでいた。

あの人のことを思い出すと、独りぼっちの客室が妙にがらんとして見えた。部屋の隅に置いたトランクに視線が向かう。指輪はあの中で眠っている。

退屈しにぎにテレビをつけてみると、エヴァの映画が放送されていた。時間が遅いせいかクライマックス目前のようで、ここでと武器を積んだ電車が走っている様子は大作戦の直前みたいだ。……電車が目が行ってしまつた自分に苦笑を隠せない。知らず知らずのうちに礼士さんに感化されてしまつたようだ。

ロボットが敵を倒す頃には、飲みさしのコーヒーはぬるくなつてしまつていた。盛り上がるシーンなのだろうが、頭を右から左に通る過ぎただけで驚くほど何の感情

も湧かなかつた。

ふとスマホを帯の間から取り出し、メッセージを打つ。『今、どうしてる？』

特段深い意味は無い。ただやり取りをしたくなつた、それだけだ。でも、送信ボタンを押すことができなかった。

映画は宇多田ヒカルの歌声と共にエンドロールを終え、次週予告になつた。私は軽い溜息と共に、礼士さんへのメッセージ画面を閉じた。

これからどうすればいいのか分からない。その事実にも戸惑いは覚えなくなつてきたが、途方に暮れていることにも変わりなかつた。テレビを消し、布団に倒れこんだ。

最終の『南風』が線路を踏み鳴らす音が、一日の終わりを告げた。

この時の私はまだ知るはずも無かつた。事件が既に始まつていたことを。

*劔礼士 —— 秋田県横手市・『電車館』

館の二階も鉄道関連のコレクションで埋め尽くされていた。山鳩会長のご厚意で好きに見て回つていいと言われたため、客人は三々五々に見て回っていた。僕はどこから見ようか迷つたが、まずは図書室を見て回ることにした。

「敷島さんも一緒に見て回りませんか？」

本館に繋がる通路で比叡さんが取締役を誘つていたもの、鳥海先生が先客に入つていて丁重に断られてしまつていた。

「ああ、比叡さん。いや、山鳩会長と鳥海先生、それに釜田さんの4人で一緒に飲もうと誘われまして、ハイ」

「比叡さん、すみませんね。明日の対談ではよろしくお願ひします」

「あまり痛飲しないで下さいよ、鳥海先生。ペロペロの状態で対談されたらたまりませんから」

「大丈夫ですよ、私はアルコールを嗜まないのよ」

図書室には中央のソファから左右に本棚が林立し、たくさんの蛍光灯に照らされていた。ソファの前には大型テレビが置かれていて、大和さんが映画を観ていた。

「エヴァンゲリオンですか」

向かいのソファに腰掛け、話しかける。冒頭、電車が何向も地面に突き刺さっているシーンだ。庵野監督は鉄道愛好家のはずだから、このシーンにもこだわりが詰まつているのだろう。……それにしても、E231系ってこんなに頑丈なのか？

「生前、翔一君が好きだったんです」

「そうですか……」

殺された婚約者の名前を出す彼女の顔は少し翳っていた。婚約者と言っても、その内実は私欲に走ろうとした醜いものだった。大和さんがそのことをどう思っているのかは、その横顔からは分からなかつた。話題を続けようにも内容が思いつかず、CMに切り替わつた所で僕はそつと席を立つた。

焦茶色の本棚はその多くが満杯に近かつた。時刻表、鉄道雑誌、専門書、パンフレット、果ては鉄道学校の教科書まである。そんな中、僕は写真集を見つけた。鉄道の写真集ではなく、この館の建設記録のようだ。

A4サイズで、クリーム色の布張りの表紙から埃が落ちた。あまり頻繁に読まれているわけではなさそうだ。

開くと、特に何の説明書きも無い写真が何枚も掲載されているだけの殺風景な写真集だった。冒頭には鉄道車

両の台車を積んだトラックが何台も写っており、その奥には食堂車の車体を積んだトレーラーが待機している。「ん？」

計算が合わない。ここに保管されている保存車両は一両だけ、そうすれば運ばれてくるはずの台車はボギー二台だ。でも、この写真にはもつと多くのボギー台車が運び込まれている。この館のどこかに台車だけで展示するコーナーでもあるのかな？

ページをめくると、別の建設写真が掲載されている。建設に合わせて鉄道グッズも大量に運び込んだみたいで写っているトラックには鉄道のレールと枕木が何本も積まれている。レールは山鳩会長の部屋に展示されていたけど、あの部屋にある本数以上にレールが運び込まれている。

そうやってページをめくっていくうちに、建設現場背景の山に少し目が行った。建設しながら山肌を重機が抉り、建物の敷地を拡大している。そこに建物の一部を設置し、山にめり込むような館の外観に仕立てているみたいだ。

でも、そこで僕は疑問を覚えた。わざわざそんな難儀なことをしなくても、この辺には開けた土地がいくらでもある。東京の一等地とはわけが違う。それなのにどうして山を抉り、そして建物を埋め込むようなかたちで建設したのだろうか？

「この建物、男鹿建設が建てていたのか？」

鉄骨を吊り上げるクレーンに男鹿建設（株）と白抜き文字が読める。僕の実家を建てた建築会社だ。田舎の土建屋だったけど、資金繰りに詰まって倒産した。もう10年くらい前の話だから、この館は倒産寸前に受注した工事だったのかもしれない。

写真集を最後までめくると、館の完成を祝う宴会の写真があった。宴席で一番上座に座っているのは、山鳩会長の話に出てきた播磨社長だろう。じつとりとした目をしているけど、黒っぽい肌には笑みを浮かべて盃を持っている。機嫌が悪いのではなく、元々そんな風に見える顔なのだろう。横にいるのは奥さんだろうか、化粧が薄くて小太りな女性もにこやかに笑っている。

この写真集に播磨社長が死亡した時のエピソードも何か記載があるかと思っただけど、それについては何も無かった。密室にアリバイ……何というか、引っかかって頭から離れないのだ。

書かれていないものは仕方ないと思ひ直し、僕はまた写真に目を落とす。手前にいるのは若かりし頃の山鳩会長と鹿島さんだ。山鳩会長はまだ腰が曲がっておらず、髪も黒くて若々しい。鹿島さんは痩せていて、姿形は山鳩会長によく似ている。

「時間が経つとみんな変わるんだなあ……」
僕は昔からあまり変わらないと言われる。若白髪が少し目立ち始めてきたけど、体型が大きく変わっていないからかもしれない。小さい頃から体の大きさでは学校で一番一番を争っていた。

……瑞穂さんの若かった頃って、どんな感じだったんだろう？

回想から妄想への変化を楽しんでいると、ふと、部屋の隅の本棚を凝視する人影を見つけた。

「水郷さん」

僕は思わず立ち上がったって声をかけた。雑に赤く染めた髪をなびかせて、カメラマンは僕の方を見た。

「ああ、剣さん」

「どうかされたんですか？」

「大したことじゃないんすよ。でも、どうして『電車館』にこんな本が、と思っって」

彼女はそう言い、僕にも本棚が見えるように身を引いた。手にごつい一眼レフを持っているのを見ると、撮影目的で来たみたいだ。

本棚に収まっているのは文庫本だった。カメラマンの視線を追うと、僕も異質な存在に気が付いた。

「綾辻行人『十角館の殺人』？」

タイトルから察するに、緑色の背表紙の本はミステリのような『水車館の殺人』、『迷路館の殺人』と横に続いている。適当に一冊取り出してパラパラとめくってみても、何の変哲もないただの文庫本だった。

「不思議ですね。鉄道とは微塵も関係無さそうな本なのに、どうして？」

あまり場に合っているとは思えない文庫本が収まっている棚には他にもたくさん文庫本が収まっている。著者を見ると西村京太郎の名前があるから、ここはミステリ専門の棚なのかもしれない。

「西村京太郎サスペンスが大量にあるのは理解できるんですけどね」

「鮎川哲也に有栖川有栖、島田荘司……タイトルを見る限り、これらも鉄道に関係はありそうですね」

僕が何気なく取った文庫本の表紙には『無人踏切』というタイトルが打たれていた。アンソロジーのようで、多くの著者の名前が表紙に刻まれている。ミステリには疎いけど、後で暇潰しに読んでみてもいいかもしれない。

「剣さん、本は読むんすか？」

「鉄道雑誌は好きで読みますけど、こういうのはあまり。水郷さんは？」

「最近は全然っすね。マンガなら読むんすけど、こういう

う活字がみつちりの本は読むのに時間がかかって」
「そういや、瑞穂さんは若い頃にこの手の本を色々読んでいたらしい。何かの話の折に少し漏らしていた記憶がある。」

「写真はいいのが撮れそうですか?」

「ん〜……露出が難しい建物ですね、ここは。建物の中に住む所と博物館みたいなコーナーがごっちゃになっていて、設定をその場で切り替えないとムズいっす」
彼女は本には興味を失ったのか、軽く挨拶して背を向けた。そしてテレビを見ている大和さんの方に近づいていった。いつの間にか鳥海先生も一緒にいる。映画はどうやらエンドロールを迎えたようだ。2時間近くここで読書をしていくことになる。

「あれ、エヴァの主題歌って高橋洋子ひろこじゃないんですね」

「ヒロコ? ああ、あの人は普通に洋子ようこと読みますよ、

鳥海先生。95年のテレビアニメ版で主題歌を担当していましたね。今歌っているのは宇多田ヒカルです」

第三章 事件

* 剣札士 —— 秋田県横手市・『電車館』

夜が更けるのにも構わず、僕達は『電車館』を満喫していた。図書室で本を読み漁るもよし、階下で鉄道模型を心満たされるまで走らせるもよし、だ。僕は鳥海先生と共に一階の廊下で模型を転がしていた。飲み会は敷島

取締役が潰れたことでお開きになったという。

「敷島取締役は二階の部屋に寝かせました。あの調子だと、明日は二日酔いでしよう。だいぶ無茶な飲み方をしていましたから」

ディナーの頃にはだいぶ出来上がっていたのに、そこから更に飲んだらそうなるもおかしくない。

「私も釜田さんも止めたんですがね、山鳩会長が面白がつて飲ませまして。館の当主を前に私達もそんなに強く出られなかつたんです」

きつと、敷島取締役も山鳩会長に気を使って無理に飲んだのだろう。ディナーの時に張り詰めた空気になっていたのを思い出す。

「山鳩会長、何か言っていますでしたか?」

それなりに探りを入れたものの、鳥海先生は首を横に振った。脂っこく固められた髪の毛は少しもなびかなかつた。

「いえ。むしろ私達の話の聞きがっていました。私がJR北海道の問題で国交省の会議に参加した時の話や、さらにその前に運転士をやっていた頃の話などには興味津々でしたね」

「え、じゃあ先生も昔は運転士だったんですか?」

「ええ。だいぶ前の話です。剣さんを見ていると、昔の自分を思い出しますよ」

鳥海先生が走らせる貨物列車の模型が、ちょうど僕の真下を駆け抜ける。

「どこで働いていたんですか? 今模型で走らせている常磐線ですか?」

「いえ、営団、今の東京メトロの丸ノ内線で働いていました」

僕は近鉄『ビスタカー』を停車させ、線路のポイント

を切り替えて車庫に入れる。手元のコントローラー一つで線路の切り替えや列車の速度も自由自在だ。

「ですが、私は現業畑にはあまり向かないみたいでした。なので思い切って営団を辞め、大学に入り直したんです。そこで交通経済学を学び、紆余曲折を経て講師になりました」

「随分と思い切りましたね、大変だったでしょう」

『ビスタカー』を壁沿いの車庫に入れた僕は、次は何を走らせようかと視線を彷徨わせる。

「楽しんでますかな?」

背後から山鳩会長が目を細めながらやってきた。

「ええ。素晴らしいコレクションですね」

「お気に召したようですね。剣さん、カメラカーを運転してみませんか? テレビに電源を接続すれば、模型の前面展望を楽しめますよ」

「カメラカーまであるんですか。そう仰るのであれば、お言葉に甘えて」

とは言っても、僕もカメラカーが何なのかあまりよく知らなかった。細長いカメラに車輪とモーターを取り付けたものかと思ったら、予想に反して会長がガラス柵から取り出したのは昔の東海道線の車両だった。

「153系ですか」

「ええ。この先頭車両に小型カメラを内蔵しています。線路に置いて走らせれば、ほら」

十数両もある緑と橙色の電車を並べるのには少し時間がかかった。しかし線路上に並べてみれば壮観だ。日本の大動脈を走るだけの貫禄が模型とはいえ感じられる。

「テレビはどこに?」

鳥海先生が貨物列車を田舎の駅に停車させて聞く。

「応接間にありますよ。ご案内しましょう、このコント

ローラーは無線式で、館の一階ならどこからでも操作できますからな」

「無線式のコントローラーですか、珍しいですね。普通、鉄道模型のコントローラーって電流を流す線路とコードで直結していますよね？」

「ええ。鉄道模型は一般的なおもちゃのように電池で動くのではなく、線路に流された電気で走りますからな。コントローラーは必然的に線路の電流を制御するかたちになり、線路とコントローラーがコードで直結されます。しかし、それだと操作する人がほとんど動けないという欠点があります。感度を改良するのかなり苦労しましたが、持ち運びできるコントローラーは我が社の自信作です」

コントローラーの話で盛り上がっているところを見ると、鳥海先生も鉄道模型にはそれなりに精通しているみたいだ。そのままお喋りとしつつ応接間に行くと、羽黒さんが帰り支度をしていた。

「今日はお疲れ様でした。また明日、お願いしますね」

「あ、あの、山鳩会長。明日は何時くらいに……？」

「朝食はひばりが用意しますので、昼食から準備をお願いできますか？ 10時くらいに来てもらえたら」

「は、はい！ 承りました」

女子大生は少しおどおどした態度を変えず、そのまま一礼して館を後にした。食堂車での一件で怖くなったのかもしれない。山鳩会長は彼女を見届け、そしてテレビに近付いた。

「さすがにカメラカーの映像まで無線でテレビに転送することはできませんからな」

そう言いつつ、慣れた手つきでケーブル端子をテレビとコントローラーに接続していく。手持無沙汰になった

僕は改めて応接室の中を見回した。模型は一両も無く、ガラスケースの中にはブレーキハンドルやマスコンキー、切符などの小物類が陳列されている。

「各部屋にある運転台つて、マスコンキーを差し込んだら起動するんですか？」

はっはっは、と会長は嗤笑した。

「剣さん、面白いことを仰いますな。確かにあの運転台は全て本物ですが、接続する先の鉄道車両がありませんからな。マスコンキーを差し込んで何も起きませんよ」
なおも笑いながらテレビの電源を入れる。すると、複数の画面が同時に現れた。

「普段、このテレビは監視カメラと直結してましてな。この館には貴重なコレクションが多数ありますので、防犯もしつかり行わねばなりません」

監視カメラの映像はあまり見せてくれず、素早く画面をカメラカーのものに切り替える。少し映像は粗いけど、はつきりと線路や建物のミニチュアが映っている。

「発車します」

会長はそろそろとコントローラーを操作する。すると、少し間があった後にテレビ画面が動き出した。列車はどんどん加速し、ターミナル駅や鉄橋、畑、コンビナート、目まぐるしく変わる景色の中を走り抜ける。

「この鉄道模型で廊下を一周させるのにどれくらいかかるんですか？」

僕はふと気になって会長に尋ねた。

「そうですね……速度にもよりますが、少なくとも3分はかかるでしょうな」

山鳩社長は一つ大きなあくびをして、コントローラーを僕に手渡した。カメラカーは廊下にある踏切の真下を走っている。レールの継ぎ目が大きいのか、ガタガタと

画面が不規則に揺れて画像が一層粗くなった。

「明日も取材がありますし、わしはこの辺で失礼します。片付け場所はひばりに聞けば分かりますので」

「ああ、本日はありがとうございます。おやすみなさい」

「明日の対談、お待ちしております」

僕と鳥海先生はめいめいに挨拶を返した。その後もしばらく応接室にくすぶつて模型を転がしていたけど、そろそろ1時を回ろうかという頃によく解散した。

* * *

部屋割りは山鳩会長が1号室、鳥海先生が2号室、水郷さんが3号室、そして僕と釜田さんが4号室だ。大和さん達は二階の部屋に通されたみたいだ。そこまで鉄道が好きなのでもない面子に、一階の鉄分マシマシの部屋はしんどいだろう。水郷さんは部屋の撮影を続けているのかもしれない。

寝台特急さながらの狭いシャワールームで湯浴みを済ませ、寝台に横になる。

「トワイライトエクスプレスに乗った時を思い出すな」

「釜田さん、あの時も上段でしたよね」

「お前、でかいからなあ」

僕は天井の電灯を消す。明かりは寝台に備え付けられた読書灯だけになった。

「あの旅行は楽しかったな、事件は大変だったが。剣も良かったじゃねえか、確水に受け入れられて」

僕は枕を直し、下段寝台に横になった。

「何を意地張ってんのか知らねえが、早く仲直りしろよ。ガキの喧嘩と違って、大人になってからの仲違いは後に響いて辛いぜ」

「だから、喧嘩をしたわけじゃありませんよ。……珍し

いですね、釜田さんがそういうことを言うなんて」

「そりゃ、いつまでもお前の不景気な顔を見てたくねえからな。確氷と一緒にいる時のお前が一番カッコいいぜ」

僕はフンと鼻を鳴らした。

「僕はそんな男じゃありませんよ」

「そうか？ お前、店にいる時の確氷のこと、あんまり知らねえだろ。刃のことを話題にするとな、ちよつとだけ笑うんだよ、あいつ。顔を赤くして照れたり、反応は日によつて様々だが。幸せそうだ」

「……彼女が僕と一緒にいて幸せなのは分かっていますよ。今までも、そしてこれからも」

「なら話は早いな。要するに、いつまでも意地を張るなつてことだ。手遅れになつても知らねえぞ」

「手遅れ？」

僕は思わず起き上がった。

「落ち着け、何かが起こるなんて一言も言つてねえよ。ただ、何も起きないとは言切れねえだろ？ 今までもそうだった。俺達は事あるごとに事件に巻き込まれてきたじゃねえか」

僕は押し黙り、また布団を被る。

「お前、霧降荘で言つたよな？ 確氷を守るために謎を解く、つて」

ニユアンスはそんな感じのことを言つた覚えがある。「確氷は強い女だ。だが、お前がいるのといかないのとでは大違いだ。分かるだろ？ あいつは踏ん切りがいいし、

度胸がある。だから東京駅でも秋田駅でも力技でお前を守つた。だが、頭脳はどうだ？ あいつは決してポンクラじゃねえが、殺人だとかそういうのはお前の領分だ」

釜田さんは少し言葉を切つた。

「つまり、何が言いたいんですか？」

「お前と確氷は良いコンビだから、早くよりを戻せ。そう言いたいんだよ。何が起きるか分かんねえからな。待つてるなんてかつたるい、お前から迎えに行け」

また言葉を切つた。

「俺と白雪が辿つたのと同じ轍を踏んで欲しくねえんだよ。お節介なのは分かつてるが、考えてくれ」

「……あれ？」

「ん？」

僕は怪訝な声を上げ、押し黙つた。

「……何か、揺れてませんか？」

「ええ、そうか？ 地震か？」

枕元のスマホを開き、気象情報のアプリを開く。しかし、何度か更新したものの地震は発生していなかった。時刻は1時半を回つたくらいだ。

「本当に揺れたのか？」

釜田さんもスマホを開いたが、やはり地震の情報は入つていない。揺れもかなり小さかつたし、勘違いだったのかもしれない。段々自信が無くなつてきた。

「……ええ、たぶん」

「おいおい、しっかりしてくれよ。飲み過ぎは禁物だぜ」

自分で言つておいて釜田さんは苦笑した。「嫌なもんだな、居酒屋をやつてこんな説教を垂れるなんて。俺もすっかり爺臭くなつちまつた。寝るぜ、おやすみ」

「……おやすみなさい」

少し飲み過ぎて目が回つたのを地震と勘違いしたのかもしれない。僕も目を閉じて、眠りに身を委ねる。

瑞穂さん、僕はどうすればいい？

あなたを迎えに行つていいの？

それとも、素知らぬふりで待ち続ければいいの？

答への出ない問は、やがて僕の意識を眠りに誘つた。この時の僕は知るはずも無かつた。事件が既に始まつていたことを。

*大和叶——秋田県横手市・「電車館」

酔い潰れた敷島さんを8号室に運んだ釜田さんと就寝の挨拶を交わし、私は自室に戻つた。7号室は鹿島さん、私とお姉ちゃんは9号室だ。

「……この写真とかいいかもしれないっすね。山鳩会長の顔も背景のコレクションもよく写つて、発色さえ調整すれば表紙にも回せそうっす」

「オツケー、それじゃあ、記事に使う写真が決まつたら回して。注釈を入れるから。今日はこれくらいでいいから、明日もよろしく」

「ちつす。お疲れ様っす」

部屋に入ろうとすると水郷さんと入れ違いになつた。

彼女は赤毛赤毛と言われているけど、髪色はパッションピンクに近いかもしれない。

「仕事の打ち合わせ？」

「うん。雑誌に載せる写真の選定と、明日のスケジュール確認」

「ふーん」

私は服を脱いでジャワーを浴びる。

「お姉ちゃん、メイク落とし貸して」

「自分のを使えばいいじゃん」

「じゃあ化粧水」

「だーめ、あれ高かつたんだから」

「ケチ」

「はいはい、ケチで結構」

小さい頃から何度も繰り返し返してきたやり取りだけど、えらく久しぶりの気がする。

「懐かしいなあ……」

トイレと一体型になったシャワーは、かつての職場のものを思い出させる。

「叶が乗っている間に取材して、あんなとこやこんなとこを見せてもらおうと思ったのに」

「どこよそれ」

けらけらと笑いながらお湯を止める。

「でも、トワイライトエクスプレスもいつまで走るか分からないよ?」

「え、そうなの?」

「まだ公式発表はされていないけどね。来年には引退するんじゃないか、って社内では噂になってた。ほら、今度新幹線が金沢まで伸びるじゃん? それで北陸の方を走れなくなるんじゃないかって。お姉ちゃんも乗るなら早くしたほうがいいよ」

「うーん……考えとく〜」

こりや乗らずに終わるな、と私は内心で苦笑いしながらお湯を止めた。

シャワーを浴び、自分の化粧水を塗ってから出る。お姉ちゃんは電話をしていた。

「……うん、明日には戻るから。夜の8時半にそっちに着く新幹線ね。うん、うん、おやすみ」

こんな時間に電話をするなんて、もしかして。

「今の、お義兄さん?」

「うん」

お姉ちゃんは幸せそうに笑って、真新しい結婚指輪を見つめた。私は寝支度をして部屋の電気を落とす。

「えー、ベッド、私が上?」

「だってもう酔っ払っちゃったもんね〜」

酔いが回った姉は下段で大の字になった。私はしぶしぶ梯子をよじ登る。枕元の読書灯の灯りが頼りだ。子供の頃は二段ベッドはどっちが上になるかでいつも喧嘩していたのに、これが大人になったってことなのかもしれない。

「列車の中の寝台もこんな感じだったの?」

「客室はね。私が寝た乗務員用の寝台は二段だったから、もつと狭かったよ」

私は布団を被った。硬い寝台のクッションと相まって、ますます懐かしさを感じる。

「……ねえ、お姉ちゃん?」

「んー?」

「あのさ、その……結婚って楽しいもんなの?」

「ええ? 急にどうしたの?」

下のベッドでお姉ちゃんが少し笑った。

「まあ、今のところは楽しいかな。私もまだ結婚して二か月くらいしか経っていないから、ちゃんとしたところは分からないけど。そのうち飽きてくるかもしれないし、かといって子供ができたら後戻りできなくなるかもしれないし。これから先は分からないかなあ」

「子はかすがい、つてやつ?」

「そうそうそれぞれ。まあ今時、子持ち離婚でシングルマザーとか珍しくないけど」

お姉ちゃんはいきなりお話を止めた。

「どうしちゃったの、叶? さっきからやたらと結婚結婚って、赤倉さんの件があつてから当分男は懲り懲りだつて言ってたじゃん? もしかして気になる人でもできたの?」

「私じゃなくて、職場の先輩がね」

私は当面、結婚は懲り懲りだ。年若いから焦るかもしれないけど、その時はその時だ。

「職場の先輩って……ああ、居酒屋の?」

「うん。確氷先輩って言うんだけどね、剣さんの彼女」

「へえ、あの人の?」

お姉ちゃんには先輩のことはほとんど話したことが無い。話したら色々めんどくさそうだからだ。でも、先輩は店を辞めてしまった。連絡も取っていないから、恐らくもう会うことはない。話してもいいと思う。

「それで、その確氷さんがどうしたの?」

「うん……ねえ、お姉ちゃん? 好き合っているのに別れることってあるの?」

私より少しだけ人生経験のある彼女は考え込んだ。

「あるんじゃない? 世の中にカップルなんて掃いて捨てるくらいいるし、そういう悲しいカップルが一組や二組いてもおかしくないと思うよ? どうしたの、その確氷さんと剣さんがそのタイプだって言いたいの?」

「分かんない……でも、ここ最近ずつと変なんだよね。」

お姉ちゃんが店に来た日に剣さんが秋田駅で暴漢に襲われて、それを確氷さんが助けたのよ」

その時、先輩に何があつたのかは分からない。さすがに犯人を殺してしまったという事は無いと思うけど、先輩も剣さんもかなりの深手を負った。

「あんた、いきなり店を飛び出して秋田駅に走っていったけど、あれって剣さんと先輩を助けに行つたんでしょ? そこから釜田さんも店を早じまいしてあたふたしながら出て行つたりして、随分と騒ぎになっていたけど」

「うん……でも、そこから二人の様子がおかしくなつてさ。決して破局したとかそういう感じじゃない、むしろ剣さんなんか、会えないのが辛そうなのに必死に我慢し

ている感じで……」

「それで私の取材に付き合わせることにしたのね」

「電車なら気が紛れるかと思っただけ……やっぱりどこかこう、心あらずって感じで」

下のベッドで乳白色の光が灯った。お姉ちゃんがスマホを開いたみたいだ。

「うーん……秋田駅での刃物男の事件はニュースにはなっているけど、容疑者が死亡したことしか出てない。男性乗務員一人が重体、女性一人が軽傷、これが剣さんとその、碓氷先輩のこと？」

「うん。剣さん、二週間も意識不明で大変だったんだから。私と釜田さんとで輸血して助かったけど」

「あんたO型だから、こういう時に便利よね。それで、助かってから二人は別れたってこと？」

私はうつ伏せになり、下のベッドを覗き込んだ。お姉ちゃんはまだ関連ニュースを調べている。

「そうなるんだけど、だとすると妙なんだよね。とても別れるって雰囲気じゃないのに」

「ほとぼりが冷めるまでわざと距離を置いているんじゃないの？ 子供の恋愛……こじやないんだから、そういう駆け引きもあるでしょ」

「駆け引き、か……あの先輩がそんなことするかな？」

お姉ちゃんは私の言葉に興味を惹かれたみたいで、ベッドから身を乗り出して私を見上げた。

「ねえ、その先輩ってどんな人なの？」

「どんな人……うーん」

私は考え込んだ。

「……胸は無いけど度胸はある」

お姉ちゃんはグラグラと笑い、私も釣られて笑った。

「肝の据わった人みたいね」

「普段は生真面目だけど、何だかんだ優しいよ。優しいというか、面倒見がいいというか。ただ、何考えてるかよく分からないことがたまーにあるんだよね。思い詰めたような怖い顔しちやってき。見た目はクールなんだけど、内に熱いものを持っている、みたいな」

「ふーん、度胸があるっていうのは？」

「東京駅で剣さんを人質に取った爆弾魔を右ストレートでぶん殴ったりとか」

「ああ、あれね。まさかリアルで『右ストレートでぶつとばす、真つすぐいってぶつとばす』を見る日が来るなんて思わなかった」

「幽遊白書の読み過ぎじゃない？」

また笑い合う。

「でも、叶が慕っているその碓氷って人、剣さんとはどんな感じだったの？」

「お似合いのカップル、いやもはやあれは夫婦。砂糖吐くしかない」

「じゃあ夫婦喧嘩でしょ。下手に関わらない方がいいよ、夫婦喧嘩は犬も食わぬって言うし」

えらく無理矢理会話を打ち切られたと思ったら、もう2時過ぎだ。明日もあるし、いい加減寝よう。そう思っ

て読書灯の灯りを消した。それにしても、先輩は今頃どこで何をしているんだろう？

*碓氷瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

目覚ましのアラームよりも前に、雨の匂いで目が覚めた。隣を見てもあの人はいない。カーテンを開けると、

山々が降りしきる雨にけぶっていた。

足の具合は多少マシになった気がする。ズキズキとした痛みは単食しているものの、固定具は要らなさそうだった。心許ないのに変わりなく、半ばお守り代わりに松葉杖を手にとった。

食堂に向かうと、私が一番乗りだった。朝食は和洋二種類から選べる定食だった。和食を選ぶと、飯に味噌汁

玉子焼き、焼鮭に大根おろしといった極めてスタンダードなものが運ばれてきた。

「おはようございます。怪我の具合はどうですか？」

和定食を私の前に置きながら女将さんが聞く。霧島さんの母親なのだろう、どんぐりのような目つきがよく似ている。

「昨日よりは良くなりましたけど、まだしんどいです」

「無理はせられませんよ」

お大事に、と言い残して彼女は厨房に消えた。私は空腹に従い、まずは香ばしい焼海苔に手を伸ばした。ご飯と合わせて食べていると霧島さんがやってきた。

「おはようございます。和定食にしたがですね」

そのまま役人は私の前に陣取る。手にしているのは洋定食のお盆だ。

「怪我の具合はどうですか？」

母親と全く同じ言葉を全く同じイントネーションで放つてくる。少しおかしかった。私は女将さんの時と全く同じ返答をして、温かい麦茶を啜った。

朝食を食べ終える頃、津軽さんが食堂に入ってきた。

「碓氷さん、おはようございます。昨日は大変失礼致しました。こちら、洗濯してシミ抜きも済ませておきましたので」

そう言っ、旅館のロゴが入った紙袋を差し出した。中を確認すると、きれいになった私の服がポリ袋に包ま

れていた。それにしても津軽さん、何だか眠そうだ。じつとりした目には隈が浮かんでいる。

「ああ、それは親切に」

私は一礼して、食事に戻る。

「ああ、ひろちゃん。お疲れ様。良いのは卸せたかえ？」

「女将さん、それが今日はこの天気であまり出物が無かつたんです」

どうやら市場で食材を仕入れてきたみたいだ。それで眠そうなのか。厨房で女将さんと打ち合わせをしている。

「霧島さんって津軽さんとは面識があるんですか？」

温泉卵を箸で取ろうと悪戦苦闘する私をよそに、霧島さんは首を横に振った。

「いえ、最近雇ったというのは聞いていたんですが、実際に会うのはこれが初めてですね。前までいた料理人が七浦さんっておじいちゃんやったんですが、歳で引退したんですよ。それで後任を募集したらあの人が来たんですけど、わざわざ住み込みで働いてもらうのはありがたいんですが、何でこんな辺鄙な土地の旅館に来たのか……」

私はそれっきり津軽さんについては興味を失った。温泉卵は箸で食べるのを諦め、少しお行儀が悪いけど器を叩って飲み干す。

「これを食べたらすぐに出ないといけないですよ。これから高知市街までは国道と高速で50分くらいで行けるんで、東京での通勤に慣れていればそんなに遠くは感じないんですけどね」

「確か路面電車の調査でしたっけ？」

「ええ。朝倉の方で正面衝突しかけてましたね。すんでのところで大惨事は免れましたけどね」

霧島さんは少し鋭い表情をして、ロールパンを頬張った。既にオムレツとソーセージの皿は空になっている。

オールバックの役人がデザート代わりのヨーグルトを食べ終える頃、誰かが血相を変えて食堂に飛び込んだ。た。

「すみません、昨日お世話になった島風ゼミの潮路です。」

島風先生を見かけませんでしたか？ どこを探しても見当たらないんです」

「さあ……申し訳ございません、分りかねます。散歩にでも行っていらっしゃるのではないですか？」

対応する女将さんは厨房で洋定食のサラダを盛り付けていた。髪先だけを茶色く染めた学生は明らかに落胆した。

「だとしても変なんです。財布もスマホも何もかも、部屋に置きっぱなしです。それに、既に朝のミーティングの時間を過ぎています。何の音沙汰も無いなんて……」

「そう言われましても……ひろちゃん、何か知つちゆうかえ？」

料理人も黙って首を横に振るだけだ。

「旅館のどこかにいるはずなんです。フロントでは傘を貸していませんし、先生の傘は玄関の傘立てに置きっぱなしになっていました。わざわざ他の傘を使うつのは考えにくいですし……見かけたら俺が探していたことを伝えてもらえませんか？」

「分かりました」

ゼミ長は軽く一礼した後、そのまま私の方に近寄ってきた。さつきと大体同じ質問と回答が繰り返された。

「先生は一人で部屋を使っているんですか？」

「いえ、常盤っていう女子生徒が一緒です。ですが、彼女が起きた時には既にもぬけの殻でした。心当たりも無いみたいで、それで方々探しているんです」

朝食を食べ終えたら私も捜索を手伝うことにした。ど

うせやることも無い。本当は安静にしているべきなのかもしれないけど、旅館の中くらいなら大丈夫だろう。

「あなたの先生って、昨日ここで一緒にあった割と太めの中年女性のことですよね？」

「ええ」

太目の中年女性、という言い方に少し複雑な表情を見せつつも潮路君は頷いた。他に特徴を言い当てようがないから仕方ない。

お街に向かう霧島さんを見送った後、私は潮路君にどこを既に探したのか聞いた。

「支配人さんが業務用のスペースを調べてくれています。なので、この旅館では碓氷さんの部屋だけがまだ調べていません」

「私の部屋ですか？」

ドアと窓に鍵はしてあるし、ベランダは使えないから出入りしようがないと思う。

「良かったら見てもらえませんか？」

私一人で自室を調べるくらいなら、まあいいだろう。ゆつくりと階段を上がり、私はそつと鍵をドアノブに差し込む。少し身構えたが、いざ部屋に入ってみると拍子抜けするほど何一つ変わっていなかった。風呂場にもクローゼットにも、広縁にも誰もいなかった。

「島風先生はこの部屋にはいないみたいです」

「そう……ですか」

潮路君は落胆というより、訝しむ表情を見せた。

「本当に行先に心当たりは無いんですか？」

「ええ、まるでありません。一人で先にフィールドワークに行くなんてことも考えられません。道具類を全部置きっぱなしなんですから」

人が一人、忽然と姿を消した。その事実が段々と私の

心の中で膨れ上がり、重くのしかかってくる。

「監視カメラとかは調べたんですか？」

「いえ、まだです。支配人さんに頼んではみたんですが、とりあえず館内を調べた後で、ということの後回しにされてしまいました」

妥当なようなそうでないような。行方不明と決まったわけでもない客のために監視カメラをチェックなんてしないと考えればそれらしく思える反面、さつさと映像をチェックすれば旅館の外に出たかどうかくらいはすぐに分かるはずだ。

支配人と監視カメラのことを考えていると、当の支配人が階段を駆け上がった。

「潮路さん」

「支配人さん、どうでしたか？」

太った支配人は猪首を横に振った。

「館内をくまなく探しましたが、どこにもいませんでした。ですが、監視カメラを調べても玄関から出入りした様子はありませんでした」

その答えに潮路君は戸惑ったみたいだ。本当ですか、と念を押している。

「監視カメラを避けてこの建物から外に出ることはできませんか？」

「二階の非常階段か、一階の非常口からならできます。ですが、施錠されているので一般客は使えないはずですが、調べましたけど、普通に施錠されたままでした。一般客が出入りした様子はありませんでした」

それが本当なら、島風先生はこの旅館の中のどこかにいるということになる。でも、いない。

その矛盾について考えようとした私の意識は、全く別の声に吹き飛ばされた。

「潮路、大変だ！」

玄関ホールに男子生徒が血相を変えて飛び込んできた。

「白鷺、どうした!？」

その瞬間、私の中を悪い予感が駆け抜けた。

「先生が川で倒れている! 早く警察と救急車を!」

それを聞いて、なぜ体が動いたのかは分からない。私は松葉杖すら放り出して、玄関を抜け、橋に向かって駆け出した。

川を覗き込むと、見えた。

濁流の中、辛うじて吉野川の本流へと流されずに水底に沈んでいる人の姿が。

「島風先生……!」

降りしきる雨の中、大学教授の変わり果てた姿がそこにあつた。

* 釧路士 —— 秋田県横手市・『電車館』

『……東京メトロ銀座線での旅を始めましょう。この路線は第三軌条方式で建設されており、線路の真横に給電用の第二のレールが設置されています。そのため電車は屋根上にパンタグラフを設置せず、台車に集電靴を設置してそこから電力を供給しています』

テレビの音で目が覚めた。寝ぼけまなこでテレビの方を見ると、映画館みたいな感覚で釜田さんがテレビを見ている。

「悪い、起こしちゃったか。でももう7時半だ、いい時間だろう?」

「ああ、おはようございます」

僕は大きくびをした。この部屋は窓が無く、外の景色で時間の感覚を掴むことができない。

「朝食は8時からでしたっけ?」

僕がボストンバッグから服を引っ張り出すのを横目に、釜田さんは立ち上がったって部屋の電気を点ける。

「ああ。着替えたら出るか」

「ですね……そのテレビ、どうしたんですか?」

「これか? 偶然やってただけだ」

こども鉄道尽くしの館だと、番組まで鉄道尽くしになってしまったのかと思ってしまう。釜田さんがこれ見よがしにリモコンを操作してチャンネルを変えると、朝のニュースをやっている。

『……シリーズ・『震災から3年』。今日は宮城県石巻市からお伝えします。現在、震災による行方不明者は宮城県だけで1200人を超えています。行方不明者の家族の中には、死亡届を出すかどうかの選択に悩む人がいます……』

「もう3年か、……いや、まだ3年、の方が正しいのかもしれないねえな」

釜田さんの声は耳に届かず、僕の心は瑞穂さんへと飛んでいた。

彼女の過去は、僕が手出しをするべきものではない。瑞穂さんのことだから手放しに赦すことはしないだろうけど、そのまま赦さないで生き抜くのか?

どんな選択をしても、僕は彼女の隣にいてあげたい。あの人がそれで、ひと時でも辛さを忘れられるのであれば。

下心が無いとは言わない。僕だって彼女と一緒にいたい、そう思っている。あんなことやこんなことをしたい、という下心もある。

でも、それは僕の覚悟とは異なる。僕の決意は別の次元にある。瑞穂さんを愛し抜き、生涯守り抜く。瑞穂さ

んさよよかつたら、僕はそう誓う準備がある。

『……踏ん切りがつくまでには時間がかかりましたね。

ええ、死亡届を出してしまうと、もう親父には会えない。

それを認めてしまうことになりませう。かといって、いつ

までも出せないでいても、前を向けないような気がして

……』

「酷だよなあ、遺された人じゃねえと」「死」を決められ

ねえつてのは」

釜田さんの言葉に、僕は静かに頷いた。

「……今日、電話してみようと思います」

「ん？」

釜田さんは僕の方に細い目を向けた。

「確氷のことか？」

僕は少し躊躇い、意を決して頷いた。

「良い心がけだ。自分に正直じゃねえと、他人にも正直

になれねえ。これから確氷と生きるなら、良くも悪くも

今は正直な自分を見せた方がいいだろ。一度結ばれてか

ら無理にほどくのは、キツイぜ」

離婚を経た釜田さんだからこそ、説得力がある言葉だ

った。

着替えを済ませ、ドアと廊下が連結されるのを待つ。

「この仕掛け、一回体験するだけなら面白いが、こう毎

回となるとまどろっこしいな」

「宇宙ステーションもこんな感じなんですかね？」

「どっだろうな？」

廊下を出ると、大和さんと比叡さんに出くわした。

「剣さん、釜田さん！ 水郷さんを見かけませんでした

か？」

「水郷さんって、カメラマンの？ 見ていませんが……

釜田さん、見ました？」

「いや、見てねえな。どうした？」

「どこにもいないんですよ。お姉ちゃんが今日の雑誌の

打ち合わせをするつもりだったんですけど、時間にな

っても部屋にこないし、電話にも出ないし、仕方ないか

ら部屋に行っても返事が無いんです」

大和さんが早口でまくし立てた。そこから比叡さんが

続きを引き継ぐ。どうでもいいところで姉妹を感じた。

「これは変だなってなって、鹿島さんに部屋を開けても

らったんです。突然の病気で倒れたりしたら大変なので」

比叡さんはそこで言葉を切り、どう説明したものかと

思案顔になった。

「……それが、部屋の中にもいなかったんです」

「いない？ 確かなのか？」

釜田さんが聞き返し、姉妹は揃って首を縦に振る。

「一緒に探すのを手伝ってくれませんか？」

「それは構いませんが、まずは山鳩会長に知らせた方が

いいんじゃないんですか？」

大和さんのお願いに頷きつつも、僕は指摘する。

「今、鹿島さんが知らせて行っています」

その時だった。

『電車館』の中に悲鳴が響いた。

真つ先に僕が硬直を解いた。

「あつちだ！」

そのまま廊下を走る。湾曲した廊下を、踏切を抜ける

と廊下は直線になる。僕がいる部屋の反対側、1号室の

前で鹿島さんが思わず嘔吐していた。

「鹿島さん！ 何が……!？」

部屋の中を見て、僕は思わず息を飲んだ。鹿島さんの

胃酸の臭いに釣られ、僕も胃の奥のものが食道を逆流し

かけた。

かけた。

「どうした!？」

「く、来るな！」

僕は悪心を押し込み、後続の人々に怒鳴った。

「これは……!！」

部屋の中から目が離せない。

横倒しになったレール。

血まみれになった布団。

そして、頭を砕かれた死体。

「……山鳩会長！」

老会長は、脳味噌を寝台にまき散らして死んでいた。

第四章 捜査

*確氷瑞穂 ——高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

夜中には本降りだった雨は、小降りになったり土砂降

りになったりを繰り返し、まるで止む気配が無い。

島風先生は、国道32号線の橋の下の川に沈んでいた

ところを発見された(図⑦参照)。第一発見者はゼミ生の

白鷺君と有明君で、二人が見つけた時には既に息は無か

ったという。

こんな山奥だ。国道のすぐそばで天気もめちやめちや

に悪いというわけではないため、霧降荘の時のように孤

立する恐れは無い。それでも、警察の捜査関係者が来る

にはかなりの時間がかかりそうだった。

「えー、本部の人が来るまでもうしばらく待ちよつて下

さい。建物の外に出んように頼みます」

幸い、豊永には駐在所があった。枯れ木のような警官がミニパトで駆けつけるには、通報してから10分とからなかった。

「お巡りさん、あれは自殺なんですか、それとも殺人事件なんですか？」

「えーと、あなたがこの旅館の支配人ですか。お名前は？」

「霧島燕と申します」

支配人と客は全員がロビーに集められていた。女将さんと津軽さんは宿の業務があり、厨房やら業務用スペースやらをせわしなく出入りしている。

「事件性はあると言えるでしょうでね。ですが、また事件とも決まったわけではないです。とりあえず本部が捜査してみないことには何とも」

「ほいたら、早くその本部をここに呼んで下さいよ」

「やから、今呼んでますって」

支配人は一つ溜息をついた。駐在所の人間が相手ではどうしようもない、と言いたげだ。

「お茶を入れました。良かったらどうぞ」

女将さんが人数分の湯呑を持ってきた。死体を目の当たりにした白鷺君と有明君は、青い顔をしたまま手を伸ばそうとしなかった。私は雨でけぶる山を見上げながら、熱い緑茶を少し啜った。

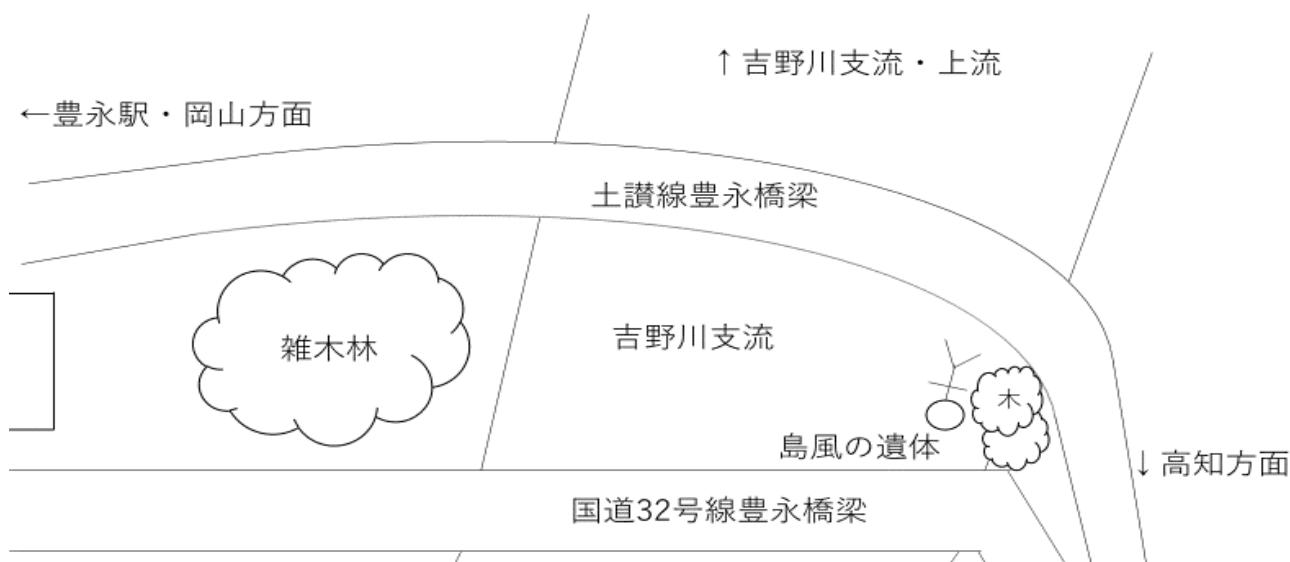
それにしても、こんな所で事件に巻き込まれるなんて夢にも思わなかった。我が身を呪いたくなる。

「旅館のお客さんはここに全員揃っていますか？」

「ええ、島風様を除き全員いらっしやいます」

客、といってもゼミ生が4人と私だけだ。お巡りさんもこのまま時間を持て余すのは馬鹿馬鹿しいと考えたのか、一人ずつ自己紹介をすることになった。

島風 死亡現場



「ではまずその女性の方。そう、眼鏡をかけたあなたです」

トップバッターは私だった。

「碓氷瑞穂と申します。ここには母の墓参で来ていたのですが、帰り道に足を怪我してしまって、治るまでここで療養することになりました」

「なるほど、何か身分証を見せてもらえますか？」

財布の中から保険証と免許証を出した。

「なるほど、ありがとうございます。秋田の方なのですがね。母親の墓参、と言いましたがお墓はどの辺に？」

お巡りさんは私の免許証と保険証に一通り目を通しながら聞いた。

「その国道を左に進んでしばらく行くと、山奥に入る横道があるんです。そこに入って少し歩くと小さな墓地があります」

「なるほど……松葉杖を使っていますが、そんなに怪我が酷いんですか？」

私は首を小さく横に振り、ゆっくりと立ち上がった。「右足首を捻挫してしまっただんですが、一晩安静にしたら杖無しでゆっくり歩くらう程度では回復しました。この杖は昨日は手放せませんでした、今は半分お守りみたいなものです」

事実、さつきは杖無しで現場にダッシュしたけど、そこまで痛みが深刻になることは無かった。

「なるほど、そら災難でしたね。免許証と保険証をお返しします。次は隣のあなた、そう、縮れ毛のあなた」

有明君が指名された。三段腹と呼ばないくらいのデリカシーはあるみたいだ。

「有明浩成、安政大学政経学部の学生で、今度4年になります。島風ゼミの生徒です」

「なるほど、ゼミの学生さんながやね。他に学生の人は？」
私以外の客全員が手を挙げた。

「ふむ、なるほど。責任者は？」

「ゼミ長は俺です。潮路大介といます」

潮路君が挙手した。

「すいません。あの、先生はどうなるんすか？」

「ああ、えーと、今の発言は有明さんやね。原因はまだ掴めんけど、不審死なことには変わりないきね、今は駐在所の他の人間に現場保存を兼ねた見張りをさせよう。本部の人が来て現場の鑑識が済んだら遺体が警察病院に運んで、司法解剖されるんやないかね。たぶんやけど」

学生相手には訛りの強い砕けた口調になる。それにしても、昨日一緒に食事をした相手が解剖され肉片になるまで、一日くらいしか経っていない。この国の警察システムの優秀さに驚くと共に、その迅速さに軽く気持ち悪さすら覚えた。

「それで、島風先生は何のゼミなが？」

「交通経済学のゼミっす」

「交通経済学、ね……どんなことをやるが？」

お巡りさんは昨日私が食堂で受けたのと大体同じ説明を受けた。

「なるほど。つまり、彼女がここで合宿をしようって言い出したんやね？」

彼女、こと常盤さんはびくりと怯えたように身を震わせた。青い顔と一緒にセミロングの黒髪も震えている。

「と、常盤涼香です……えと、今度4年になります……」

昨夜以上に口ごもっている。

「彼女、シャイなんですよ」

潮路君がフォロウする横で、常盤さんは顔を赤らめた。でも、恥ずかしがり屋というレベルを超えているように

見える。

「島風さんの遺体を発見したのは有明君やったね？」

「そうっす。ですが、白鷺も一緒でした」

「白鷺？」

「あー、俺のことです」

小柄な男子学生が手を挙げた。

「あー、白鷺快二、同じく島風ゼミの学生です」

身だしなみに気を遣うのか、髪は七三に整えられており、ぱりっとしたワイシャツを着ている。柑橘類の皮のようにポコポコした頬が目につく。

「一応、全員の身分証を見せてくれるかえ？」

老巡査の求めに応じ、全員が財布やポケットの中から学生証を出した。

「安政大学って言ったら、東京の大学やったね？ 島

風先生のことについては警察から知らせちよくき、そんな心配せんでかまさんよ」

そう言ってお安心させた後に、お巡りさんは核心を突く質問をした。

「島風さんの死に何か心当たりがある人は？」

生徒一同が暫く沈黙考する中、私だけは即座に首を

横に振った。

「えと、確氷さんでしたね？ 島風さんと面識は？」

「いえ、全く。昨日、夕食の席で一緒になったくらいです」

「面識が無いのに夕食の席で一緒に……何かあったがですか？」

私は霧島さんのことを話した。するとお巡りさんは驚

いた顔をして、支配人に確認した。

「宿帳には霧島って人の名前が無いようですが？」

「仕事でこつちに帰っちゅう私の息子ですからね。無く

て当然です」

老警官は鉛筆の芯を舐めながら、メモを見返す。

「では、その息子さんと連絡って取れますか？」

「ええ、恐らく。今は仕事でお街の方におりますけど、事情を話せばすぐこつちに向かうでしょう」

支配人はそう言い、ケータイで霧島さん呼び出し始めた。霧島さんも実家でこんな事態に遭遇するとは思

もよらないだろう。

「つまり、昨夜の時点でこの旅館におったのは霧島一家三人と料理人の津軽さん、滞在客が確氷さん、島風さん、潮路君、白鷺君、有明君、常盤さん、この10人ながです」

誰からともなく頷いたところで、私達の耳にパトカー

のサイレンが聞こえてきた。

「本部の担当者が到着したみたいです」

私は誰にも気付かれないように、肩の震えを抑え込んだ。

ここに礼士さんはいない。頼りになるのは、私だけ。

ここに礼士さんはいない。頼りになるのは、私だけ。

＊劔礼士 —— 秋田県横手市・『電車站』

矢野警部と犬塚刑事が到着したのは、近くの駐在所の巡査が駆け付けてから更に30分くらい経った後だった。

「また会いましたな、劔さん。毎度毎度事件に巻き込まれて、お互い難儀ですな」

「全くです」

僕とひとしきり苦笑いを交わした後、小柄で剛毛の警部は若い巡査に案内されて館の中に入ったが、なぜか内部の目を見張るようなコレクションには一瞥もくれなかった。興味が無いというか、既に存在を知っていたかの

ような振る舞いだ。

「現場はどちらです？」

若い巡査は足取りも重く、二人を異臭のする方に案内した。吐瀉物と血と脳味噌の臭いが混じり合い、酷い悪臭が現場には漂っていた。

「ほう、これは惨いことを……」

二人は凄惨な死体を目の前に、さすがに一瞬立ち尽くした。被害者に手を合わせた後に、矢野警部と犬塚刑事はてきぱきと指示を飛ばし始めた。

「犬塚刑事、鑑識と一緒にいて下さい。何か発見があったらすぐに私に報告するように。私は関係者との聞き込みを行います」

出っ歯の刑事を現場に残し、矢野警部は僕達の方に近付いてきた。行方不明の水郷さんと昨夜帰宅した羽黒さんを除いて、館の人間が全員揃っている。

「この館の責任者は？」

「ええと、私です」

鹿島さんが青ざめた顔で小さく手を挙げた。

「お名前は？」

「鹿島ひばりです。妻でもあり、夫の秘書も務めておりました」

「ふむ。ここは場が悪いので、どこか別室で皆さんからお話を伺いたいのですが、どこかいい場所はありませんか？」

未亡人は少し考えた後、食堂車に案内することにしたみたいだ。

「ここなら人数分の椅子もありますし、好きに使ってもらって構いません」

「なるほど……変わっていませんな」

矢野警部は遠い目をして呟き、鹿島さんは顔色を少し

変えた。

「……警部さん、もしかして」

「ええ。お久しぶりです、鹿島さん。10年前の事故以来ですな」

* * *

釜田さんが声を上げた。

「ちょっと待ってくださいよ、警部さん。その10年前つてのは何なんだ？ もしかして、先代の当主が棚に潰されて死んだ話か？」

「そうですね、釜田さん。あの事故は、私がまた駆け出しの頃に取り扱ったものです」

今度は鹿島さんや比叡さんが当惑する番だった。

「ええと、あなた方はお知り合いか何かですか？」

「腐れ縁つてやつよ、お姉ちゃん。トワイライトエクスプレスの事件でも、他の事件でも、どういうわけか私達が巻き込まれる事件をこの矢野警部が担当しているの」

腐れ縁、という言葉に矢野警部はそっと苦笑した。

「それではお座り下さい、皆さん。まずは身分確認を含めた聞き込みを行います。免許証や保険証のようなもので構いません、お手持ちの身分証をテーブルに出して下さい。この館に在るのはこれで全員ですか？」

「いえ、昨日来てもらったお手伝いさんがまだ来ていません。今日も来てもらうように頼んでいるので、そのうち来ると思っています」

「すぐに電話して呼び出して下さい」

矢野警部の命を受け、鹿島さんはデッキに移って電話をかけ始めた。

「あと、カメラマンの水郷さんもいないんです」

比叡さんも声を上げた。そうだ、元々は水郷さんを探すはずだった。

「カメラマン……失敬、あなたは？」

「申し遅れました、『月刊サフィール』記者の比叡と申します。水郷さんというのは連れのカメラマンです。昨日と今日の二日に分けて、山鳩会長へのインタビューとそちらの鳥海先生との対談企画を行う予定だったんです」

手短かに説明して、名刺を手渡す。

「なるほど。その水郷さんというのがいないのは、どうしてですか？」

「それが分からないんです。館の中をあちこち探しているうちに山鳩会長を発見して……」

矢野警部は眉間に皺を寄せ、考え込んだ。

「行方不明、というのも妙な話ですな。山鳩さんの件と並行して調べましょう」

デッキから鹿島さんが戻ってきた。

「羽黒さんは20分後には来てくれるそうです」

「なるほど、そのお手伝いさんというのは羽黒さんという名前なんですね」

警部は少し思案顔をした後に、聞き込みを開始した。「今回の件が事故か事件か、それとも殺人かは現時点では分かりません。それははっきりさせるためにも、皆さんにお願いがあります。これから聞き込みを行います、どうか嘘偽りの無いように。分からない場合はそれで構いませんので」

とはいえ、警察もまた今回の事態の全容を掴んでいない。一通り全員の氏名と身分、来訪目的を確認するに留まった。確認しているうちに羽黒さんもやってきて、行方不明になっている水郷さんを除いて関係者全員が集まったことになる。

「今回の事態に心当たりのある人は？」

この質問には誰も答えない……かと思ったら、敷島取

締役が手を挙げた。

「何かあるんですか、敷島さん？」

「いやあの、その……10年前の事件と何か関係があるんじゃないか、と思ひまして、ハイ」

「ああ、そういうや言っていたな。この館での事故と、あなたの親方が工場ごと焼き殺された事件」

釜田さんも僕の隣で口を挟んだ。

「10年前の工場放火事件ですか。忌々しい事件でしたが、その事件でも今回死亡した山鳩氏が容疑者でしたな。犯人を明らかにする明確な証拠が無かったことと、後は確か山鳩氏にアリバイがあったんだっけな……？」

少し考え込むも、話を元に戻した。

「それらの事件が今回の件と関係があるということですか？」

「はあ。確証は無く、ただの思いつきですが」

矢野警部は一応この指摘も推理の材料に組み込むことにしてみた。メモを取っていると、巡査が入ってきた。

「矢野警部、鑑識による調査が概ね終わりました」

「苦勞、向かいます。では皆さん、なるべくここを動かずに待っていて下さい。君、ここで皆さんの対応を頼みます」

矢野警部は若い巡査に場を任せて現場に向かおうとしたが、思ひ出したように鹿島さんと呼んだ。

「鹿島さん、案内をお願いします」

「私ですか？……承りました、ご案内します」

彼女はそう言い、椅子から立ち上がるうとした。しかし、青い顔をした彼女はそのままバツタリと床に倒れてしまった。慌てて同じテーブルの羽黒さんと鳥海先生が駆け寄る。

「山鳩会長の現場をそのまま見てしまったんです。私はまだ現場を見ていませんが、聞くところだとかなり凄惨なんでしょう？ ショックを受けても無理はない、彼女に案内を頼むのは無理でしょう」

鳥海先生の言葉に矢野警部は指示を変更した。

「鹿島さんはとりあえず安静にしていして下さい。他に現場を見たり、館に詳しい人はいますか？」

「それでしたら、僕が行きましょう。現場を見ました」

僕は手を挙げた。

「いいでしょう。後は建物の案内は……羽黒さん、あなたはこの館のお手伝いということですが、どうでしょう？ 案内してもらえませんか？ 今はまだ現場を見てもらったりはしませんので」

「ふえつ、あつ、はい！」

結局、矢野警部はお供に僕と羽黒さんを選んで食堂車を後にした。

「釜田さん……」

僕は瑞穂さんを彼に託そうとして、口を噤んだ。今、彼女はここにいない。

* 確水瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

一度止みかけたはずの雨は本降りに戻ってしまった。

今度は従業員を含め全員がロビーに集結した。

「父さん、母さん」

「翼、早かったね。お帰り」

霧島さんが慌てた様子で戻ってきた。

「どうなっちゃう？」

「これから県警本部の担当者が聞き込みを含めた調査を行うらしい、それ次第だね」

「お客様が亡くなるなんて、この旅館ももうおしまいかもしれんな……」

「何言いつう、そんな泣き言を漏らしゆう場合やないやろ！」

女将さんが弱音を吐く支配人を叱りつける。高知の女は肝が据わっている男勝りが多く、それをはちきんと呼ぶ。どうやら典型的なはちきんのようだ。

「えー、お待たせしました」

割と寒いのにワイシャツ一枚姿の中年男性が坊主頭を掻きむしりながら歩み出た。体の太さは礼士さんを彷彿とさせるけど、腹の突き出し方が圧倒的に違う。

「高知県警捜査一課、警部の黒潮です。彼女は同じく捜査一課刑事の瀬戸、俺の部下です」

「瀬戸です。どうぞよろしく」

「あれ、せとつち？」

せとつち？ 耳慣れない単語に私は声の主を探した。

「え、霧島先輩？ どうしてこんな所に？」

「ここが実家だよ」

霧島さんは髪をお団子にまとめた刑事に近寄る。

「瀬戸、どうした？ 知り合いか？」

「中学高校時代の先輩です」

「おお、そうか。世間は狭いな」

黒潮警部はさしたる関心も示さず、老巡査から既に聞き取った内容の説明を受けている。

「よっしゃ、分かった」

「警部、現場保存が終わりました。これからホトケを鑑識に回します」

鑑識の腕輪を付けた担当者が玄関から入ってきた。

「おう、分かった。とりあえず今分かつちゆうことは？」
「被害者の死因は頸椎損傷、高い所から頭から転落し、

首の骨を折って即死した模様です」

「転落死？ ホトケは川の中から引き揚げられたんやろ？ 水死やないが？」

「いえ、詳細は解剖してみないことには分かりませんが、恐らく水死ではないやろうと。川に転落した際に川底に頭を強く打ったんやないかと思えます」

「あんなに水量があつたのに、そんな器用な真似ができるのかな？」

「まあええわ、死亡推定時刻は？」

「川底に沈んちよつたんで、絞り込みに苦労しそうです。今のところ昨夜21時から今朝の3時頃まで、という感じですけど。これ以上絞り込みができるかどうかは何時とも……」

「分かった。後は解剖で分かったことを報告してや」

鑑識の報告に一通り鷹揚に頷いた後、警部は太鼓腹と一緒に私達に向き合った。

「それじゃあとあえず、皆さんから一人ずつお話を聞かせてもらおうと思います」

* * *

聞き込みは先生と行動を共にしていたゼミ生から優先して行われることになった。そうすると、必然的に私の順番は客の中では最後になる。しばらく時間が空きそうだったから、現場を見に行くことにした。

止みかけていたはずの雨はまた本降りに戻っていた。

高知の雨は本当に容赦が無い。都会だとゲリラ豪雨と騒がれるような雨が標準だ。晴れる時はカンカン照りになり、雨はスコールのようだ。この地はもはや日本ではない、遠い南国なのかもしれない。

足の具合はだいぶ快方に向かっていた。お守り代わりの松葉杖もさすがに邪魔くさくなってきて、女将さんに

お礼を言って返却した。

「もう大丈夫ながですか？」

「ええ。ゆっくり歩くらうなら平気です。湿布も痛み止めも使っていますし」

そう言い、傘を借りて旅館の外に出た。いくら南国とは言っても、また3月上旬の山中だ。降りしきる雨の中、吐息は僅かに白く染まった。でも、秋田の3月とは比較にならないくらい暖かい。

「あつちね」

国道に沿って左折し、橋に向かう。吉野川に注ぐ支流を跨ぐ橋だけど、橋の右手を見ると吉野川と合流するところだった。合流点の上に架かる橋、と考えてもそこまで間違いはない。

それにしても橋が多い。国道32号線の橋の隣には右にきついカーブを描く土讃線の橋があり、更にその奥には錆が浮いた白い鉄橋がある。

橋を渡り終える辺りに雨合羽を着た警官が一人立っている。あの下で遺体が発見されたのだろうか。そう思っている。あの下を覗き込むと、多数の警官と救急隊員がいるのが見えた。旅館があるのと反対側の川岸で遺体を引き揚げたみたいで、シートにくるまれた遺体を乗せた担架が置かれている。

人って、あんなに簡単に死ぬんだ……昨日まであんなに元気だったのに。

分かっていることだ。分かり切っている。震災で亡くなった人も、そのほとんどは震災さえ無ければ3月12日も平穏に生きていた人々だ。死は時としていつも簡単に、そしていつもあっけなく口を開ける。

じゃあ、井上は？

じゃあ、笠原は？

二人を飲み込む死の口をこじ開けたのは、誰？
……

私は二人を頭から締め出そうと、現場を凝視した。耳慣れた轟音が響いた。建物の影から『南風』が現れ、勢いよく私を追い抜いて対岸に姿を消す。脱線しそうな勢いでカーブに突っ込んだのに、スイスイと走り抜けていった。遠心力とか大丈夫なのかな？

私も橋を渡る。国道の橋は直線で、何の変哲もない橋だ。隣の土讃線の鉄橋は右にきついカーブを描いているため、対岸に渡る頃にはかなり私の方に近寄っている。列車が通り過ぎた後は、何事も無かったかのように沈黙している。

橋の真ん中に来た辺りでまた下を覗き込む。警官が何人か川の中に入って、水底をザブザブと探っている。遺留品か何かを探しているのだろう。昨夜からの雨で水は濁り、水量は増している。骨の折れる作業なことは容易に想像できた。

ふと私は、この現実を前にとっても落ち着いていることに気が付いて驚いた。今までなら、死体に出くわすような事態になると、礼土さんの影に隠れるようにしながら、じつと事態の收拾を待っていた。トワイライトエクスペレスの事件でも、霧降荘の事件でも。ずっと礼土さんに頼りっぱなしだった。

でも、今はあの人はいない。自分に頼るしかないのだ。それがどんなにつらくても、どんなに苦しくても、どんなに不可能でも。

そう考えると、私が礼土さんと別れて独りで生きるのとが、とても困難なことのように思えてきた。本音を言ってしまうと、今すぐにも秋田に戻ってあの人に会いたい。そういう気持ちははっきりとある。でも、それを

素直に受け入れていいものか、という迷いに苛まれ続けている。その答えを求めて、死んだ母にすがろうとこんな辺境の地にまで来てしまった。

でも、逆に独りで生きるとして、それが何になるんだろう？ 幸せを捨てたところで、孤独に苦しみながら生きてきたところで、それが何になるんだろう？

何にもならない。

いや、本当に？

そう、何にもならない。どれだけ自分を不幸の中に置いたところで、井上を殺した事実、笠原を殺した事実は変わらない。

それなら、私が不幸でいるべき意味は、どこにあるの？

その意味は誰が決めるものなの？ 法が私を裁かなかつた以上、何を贖罪としてもそれは私の自己満足に過ぎないんじゃないの？

そう考えると、法で裁かれて、制度上は罪を償うことができる……それは案外、ある意味では幸せなことなのかもしれない。

川の中にいる警官の一人と目が合い、私は我に返った。

これ以上ここにおいても仕方ない、そう思つて私は元来た道を引き返すことにした。

＊釧札士 —— 秋田県横手市・『電車館』

現場は、さすがに少し落ち着いた状態になっていた。遺体は撤去され、白いテープが人型の模様を組んでベッドに張り付けられている。

「換気も行っているのですが、なかなか悪臭が抜けません。窓もありませんし。設計者は何を考えてこんな造りの建物にしたのやら」

矢野警部は辟易した表情でぼやいた。

「犬塚刑事、判明したことを報告して下さい」

出っ歯の刑事はタブレット端末を取り出し、メモを讀み上げる。

「被害者は山鳩宗吾さん、64歳。『エルム模型』の会長をやっています」

「『エルム模型』と言えば、秋田に本社を置く模型メーカーでしたな」

「はい、今回の被害者はその会社の二代目社長です。今は社長職を後進に譲り、会長となっています」

矢野警部は部屋の中を見回した(図⑧参照)。

「死因はこの……鉄道のレールですね？」

「ええ。展示用に壁に固定されていたものですが、それが崩れて就寝中の山鳩さんの頭を直撃したみたいです」

それは何とも惨い死に方だ。僕は思わず顔をしかめた。

「釧さん、鉄道のレールというものはそんなに重いものなんですか？」

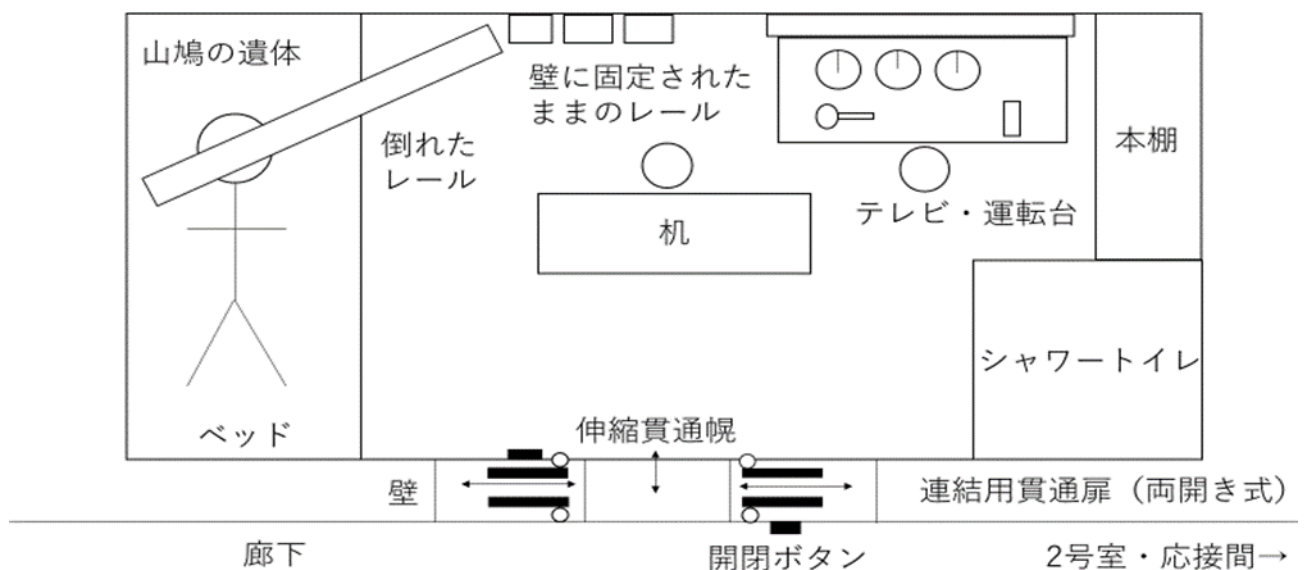
「ええ、とても重いんです。倒れたレールの側面に文字が刻印されていたと思いますが、見せてくれますか？」

鑑識の人が案内してくれた。ポニーテールを帽子の中にしまい込んだ背の低い女性だ。

「60キログラムレール……普通の用途に限れば、日本で一番重いレール規格ですね。新幹線のレールとして主に使われるものです。1メートルで60キロなので、この長さだと100キロありますよ」

壁に固定されたままのレールは幹線用の50キログラムNレールが新品と中古がそれぞれ一本、ローカル線向けの40キログラムNレールが一本、いずれも壁にがっちり固定されている。

山鳩 死亡現場 (1号室)



「なるほど、そんなものが頭に倒れてきたら即死ですな。頭が木っ端微塵になつていたのも頷けます」

矢野警部は納得したように言い、レールが固定されていた場所に近寄る。犬塚刑事も説明を続けた。

「展示されているレールは全部で四本。金具は1本のレールに対して左右四つずつ、簡単な構造ながらも頑丈なボルトでしっかりと壁に固定されていました。壁も傾斜があり、レールが簡単には倒れないようになっています」

「ボルトはどのような様子でしたか？」

「それが、寝台が一番近い場所のレール、今倒れているレールのボルトが全て外されていたんです。外された金具は全て床に落ちていました」

「外されていた？ 錆びて折れた、とかではなく？」

「僕も少し驚く報告だった。何だか怪しい展開になってきた。」

「ええ、ボルトの取り外しに使われたと思われるスパナも放置されていました。ボルトと共に、指紋は出なかったようです。どこにでも売っている市販品ですし、購入経路を辿るのも困難を極めるでしょうね」

矢野警部は静かに溜息をついた。

「……これは、どうやら殺人事件のようですね」

同感だ。でも、犬塚刑事は反論した。

「決めつけるのは早計ではありませんか？ 自殺の可能性もあるのでは？」

「だとすると、布団の状態が矛盾しますな」

矢野警部はそう切り返して寝台に向かい合った。山鳩会長の亡骸は大部分が撤去されていたが、大きな血溜りとわずかに残った灰褐色の脳味噌が、見ている僕を嫌な気分させた。

「布団を見て下さい、犬塚刑事。大量の血だけでなく、黄色っぽい液体も大量に付着しています。詳細は鑑識に見てもらわないと分かりませんが、脳髄液か何かでしょう。ここから分かることは、被害者は頭から布団をすっぽりと被っていた状態で頭を砕かれた、ということですね。そうでもしないと、頭を砕かれた際にここまで体液が布団に付着している事実の説明が付きません」

「なるほど、布団を被つて視界を遮られた状態では、レールを倒して自殺するなんてことはできませんね。ですが、それなら犯人はなぜ布団を被せたんでしょう？」

僕は思わず口走った。

「返り血を浴びないように、でしょうね」

「同感です、剣さん」

小柄な警部は剛毛を少しじり、続ける。

「そこまで計算して犯行に及んだとすれば、今回の事件は衝動的なものではないでしょうな。計画殺人だと考えていいでしょう」

ここで犬塚刑事は僕の方を見た。

「剣さん、あなたは山鳩さんが生きていた時にこの部屋に入りましたし、遺体を発見した際もこの部屋の中を見えています。何か変わったことや、気付いたことはありませんか？」

僕は部屋中を見回した。レールが倒れ込み、寝台は重さに耐えかねて少し変形している。床に敷かれた分厚いアクリル板は大きくヒビが入っているが、その下に広がる鉄道模型は無事のようにだ。他は山鳩会長が自慢していた机も、運転台も、特に変化があるようには思えない。

「床下の模型については何とも言えませんが、他は特に変わった様子はありませんね」

矢野警部は特に落胆した様子も見せず、そのまま鑑識に質問を投げた。

「阿部さん、山鳩氏の死亡推定時刻は分かりますか？」

「どうやら、このそばかすぼつちやりの鑑識官は阿部さんというらしい。」

「昨夜2時頃、誤差は前後1時間というところですね」

「そうなるかと、ほとんどの人は寝ていてアリバイを証明することは困難だろう。」

「他に何か発見は？」

「山鳩さんのものとは異なる毛髪を複数種類採取しました。容疑者の行動を洗って、この部屋に出入りしたことがないにも関わらず毛髪が発見されたら、恐らくその人が犯人である可能性が高いです」

「過度な期待は禁物ですな。犯人は指紋を付けないように気を遣う人物です、毛髪のことくらいは念頭に置いて注意していきましょう」

彼女からはそれ以上の報告が無かったため、警部は僕を連れて廊下に戻った。踏切の所で羽黒さんが待っていた。

「お待たせしました。まずはこの現場写真を見て下さい。」

少しシヨッキングかもしれませんが、大丈夫ですか？」

警部は女子大生が頷くのを見届け、現場の写真を見せた。羽黒さんの顔から僅かに血の気が引く。

「羽黒さん、あなたは普段からこの館の掃除を任されていたそうですか？ どうですか、何か変わった点やおかしな点はありませんか？」

僕は写真を覗き込んだ。まだ遺体を撤去する前の現場写真だ。あまり見えていて気持ちのいいものではないが、この女子大生は態度に似合わず意外と気丈なのかもしれない。

「うーん……あ、あの」
「何かありましたか？」

矢野警部の声に僅かに期待が滲む。しかし彼女は首を横に振り、漫然とした回答をした。

「何が、というと分からないんです、ごめんなさい。でも、何かこう、全体的にいつもと少し違うような気がして……」

「全体的に？」

「はい、あの、小さな地震が起きて部屋の中身が全部少しくずれた、みたいな。そんな感じですよ」

その言葉に僕は驚かされた。

「そーいや警部、昨夜地震がありませんでしたか？」

「地震ですか？ 昨夜の何時頃ですか？」

「1時半過ぎです」

矢野警部と羽黒さんは揃ってスマホを取り出して調べながら、揃って首を捻る羽目になった。

「気象庁のサイトで確認しても、その時間の地震情報は無さそうですね。……揺れを感じたんですか？」

「それが、感じたとしても小さな揺れだったので、もしかしたら僕の勘違いかもしれません」

矢野警部は難しい表情をしていたが、この件については保留することにしたみたいだ。

「羽黒さん、とりあえず館の中を案内してもらえますか？ 何せ、ここに仕事で来たのは10年ぶりなものでしてな」

＊確水瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

旅館に戻っても、私の番はまだだった。それもそのはず、橋まで行って帰ってくるのに10分くらいしか経っていない。大人しく部屋でテレビでも見ていることにした。

チャンネルをポチポチといじっていると、衛星放送でやっている番組に目が留まった。

『……上野駅は、かつては北の玄関口としてその名を馳せ、石川さゆりの『津軽海峡・冬景色』でも歌われています。上野から北に向かう寝台特急は、尾久の車両基地からバックで駅に入ってきます。鉄道員の間では「推進運転」と呼ばれる手法です……』

日本の主要駅を取り上げる番組のようだ。画面には、ブルトレの客車を先頭にゆつくりとホームに入る列車が映し出されている。

礼士さんに出会う前の私なら、こんな番組は素通りしていたに違いない。あの人に出会ってから、私は随分変わったと思う。何に例えるのが一番妥当なのかは分からないけど、深く息ができるようになった気がする。私の今の居心地が良くなった気がする。

結局、最後まで駅の番組を見てしまった。来週は門司駅を取り上げます、というナレーションで締めくくられると、ニュース番組が始まった。

『10時になりました、ニュースをお伝えします』
そこで入ってきたトップニュースに私は目を疑った。

『今朝、秋田県横手市の民家で男性の死体が発見されました。死亡したのは住人で『エルム模型』会長の山鳩宗吾さん(64)です。警察によりますと、山鳩さんは昨日から泊りがけでの来客を迎えていたと、警察

は来客者との関係も踏まえながら、殺人事件として捜査を進めています……』

音声は問題ではなかった。問題は映像だった。レンガ造りの建物の窓に、見覚えのある顔が映し出されていた。

「矢野警部……」

警部が現場にいるのは何もおかしいことではない。問題は、警部の話し相手だ。

がっしりした体格に、眼鏡の奥の垂れ目。そして、左頬の傷跡。見間違えるはずもなく、私の最愛の人。

「礼士さん……!？」

そこから先、ニュースの内容はまるで頭に入らなかった。どうして礼士さんがあんな所にいるのか、皆目見当がつかなかった。唯一分かることは、あの人はあの人で別の事件に巻き込まれたらしいということだ。

秋田の事件の犯人は不運だ。礼士さんの頭の切れ味に翻弄され、やがて馬脚を露すことになるだろう。

でもそれは逆に、私が礼士さんを頼ることができないという事実を決定的に通告するものでもあった。今この場で、この旅館で起きた事件について私は何一つ関与していない。だから堂々としていればいい。

でも、警察はそこまで甘いだろうか？ 私が潔白なのはあくまでもこの事件に関してだ。私の過去を調べると、笠原のことが簡単に判明するに違いない。邪推が過ぎる気もしたけど、警察がその事実をどう捉えるかを想像すると、たちまち不安が暗雲のように立ち込めてきた。

秋田駅で別れ際に聞いた、あの人の言葉を思い出す。

—— 忘れないで。僕はいつだって瑞穂さんの味方だからね。

忘れてなんていない。忘れられるわけがない。でも、今は助けを求められない。礼士さんもまた、私

とは別の渦中に身を置いている。いくら私が助けを求めても、礼士さんが駆け付けてくれるかどうかは疑わしかった。いくら私が、あの人の心に、あの人の頭脳に全幅の信頼を寄せているとしても。

誰かがドアをノックした。私は返事をして、ドアを開けに行く。足の具合はもはや痛みを意識しない程度に落ち着いていた。

「碓氷さん、警察の人が話を聞きたいと言っています」
津軽さんの言伝を受け、私はロビーに向かった。

* * *

雨は止んでいた。でも、西の空に真つ黒な雨雲が立ち込めている。また降り始めるのも時間の問題だろう。

「碓氷さん、どうぞ座って下さい」

私を待っていたのは黒潮警部だった。書類に目を通すためか、さつきまでは無かった縁なしの眼鏡をかけている。

「改めまして、高知県警の黒潮祐介といます。島風さんについて、いくつか聞きたいことがあります。島風さんについて、いくつか聞きたいことがあります。島風さんについて、いくつか聞きたいことがあります。」

挨拶代わりに警察手帳を見せる。桜の紋章が照明に照らされて光った。

「時間をかけてもアレなんです、早速始めましょう。昨日からの碓氷さんの行動を教えてください。できるだけ細かく」

単刀直入にアリバイを問われた。私は頭の中に蘇る出来事を時系列順に並べ替えるのに少し時間を要した。

「昨日はここに昼過ぎのJRで来ました。高知市街に前泊して、墓参に必要な道具を買い揃えていたんです」

黒潮警部は丹念にメモを取りながら先を促した。だるまみたいだな、と頭の使っていない部分で不躰なことを思った。

「墓参についてはさつき話した通りです。もう少し詳細に話すと、お墓から帰る時に足を滑らせて、右足を挫いてしまったんです。自力でどうにか国道まで出たんですけれど、そこに偶然津軽さんが運転するトラックが通りかかったんです」

「津軽さんちゆうんは、この旅館の料理人の？」

一つ頷いて先を続ける。

「このロビーに担ぎ込まれて応急手当を受けた後、支配人さんが医者の方診を呼んでくれました。その先生に診療所に連れられ、レントゲンを撮ったら捻挫と診断されました。そこからタクシーを使ってここまで帰りました」

「なるほど、診断書やタクシーの会社とかは分かりますか？」

診断書は部屋にあると伝えると、後で見せてほしいと言われた。タクシーについてまでは覚えていないけど、この地域にそんなに山ほどタクシー会社があるとは思えない。警察の力ならすぐに分かるだろう。

「宿に戻っても、足をやられたので身動きが取れず、そのまま一泊することになりました。6時前くらいまで部屋でシャワーを浴びたり、昼寝をしたりしていました」

「つまり、ここに滞在しゆうんは全て偶然やって言いたいがですね？」

「はい」

黒潮警部はじつと覗き込むように私の目を見た。

「怪我の具合はどうですか？」

目線を私から手元のメモ帳に移し、質問を続ける。

「ほぼ完治しました。てつきりもう少し時間がかかると思っていたんですけれど」

「なるほど、それは良かったですね。それで、夕食の辺りからの行動は？」

私は記憶を辿ろうと空を見上げた。またぼつぼつと雨が降り始めている。

「食堂に入ったのが6時前で、確か一番乗りでした。少しすると霧島さん……ええと、支配人と女将さんの息子さんですね、あの人が現れて一緒に夕食を食べました」

「えっ、ちよつと待った。碓氷さんは霧島さんと知り合いやったんですか？」

「ええ。こんな所で会うなんて予想だにしていなかったので驚きました」

警部はまた私の目を覗き込もうとする。今度ははつきりと訝しむ意思が感じられた。

「霧島さんとはどういった関係ですか？」

「どういった……難しいですね。元々は私が前まで働いていた居酒屋の常連さんだったんですが、色々あってプライベートでもお世話になるようになって」

警部はいまいち飲み込めないといった表情を浮かべた。でも、これ以上は私も説明しようがない。

「顔馴染み、という理解でかまんですかね？」

「かまん？」

「ああ、失礼。こつちの言葉で「構わない」という意味です。顔馴染み、という理解で構わないですかね？」

「ああ、ええ」

お母さんが生前に使っていた土佐の言葉には懐かしさを覚えることはあっても、いつもいつも理解できるわけではない。

「それで、霧島さんと食事をとって、それから？」

「そうしているうちに、島風先生のゼミ集団が入ってきました。霧島さんは島風先生と知り合いみたいで、彼の方から近付いていきました。私もそれに半ば強引に誘われたんです。結局、しばらくみんなで食事を楽しんでい

ました」

黒潮警部は少し驚いたように薄い眉を吊り上げた。

「霧島さんは今回の被害者と面識があった、と言うんですね？」

「ええ。国交省の方の仕事で面識があったみたいです」

警部はそっと背後を見た。部下の刑事が霧島さんに事情を聞いている最中だった。

「霧島さんと島風さんの間で何かありませんでしたか？」

私は首を横に振った。

「いえ、終始和気あいあいとした雰囲気でした。私が見た限りでは。私は途中で抜けたので、最後まででは分かりません」

「途中で抜けた？　もしかして、津軽さんが焼酎をまいたのって確氷さんですか？」

「どうやら他の証言者から既に話を聞いているみたいだ。ええ。それで着替えることにしたのと、もう食事が終わったのもあって、そのまま自分の部屋に引き上げることにしました。……ただ、少し気になることがあって」

警部はメモを取るために私を少し待たせ、ペンを置いてから聞いた。

「気になること？」

「ええ。あの時、どちらかというとう島風先生が焼酎を取り落としたような気がするんです。その時は津軽さんが私に平謝りだったので気付かなかったんですけれど、今になって思い返してみれば……島風先生はかなり驚いた表情をしていました」

「まあ、グラスを落として割れば驚くのも無理はないでしょうね」

警部の理解の悪さに私は少し苛立った。

「そうじゃなくて、島風さんが津軽さんを見て驚いて、

そして渡された焼酎を取り落としたんです」

それを聞いた警部の顔色が少し変わった。目がさつきまで無かった輝きを爛々と放ち始めた。

「それは確かですか？」

私は少し逡巡する。でも、今更否定する気にはなれなかった。

「……ええ、十中八九」

警部は少し考え込むようにソファの背もたれに体を預けた。

「確氷さん。あなたの話が正しいなら、島風さんと津軽さんは面識がある可能性が高いです。まだ津軽さんからは話を伺っていないので何とも言えませんけれど。その時の津軽さんの様子はどうでしたか？」

「……いや、私に平謝りするばかりでした。私も気が動転していたので、どこかおかしな様子があったかと聞かれると、分かりません」

警部はメモを取り、先を促す。

「なるほど。そこから、どうしました？」

「ええと、焼酎で汚れたのはズボンだけだったんですが、津軽さんが私の服を一式洗うと言いつ張つたので、旅館の浴衣に着替えるために部屋に戻りました。最初は私は洗うのはズボンだけでいい、と遠慮したんですが、何回も言われると無下に断るのも悪いような気がして、結局一式洗ってもらいました。今朝返してもらいました」

「その服、後で見せてもらえますか？」

女物の下着も入っているからさすがに少し渋ったけれど、部下の女刑事が確認するというところで話は落ち着いた。

「焼酎でベトベトするのをお風呂で落としました。幕掃除で体を動かして疲れたのもあって、長風呂をしました」

風呂を出た後も部屋でテレビを観たりしていました。10時過ぎに女将さんが服を汚したお詫びとして、ホットコーヒーをサービスで持ってきてくれました」

そこから話は今朝に移る。

「朝食でも霧島さんと一緒にになりました。仕事で土電の方に行く、って話を聞いている時に津軽さんが服を返してくれて、その直後に潮路君が島風先生を探しに食堂に来ました。私は食事が終わったら探すのを手伝うことになって、まずは自分の部屋を探しました」

「なるほど。その辺の話は既に潮路君から聞いています。部屋では何も無かったそうで」

聞いているなら話は早い。自室の搜索を終えた直後に白鷺君が大騒ぎしながら飛び込んできたところまで説明して、私は話を終えた。

警部はメモ帳のページをめくり、質問を続ける。「大まかな行動は把握できました。夜間、確氷さんのアリバイを証明できるものは何かありますか？」

考えるまでもなくそんなものは無い。一人で寝ていたのだから。そう伝えると、警部は軽く苦笑いした。

「まあそうですね。……それにしても、随分落ち着いていますね。普通はアリバイなんて真直面から聞かれたら不快感を示す人が多いんですけど」

今度は私が軽く苦笑する番だった。

「良くも悪くも、警察には何度かお世話になったので……こういうのには慣れていります。過去にも殺人事件の現場に居合わせたことが何回かあったんです」

黒潮警部にとってこの発言は想定外だったみたいで、詳しい説明を求められた。私はいつまでも過去の事件を説明していった。トワイライトエクスプレスの事件、新幹線が乗っ取られた事件、霧降荘の事件……思えば、

いつだって最後には礼士さんが横にいた。

「なるほど、霧島さんと縁ができたんは新幹線が乗っ取られた事件ですか。そうか、確氷ってどこかで聞いた名前やと思ったら、東京駅で……」

秋田駅の事件については話さなかった。いくら不起訴になったとはいえ、自分から話すのは躊躇われる。話さずとも、向こうから勝手に嗅ぎ付けるだろう。

「確氷さん、2号室でしたね？ 島風先生が宿泊していた部屋の隣です。昨夜にかけて何か変な物音を聞いたりしませんでしたか？」

私は少し考えてから、否定する。

「そうですね。いや、実は監視カメラの映像をチェックしたのですが。ですが、島風さんが一人で出入りした様子は全く無かったがです。となると、彼女は一階か二階の非常通路から出たことになるがです。しかし、その通路は業務員専用で施錠されています。となると、島風さんはどうやってこの館から出たのか、というのがどうも引っかかって……」

捜査情報をそんなにベラベラ喋っていいものなのだろうか？ でも、そういうことを教えてくれるということには私はあまり疑われていないみたいだ。

「すみません、私には何も心当たりがありません」

「そうですね……何か気になる点や、心当たりがある点はありませんか？」

私は少し考え、ある事を思い出した。

「ゼミ生の女子大生がいるじゃないですか、ええと……何て名前でしたっけ？」

「常盤さんですね」

「ええ、そうです。彼女、傍目からだとも様子が変な気がして……」

「変？ 瀬戸が話を聞きましたが、確かにかなり恥ずかしがり屋……というか、何かに怯えているような印象を受けますね。確氷さんもそう感じますか？」

私は小さく頷いた。確証があるわけではなく、何かの予感めいたものに過ぎない。断言は控えた。

「分かりました。聞き込みはとりあえず以上です。ご協力、感謝します」

雨はいつの間にか、本降りに逆戻りしていた。

*大和叶 —— 秋田県横手市・『電車館』

剣さんと羽黒さんが矢野警部に連れていかれ、鹿島さんは大塚刑事に付き添われて自室で安静にすることにいった。私達は食堂車に残された。

「これからどうなるんでしょう、私達？」

「さあ。まあ、俺達は何もしてねえんだ。堂々としてりゃいい」

でも、そうやって堂々と開き直れるのは釜田さんくらいだ。私も含め、ほとんどの人は不安か不審の表情を浮かべていた。

「ねえ、叶。一つ聞いていい？」

「どうしたの、お姉ちゃん？」

「お姉ちゃんはお姉ちゃん、それから釜田さんを見た。」

「釜田さんのことを店長って呼ばないのって、何かあるの？」

何か深刻な話かと思ったら拍子抜けした。

「ああ、俺が頼んだんだ。店長って呼ばれるのは好きじゃねえんだ。大して偉くもねえくせに驕ったらどうしようもねえからな」

「ああ、そういう理由なんですか」

お姉ちゃんも深い理由が無いことに拍子抜けしたみたいで、話はそこで終わってしまった。

「比叡さん、少しいいですか？」

気が付くと大塚刑事が戻ってきていた。

「あ、はい。どうしました？」

「少々聞きたいことがあります」

出っ歯の刑事は詳しくは語らず、そのままお姉ちゃんを連れ去ってしまった。

「どうしたんだろ……」

「さあ。あれじゃねえか？ ほら、カメラマンがいなくなっただら？ その件で何か発見があったとか」

気を揉んでいたけど、当の本人は10分足らずで帰ってきた。

「逮捕されたかと思った」

「何言ってるのよ」

私の軽口にも、お姉ちゃんは軽くげんこつを食らわせる真似をした。

「それで、何の話だったんだ？」

「水郷さんが残した荷物の確認に付き合わされました。妙な物が無いとか、無くなっている物は無いとか。写真の確認も一緒に」

お姉ちゃんは私の隣に座りながら説明する。

「それで、何か発見はあったの？」

首を横に振ったところを見ると、収穫は無かったみたいだ。

「変な物があつたわけでもないし、逆に無くなったものも思い当たらなかった。私も彼女の荷物を逐一チェックしているわけじゃないから、断言はできないけど」

「写真はどうだったんだ？ それもチェックしたんだろ？」

釜田さんがお姉ちゃんのはす向かいから話に割り込む。「たくさん撮っていたけど、そのほとんどがこの館内の写真だった。特に何か変な物が写っていたりはしなかったと思うけど」

「じゃあ、データはそのままのことか。一枚くらいなら消去しているかもしれないねえが、警察の手にかかれば復元はお手の物だ。SDカードごと消えてたりバラされたりしてねえってことは、調べても何も出てこねえだろうな」

釜田さんの考えには納得できるけど、そうなるのままです水郷さんがいなくなった理由が分からない。仮に：もし仮に既に殺されているとしたら、口封じの可能性は低いことになるけど。口封じなら、犯人がカメラやデータデバイスを滅茶苦茶に壊しているはずだ。

「玄関に水郷の靴はあったのか？」
「ええ。水郷さんどころか、全員分の靴があったみたいですよ」

「そうなるって、この館のどこかにいる可能性が高いな。自分で前もって別の靴を持ってきていたんじゃないかな話だが」

私はここで閃いた。

「靴なら二階の衣装室にあるんじゃないですか？ あそこ、歴代の鉄道職員の制服が保管されているんです。そこなら靴もあるでしょうし」

「なるほどな。後で警察に話してみるか」

ふと私は、通路を挟んで隣のテーブルを見た。島海先生と敷島取締役がお通夜みたいな雰囲気ではそぼそと会話をしている。

「この館って、10年前にも死者が出ていますよね？」

「ええ、ウチの親方が放火で亡くなったのもちようど同じ時期でした、ハイ。今回の件と関係あるんですかね？」

放火？ 物騒な言葉が敷島取締役の口から飛び出した。島海先生は興味を持ったようで、少しずつ話を聞きだしていく。

「昨日も夕食の時にその話をしてたな。あの爺さん、えらく不機嫌だったが」

私の向かいで釜田さんが言った。

「そういえば、昨日の夕食の席で山鳩会長、途中で少し席を外して剣さん達のテーブルに行っていましたね。デザートの前だったかな？」

「ああ。その時に敷島取締役が10年前の工場放火のことを教えてくれたんだ。当時の警察は山鳩の爺さんを疑っていたらしいが、決め手に欠けたらしい」

何だかきな臭い話になってきたところで、犬塚刑事が私達に声をかけた。

「皆さん。これから事情聴取を行います。お手数ですが、しばらくお付き合いです」

警察も本格的に動き出したみたいだ。

「霧降荘の時よりも楽だな、警察がいると」

「ですね」

釜田さんの耳打ちに私はそつと返した。

「場合によっては後程個別にお話を伺うかもしれないませんが、まずはこの場で質問をしていきます。皆さん、くれぐれも正直に答えて下さい。分からないことは分からないでも構いません」

少なくとも犯人は正直に話さないんだろうな……でも、この中に犯人がいるかどうかは分からない。

「では、まずは敷島取締役からいいですか？」

「え、ああ、はい」

胡麻塩頭の社長に白羽の矢が立った。

* 剣礼士 —— 秋田県横手市・『電車館』

羽黒さんが館を案内してくれることになった。

「えと、あの、ここが3号室で、水郷さんの部屋です……」

口ごもりつつボタンを押し、廊下と部屋が連結されるのを待つ。

「このドアの構造って、確か一階だけでしたよね？」

「あ、はい。二階の部屋と、一階でも応接室とかは普通のドアです」

普通のドアと言っても、列車の車内の貫通扉を流用しているのがそのほとんどを占める。客室とデッキを仕切ったりするアレだ。それを普通のドアと言うべきかどうかは、僕にも分からない。

3号室が廊下と連結され、ドアが開く。中はやはり窓が無くて真つ暗だ。矢野警部が灯りを点ける。

「なるほど、確かにめぬけの殻ですな」

部屋には他の居室と同じように寝台、テーブル、運転台、床下には鉄道模型のジオラマが広がっている。この部屋には様々な行先標が壁に展示されている。

「あれ、私の名前がある」

羽黒さんが部屋の一角を指差した。錆と汚れが浮いたホロー板に『急行羽黒 秋田行』と記されている。

『急行羽黒』ですか、また随分と古いものを……昭和30年代に上野と秋田を結んでいた夜行列車ですよ。確か昭和42年だったかな、名前が『鳥海』に変更されて他の列車と統合されたはずですよ」

「じゃああの板は、列車の名前と行先を書き記したもので」

なんですね」

「ええ。当時は今みたいにLED表示なんてありませんから、列車が変わる度にあの板も交換していたんです」

ひよっとしたら僕の苗字もどこかにあるかもしれない。96年まで大阪と新潟を結んでいた寝台特急に『つるぎ』というものがあつたが、あれも源流を遡るとかなり古いはずだ。

脱線した話を元に戻そうと、矢野警部が大きく咳払いをした。

「それにしても変ですな。水郷さんはカメラマンと聞いていますが、商売道具のカメラも置きっぱなしです。他の着替えや荷物もみんな放り出して、どこに行ったんでしような？」

室内は決して荒らされている、という感じではない。

彼女の荷物も無造作に放置されている、といった感じだ。部屋中をくまなく探してみても、髪を赤く染めた彼女はどこにもいなかった。

「彼女が消える理由が何かあるのでしょうか？」

僕は小声で矢野警部に聞いた。

「可能性はありますな。一番考えられるのは、水郷さんが山鳩さんを殺害してそのまま現場から逃走したケース。しかし、荷物を全部放り出していったことが引っかかります。先の布団の件から、今回の殺人は計画殺人である可能性が高い。この部屋の状況は矛盾します」

僕は、もう一つの可能性を思い付いた。

「もしくは、水郷さんは犯行現場を見てしまったのではありませんか？ それで犯人に口封じのために殺害された」

「それも検討すべき可能性でしょうな。しかし、この部屋には荒らされたり乱闘をした形跡がまるでありません。

不意打ちで殺害されたとしても、遺体はどこにあるのか？ それがはつきりしないことには……類似のケースとして、どこかに監禁されている可能性も捨てきれません。しかし、その場合は急がないとまずいでしょうな」

水郷さんの行方については結論が出なかった。後で比叡さんに残っている物を確認してもらおうことになり、3号室を後にした。

「1号室と2号室はそれぞれ部屋の主である鳥海さんと釜田さんに剣さんですね、その人の立ち合いの下で行うので後回しにしましょう。羽黒さん、二階に案内してもらえますか？」

「はい、こつちです」

廊下と応接室を抜け、玄関に着く。螺旋状の階段を上がる。

「二階には図書室と衣装室、客室がいくつかあります。

どこから見ても回りますか？」

「二階の客室を使っているのは誰ですか？」

「5号室を比叡さんと大和さん姉妹、6号室を敷島取締役、7号室を鹿島さんの自室です。私には泊りがけではなく、通いで来ているので部屋はありません」

警部は少し考えて、先に図書室を見ることにした。羽黒さんの後ろについて歩く途中で、僕はまた警部に耳打ちした。

「警部、なぜ容疑者であるはずの僕も一緒に見て回るんですか？」

「理由は二つあります。まずご存じでしょうが、私は鉄道に詳しくないので。剣さんの専門知識がどこで役に立つかわかりませんからな。もう一つは、可能性はほぼ無いと思いますが、仮に剣さんが犯人だった場合を考えてです。鉄道にまみれたこの館は、剣さんにとって犯行

現場として非常に有利に働くはずですよ。そうなれば、逐一監視を付けるのが一番安全です」

「信頼されているのか怪しまれているのか、何だか複雑です」

僕は少し苦笑いして、前々から気になっていた事をぶつけた。

「矢野警部、10年前にこの館で起きた播磨社長の事故死、そして三辺製作所の放火、もう少し詳しく教えてくださいませんか？」

小柄な警部は僕を見上げて、少し考え込んだ。

「実は、10年前にここで起きた事故は私がまだ駆け出しの刑事だった頃に担当した事件なのです。そして、私が今でも疑念を抱いている数少ない事件です」

「疑念？」

「ええ。播磨氏は1号室の本棚の下敷きになっていました。ただ、部屋全体がどこか違和感があると、当時の播磨氏の妻、今は旧姓に戻って妙高真理さんになっているはずですが、とにかくその人が語っていました。あの時、播磨氏は再婚したばかりで、奥さんの打ちひしがれようは今でも覚えています」

部屋全体に違和感がある……さつき、羽黒さんも同じ事を言っていた。10年前にも全く同じ証言があつたのは、何か引っかかる。

それにしても、と僕は別のことに気が付いた。あの写真集で播磨社長と一緒に写っていた薄い化粧で小太りな女性は、やはり奥さんだったのか。しかも後妻。

「結局、部屋に内側から鍵がかかっている播磨氏以外は出入りできなかったことから、我々警察は事故死として処理しました」

今日の山鳩会長の部屋は、ドアボタンを押したらすん

なりと部屋の扉が開いた。水郷さんの部屋も同様だ。でも、監視カメラの映像からして密室と判断せざるを得ない。

「三辺製作所については当初、私は直接捜査には加わっていませんでした。しかし、死亡した三辺氏の交友関係を洗うと、偶然にも山鳩会長の名前が出てきました。偶然にも、言いましたが、これは最終的に偶然と判断されたのです」

「なぜですか？ 敷島取締役もそれについて疑念を呈していましたか？」

矢野警部は少し苦い顔をした。

「山鳩会長がアリバイを供述したからです」

「まただ。そのアリバイって何だ？」

「詳細は私もさすがに覚えていません。何せ10年前のことですから。気になるのであれば、後で当時の資料をお見せしても構いませんが」

「本当ですか？」

矢野警部は少しだけ、ほんの少しだけ笑った。

「ええ。去年、居酒屋で新幹線車内での連続毒殺事件を解き明かしてくれましたから。あの時も捜査情報をこっそり教えました、今更同じことです」

「あれ、そうでしたっけ？ 覚えていませんね」

僕はわざとすつとぼけた。これについては口外しない約束になっている。矢野警部は笑みを頬の筋肉の中に戻した。図書室に着いた。

図書室は昨日と変わらずに広々としていた。しかし、そのスペースに似合わない数の本と本棚がかなりの視覚的圧迫感をもたらしていた。

「見て回るだけで骨ですな。10年前よりも蔵書が随分増えたような気がします……」

「わ、私に言われても……」

無理もない。羽黒さんはただのお手伝いさんだ。しかも、住み込みだったり長年働いているわけでもない。

「季刊発行の雑誌を集めているのかもしれないね。時刻表のように月一で発行されるものや、ホビー誌も季刊のものが多いですし」

「なるほど。それは10年も集め続ければ膨大な数になりますな」

矢野警部は感嘆とも呆れともつかない溜息をついて、本棚の中へと歩み始めた。

「剣さんは既にこの図書室には入りましたか？」

「ええ、昨夜は食後をここで過ごした後に階下で鉄道模型の運転に興じました。そういうえば、水郷さんがここで妙なものを見つけていましたね」

「妙なもの？」

「ええ、こつちです」

僕は昨日見つけた文庫本の棚に向かい、事の顛末を説明した。

「なるほど、綾辻行人の『館シリーズ』ですか。剣さん、読んだことはありますか？」

首を横に振ると、後ろから羽黒さんが声をかけた。

「私、それ知ってます。ミステリは割と好きでよく読むので……」

予想外の所で心強い味方を得た。

「羽黒さん、このシリーズを読んだことはありますか？」

「随分前ですけど、あります。でも、電車なんてほとんど出てこなかったような気がします」

彼女もここに置かれている理由が分からないみたいで、首を傾げている。銀の髪飾りも一緒に揺れている。

「羽黒さん、このシリーズってどんな話なんですか？」

タイトルから察するに館を舞台にした殺人事件なのは分かりませぬけれど」

僕は興味本位で尋ねたのだが、羽黒さんは丁寧にも、そしてどこか楽しそうに答えてくれた。

「このシリーズに出てくる『館』は、普通の『館』じゃないんです。舞台になるのは、ほぼ全作品において中村青司って建築家が設計した館なんです。その『館』には必ず何かのからくりが仕込まれています」

「からくり、ですか？ 忍者屋敷みたいなの？」

「ええ。そういうケースもあったと思います。ネタバレにならないように言うと、隠し扉とか、隠し通路とか、隠し部屋とか、そういうのが必ず出てくるんです」

今までに無かったよどみない口調で説明してくれる。

「作品によっては途轍もない大仕掛けを繰り広げるものもあります。あ、これなんか面白かったですよ」

彼女は楽しそうに付け加え、『時計館の殺人』を取り出した。

「しかし、やはり『電車館』にこのシリーズが置いてある理由が分かりませぬ。そのシリーズに鉄道は無関係となれば猶更」

矢野警部は『館シリーズ』から目を離し、本棚全体を見上げる。

「羽黒さん、この本棚に置いてあるものつてもしかして全てミステリですか？」

羽黒さんは本を本棚に戻し、背表紙に片っ端から目を通す。

「そうですね。ミステリやサスペンスがほとんどです。しかも、鉄道ミステリを得意としている作家の作品ばかりですね。ここに置かれている作品の全部が鉄道ミステリというわけではありませんけれど……」

女子大生は少し背伸びをして何冊か本を取り出す。

「鮎川哲也、有栖川有栖、島田荘司、西村京太郎、森村誠一、吉村達也……どの作家も鉄道ミステリの傑作や快作を執筆しています。特に、鮎川哲也は時刻表ミステリの創始者とも言われていますね」

しかし、ここでまた話は堂々巡りになってしまふ。

「綾辻行人って鉄道ミステリは書くんですか？」

羽黒さんは渋い顔をして首を捻った。

「いや、私を知る限りでは無かったと思いますよ。全部読んだわけではないので何とも言えませんけど。綾辻行人はミステリの他にホラーも数多く手掛けているので、もしかしたらそっちで鉄道系の著作があるのかもしれない」

いくら考えても結論が出ないため、この件については後で鹿島さんに聞いてみるようになった。

「まさか、この『電車館』にもからくりがあるんですかね？ 鉄道模型を使ったからくりとか」

「鉄道模型が何かしらの形で事件に関連している可能性は否定しません。ですが、建物そのものからくり云々については……そんな建築法違反の建物があったらとくに知れ渡っているでしょうな。『電車館の殺人』なんてことになったら笑えません」

僕の思いつきを矢野警部は一蹴した。

「警部」

誰かが階段をとんとんと駆け上がった。鑑識の腕章を巻いた女性が駆け込んできた。さつき山鳩会長の部屋で案内してくれた人だ。

「阿部さん、どうしました？」

「監視カメラの映像の解析が終わりました。ですが、どうも妙なんです」

僕は揃って怪訝な顔をした。

「とにかく、早く応接室に来て下さい」

鑑識官の声に急かされるようにして、僕は図書室を後にした。

*霧島翼 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

「それにしても久しぶりやね、元気にしよった？」

「ええ、まあ。先輩もお役所勤めは大変やないがですか？」

高校時代の後輩は、当時から変わらない麻呂眉で穏やかに笑った。

「会うがは、確か去年の同窓会以来でね？」

「ですな。またひろめ市場で呑みたいですね」

「勘弁してや、せとつちと一緒に呑むと財布が死ぬ」

思い出話はこれくらいにして、本題に入ることになった。

「では、改めて。県警一課の瀬戸遥です。霧島さん、まずはあなたの昨夜から今朝にかけてのアリバイを教えてください」

考えてみれば、僕はこうやって面と向かってアリバイを聞かれるのは初めてのことだ。剣さんならこういう機会が何度かあったのだろうけど。正直、殺人事件については遠巻きから話を聞いたりするばかりで、こうやって巻き込まれるのは初めてのことだ。

「そうやね、どこから話そうか。とりあえず、昨日ここに着いた時からでかまん？」

後輩が頷くの待って、僕は語り始める。

「まず、昨日ここには夕方の5時くらいに着いたがよ。

岡山からレンタカーでここまで来て」

「仕事ですか？」

「そうながよ。土電が朝倉の方で正面衝突しかけて、その調査」

上も故郷での仕事を回すなんて、たまには粹なことをすると思つた矢先にこれだ。事情が事情やから仕事は延期になったが、後で怒られそうだ。

「ここに着いて自分の部屋に戻って、夕食が6時くらいやったかな。ちようどあの人を見かけて、ご飯に誘ったがよ」

僕がそつと指差す方向を瀬戸刑事は見た。碓氷さんが黒潮警部に勧められてソファに腰を下ろすところやつた。

「碓氷さんとはどういう関係ですか？」

「顔馴染みながよ。僕の友人の恋人で、なおかつ僕の行きつけの居酒屋の店員やつたが」

「店員やつた……じゃあ、今は違つががですね？」

「らしいね。詳しくは知らんけど」

後輩はメモを取る。相変わらず達筆だ。

「そうこうしゅううちに、島風先生らが入ってきたがよ。それでこつちから声をかけて、一緒に飲み会になった」

「え、島風さんと面識があつたがですか？」

僕は頷いて熱い緑茶を啜った。

「あの人、交通経済学の教授やつたやろ？ 国交省の方の会議でたまに顔を合わせるがあつて、それでよ」

「国交省の会議……例えば、どんな？」

「そうやねえ……直近の例やと、JR北海道の件やろかね。もうすぐ3年になるんやけど、北海道の方で特急列車がトンネルで燃えた話、覚えちゆう？」

後輩は数秒間考えて、そして頷いた。思い出したようだ。

2011年5月。石勝線を走行中の特急『スーパーお

おぞら14号』がトンネル内で立往生し、その後炎上した。奇跡的に死者は出なかったが、この頃を境にJRB北海道管内では脱線や発煙などの重大インシデントが多発した。僕も北海道に何度も通う羽目になった。一度その帰り、飛行機が悪天候で秋田に降りたことで居酒屋『かま田』を発見したのだが、それはまた別の話だ。

「それを発端として、あの会社の管理体制や経営体制が問題になってね。その背景を探って、改善に繋げる会合が何度か開かれたがよ。僕はそもそもその仕事が事故調査やから、現状報告が主な仕事やったけど。島風先生は将来展望を考える側の人間やったね。その会合には島風先生以外にも交通経済学の教授が何人かおったよ」

「畑違いやったんですね」

せとつちは一つ相槌を打って、脱線した話を戻しにかかった。

「それで、解散したのはいつぐらいやったんですか？」

「うーん、碓氷さんが割合早く抜けて、僕らはその後もしばらく飲もうとしたんやけどね……急に島風先生が眠いって言い出して、結局は7時半くらいでお開きになった。常盤さんも眠そうで、早く部屋に戻りたがっちゃったね」

「碓氷さんが早抜けしたのは？」

「えーとねえ、津軽さんか。あの人が焼酎をまいたがよ。それで碓氷さん、びしょ濡れになってしもつて。食事も済んだし着替えて寝る、って言うてそのまま引き上げた。6時半くらいやったかな、もうちょっと早かったかもしれんけど」

後輩は僕の言葉を受け、メモ帳の前のページを見返した。

「他の人の証言とも大体同じですね。島風さんは代わり

の焼酎を飲んで、しばらくしてから眠気を訴え始めたみたいやったんですけど、合ってます？」

「うん、自分も割と酔っちゃったとき、ちゃんとは覚えてないけど、大体そんな感じやったと思うで」

せとつちは少し難しい顔をした。

「それからどうしました？」

「飲み足りなかったとき、外に飲みに出た。豊永駅の向こうにちよつと行ったとこに『たかちゃん』って居酒屋があるんやけど、その店主が小学校時代の友達ながよ。ここに戻ったら必ず顔を出すようにしゅうんやけど、今回も御多分に漏れず、つてとこやね」

「何時くらいまで飲んでいましたか？」

「うーん、今朝が早かったときね。10時くらいには切り上げて帰ったと思う。たかちゃん……あ、店主に聞けば分かるろう」

せとつちがメモ帳のページをめくった。

「それで、そこからは？」

「シャワー浴びて寝たのが11時前やったかな？ 起きたのは6時。朝食でも碓氷さんと一緒になって、食べゆう時に学生が島風先生を探して声をかけてきたがよ」

「ええ、それも聞きました」

「なら話が早いね。僕は仕事があつたとき、ここを7時20分には出て、土電の棧橋車庫に向かったがよ。けど、着いた途端に警察から連絡があつて、そのままとんぼ返りしてきたがよ。帰りがけ、母校の渥美ちゃんや渡邊先生、トム、アンドリューに挨拶でもしていこうかと思ひよつたんやけんどもね」

「懐かしいですね。英語部ってまだあるんですかね？」

「あるやろ。去年、ディベートの全国大会に出たって聞いたで」

せとつち、いや、今は瀬戸刑事と呼ぶべきか、とにかく彼女は僕のアリバイを表にして眺めている。

「島風さんがここに泊まりに来ることは前もって知っちゃったりしますか？」

僕はぶんぶんと言を横に振った。

「僕はこの旅館の経営にはノータッチやきね。知るはずも無い……疑つちゅうろう？」

「そ、そんな！」

この歳になつても後輩をおちよくるのは楽しい。せとつちは少し頬を膨らせてから、あれこれと質問を重ねた。物音だとか、何か見なかったかだとか、色々だ。正直に片っ端からNOと答えていった。

「何か、島風先生と揉めたりしていたことや、そういう人に心当たりはありますか？」

「うーん……そうやね……」

僕は少し考えて、ある人に思い至った。

「今は宝永大学におるんやけど、交通経済学の先生に島海先生つて人がおつてね。あの人と何か揉めた、って聞いたことはある。実際にあの二人、国交省の会議で顔を合わせるって険悪な雰囲気やったね。特に島海先生が毛嫌いした感じやった」

「なるほど、確認してみます。その関係に何か心当たりつてありますか？」

「心当たりねえ。大学の方で揉めた、って聞いたことはある。詳しくは知らんけど」

「そうですか……この旅館の中の人間で何か気がかりな人は？」

黙って首を横に振った。

「分かりました。とりあえず、聞き込みはこれで以上です。ご協力ありがとうございます」

「警察仕事もなかなか様になつちゅうやん」
瀬戸刑事は少しだけ笑って、席を立とうとした。
「ああ、ちよつと」

僕は慌てて彼女を呼び止め、小声で言う。

「その……僕はこの家の人間やし、捜査の進捗状況についてある程度知っておく権利があると思うがよ。無理にとは言わんけど、分かったことがあつたら教えてくれる？ そこから何か思い出せたり、気付いたりするかもしれない」

せとつちは顔を少し強張らせた。

「頼む！ 他の人には黙つちよきき！ それに、この辺は僕の庭みたいなもんやし、絶対役に立つき！」

彼女は後頭部のお団子に手を伸ばす。悩んだ時の癖は今でも変わっていない。

「お願い、な？ せとつち、な？」

目論見通り、瀬戸ちゃんは折れた。

「……ちよつとだけですよ。とはいえ、今分かっていることはほとんどないので、追々、こつそりと」

「いやあ、えい後輩を持った！」

この時、僕の頭に浮かんでいたのは剣さんだったことは、語るまでもない。あの人なら電話越しでも真相を看破してくれるかもしれん、そんな淡い期待があつた。

「まず、アリバイが確認できたのは津軽さんだけです。あの人は2号室のベランダの柵を修理するための建材と、今日のぶんの食料を卸しに昨夜から高知市街におつたさうです。まだ裏はとれていませんけど、トラックのカーパーチを調べたり、宿の宿泊者名簿を調べれば一発で分かると思います」

「その言い方やと、他の人にはアリバイが無さそうやね」
「ええ。常盤さんは食後すぐに眠くなつてそのまま寝て

しまい、朝までぐつすりやつたとか。他のゼミ生は部屋で昨日テレビでやりよつたエヴァを観よつたらいいです。基本的に部屋で大人しくしよつたさうです」

知り合い同士のアリバイ証言は証拠にならない。共犯の可能性があるからだ。

「犯人を絞り込む物証は、今のところ何もありませんね。とりあえず鑑識の詳細な報告を待つてから、次の行動に移ろうということになっています」

「ありがとう、せとつち。また頼むわ」

僕は情報を整理しがてら、碓氷さんの部屋に向かった。剣さんに電話をするなら、僕よりも彼女の方が適任だろう。彼ならあつてなく解決してくれるかもしれない。

その期待はあつてなく裏切られた。碓氷さんから聞いた話やと、剣さんも剣さんで事件に巻き込まれてしまつたという。

第六章 誤認

* 剣礼士 —— 秋田県横手市・『電車館』

阿部鑑識官の後に続くと思接室に辿り着いた。昨日鳥海先生と楽しんだテレビには、廊下の映像が映し出されている。

「阿部さん、これは何の映像ですか？」

「館内、及び敷地内の防犯カメラの映像です。鹿島さんの話によると、建物の一階と二階にそれぞれ5台、屋外に1台設置されているとのことですよ」

僕は警察の人々から少し離れた所からテレビ画面を注

視していた。

「今出しているのは昨夜21時、1号室よ2号室の前の廊下の映像ですよ」

「ふむ。前もって確認しておきますが、何かカメラに細工された可能性や痕跡はありますか？」

「本部の鑑識にデータ解析を依頼していますが、現在のところ特に何も細工の痕は見つかっていません。カメラ本体には何も不審な点はありませんでした」

阿部さんはリモコンを操作する。10倍速くらいの映像は1時くらいに部屋に戻る鳥海先生を映し出した後は、しばらく動きが無かつた。

「ここからです」

刑事はまたリモコンをいじり、映像を普通の速度に戻す。画面右下に出ている時刻は深夜1時32分だ。

「ん？」

矢野警部が喉の奥で声を上げた。

「誰もいないのに、廊下の奥の踏切が動き出していますな」

僕も目を見張つた。映像からは実際に遮断機が下りる様子は見えないが、警報灯が赤く点滅する光が薄暗い廊下を染めるのがはつきりと分かつた。

「これは1、2号室側の廊下の映像ですが、3、4号室側の廊下の映像も全く同じ光景が収録されていました」

「すぐに鹿島さんをお呼び下さい」

「分かりました。那智君、お願い」

阿部さんは下つ端の鑑識官を走らせ、テレビの前の椅子に陣取つて映像を見届ける。踏切は鳴り続けること10分弱、正確には1時32分04秒から1時40分44秒まで作動を続けた。

「叔さん、この時間に踏切の音は聞こえましたか？ あなたの部屋は4号室、踏切に近い部屋ははずですが」首を横に振った。

「廊下の壁は鉄道模型の柵でびっしりと埋め尽くされていますし、ドアは二重になっています。副次的に防音効果も高いはずですから、何も聞こえなくてもおかしくな

いと思います」
「それでは、踏切が鳴動した理由に心当たりはありますか？」

また首を横に振った。

「踏切が作動するのは、多くの場合は列車が通過するからです。駅横の踏切では列車のオーバーラン対策として、列車がホームで停車するまでの間鳴動して、停車を確認したら開き、また発車する時に閉まる、みたいなことでもあります」

「つまり、列車が近くにいないのに踏切が作動することは基本的に無いわけですか？」

僕は頷き、テレビに視線を戻した。

「踏切が作動したのはこの一回だけですか？」

警部が阿部鑑識官に聞いたが、その返事にまた驚かさ

れた。
「それが、一階だけ途中で停電したみたいで、少しの間だけ映像が途切れているんです」

「停電ですか？」

警部は顔を険しくして時刻を確認する。

「午前1時48分22秒から49分27秒、1分05秒の間に渡って停電しており、一階の監視カメラの映像が途切れています」

「東北電力に確認は？」

「しました。その時間、管内で停電などのトラブルは報告されていないそうです」

警部は左手で後頭部をほりぼりと搔いた。

「二階の監視カメラには異常はありませんか？」

阿部さんは首を振った。

「停電などを含め、異常は何も確認されませんでした。部屋を出入りした人や廊下を歩いている人の姿は確認されませんでした。これは食堂車の監視カメラも同様です」

つまり、一階だけ一時的に停電したということか。それなら電力異常というよりも、建物の設備に何かしら異常が起きたと考えるのが自然だ。

「停電が復旧した後、何か動きはありましたか？」

「それがですね、また踏切が作動していたんです」

「忙しい踏切ですか。まるで開かずの踏切だ。時間はどれくらいでしたか？」

「午前1時53分16秒から、午前2時5分27秒までです。12分強ですね。さつきよりも少し長いです」

これも映像を見せてもらおうが、踏切の赤い灯が廊下を照らす以外は一つ動きは無さそうに見えた。

「他に動きはありましたか？」

「いえ、夜が明けて鹿島さんが食事の支度を始めるまでは何もありませんでした。監視カメラの映像によると、昨夜はずっと誰も部屋を出ていませんし、廊下を通過していません」

その返答に警部は思わず聞き返した。

「間違いないのですか？」

「ええ。夜間、廊下には非常灯の灯りしか無いのでかなり暗いですが、さすがに人が通れば分かります」

「人よりも小さいもの、例えばネズミみたいなものなら

分からないんですか？」

僕は思わず口を挟んだ。阿部さんは僕を少し変な目で見つつも、親切に教えてくれた。

「ええ。あまり新しくない機種のカメラですから、細かい部分は映像が粗くて確認するのは困難です。最近の高精度なカメラなら楽なんですけどね」

とはいえ、人の出入りが無かったというのはおかしな話だ。だって、それが本当なら……。

そこまで考えた所で、那智と呼ばれた若い鑑識官が鹿島さんを連れてきた。

「鹿島さん、体調はいかがですか？」

「ええ、もう大丈夫です……先程は失礼致しました、ご迷惑をおかけして」

「いえ。あんなことがあったのですから、仕方のないことです。それよりも少し確認したいことがあります」

矢野警部は踏切のことを話した。

「そもそも、あの踏切はなぜそこにあるのですか？」

「なぜ、と聞かれましても……この館を建てた播磨社長

の趣味じゃないでしょうか。播磨社長が存命の頃から既

にあそこには踏切がありました。元々、2002年に高架化された小田急の経堂付近の踏切を譲ってもらったんだとか。建物の中に入るように長さを調節した以外は、オリジナルのままだと聞いています」

元々は小田急の踏切だったのか。訴訟で難儀しているイメージだけど、複雑線化はいつになったら終わるんだろう？

「あの踏切、どのように鳴らすのですか？」

「スイッチが近くにあるんです。ご案内します」

彼女はそう言い、廊下の方に足を進めた。立入禁止の黄色い規制線が揺れる1号室側の廊下は避け、4号室の

方側の廊下に進む。

「あ、あれが監視カメラですか。各部屋の内部には取り付けていないのですか？」

「ええ。旅館の客室みたいなものだと思って下さい」

そのまま踏切に着く。室内の踏切、というのも改めて考えてみるとかなり妙だ。

「スイッチはこれです」

模型棚のうちの一つに、スイッチが取り付けられている。もはや何の部品だったのかを考えるのも面倒になってきたけど、これも何かの鉄道部品なのだろう。ボタンを押すと、カンカンと音を立てながら警報灯が点滅し、遮断機が下りた。

「もう一度押すと元に戻ります」

鹿島さんは声を張り上げて、ボタンを押す。廊下に静けさが戻り、遮断機が上がった。

「他の場所から遠隔操作などはできないのですか？」

「できません」

でも、現にこの踏切は無人で動いていた。無人踏切だ。

つまり、鹿島さんが嘘をついているか、鹿島さんも知らないシステムが隠されているかのどちらかだ。

「剣さん、何か変な部分に気付いたりしませんでしたか？」

「いえ……踏切そのものには特に不審な点は無さそうです。スイッチのみで動く、という点が気になりますが、それくらいです」

矢野警部は少し考え込み、そして次の場所に向かうことにした。

「もう一つ確認したいことがあるのです、鹿島さん。一階の各部屋の扉は二重になっていますよね？ それって

手動で開くことはできるものなのですか？」

「手動で、ですか？」

「僕も同じことを考えていた。」

「この館は昨夜2時前に1分程度の停電が発生しています。その間、監視カメラは作動していません。犯人が行動を起こしたとすればその間です。その間に犯人は自室から山鳩氏の部屋に移動し、殺害し、そして自室に戻った。その仮説を検証するために、手動でドアを開けてみたいのです」

正直なところ、僕はその線がかなり薄いと考えている。

ドアは電気仕掛けのものが二重に存在し、開け閉めのアクションは合計4回必要になる。1分半ではそのアクションをこなすだけで精一杯な気がする。

実験は僕と釜田さんの部屋で行われることになった。

ドアの構造や寸法はどの部屋も同じだというのなら、事件現場となった1号室で試す必要は無い。

「それでは、客室全体のブレーカーを落とします」

鹿島さんは応接室に引き返し、配電盤を操作した。

「この館の配電はどのようになっているのですか？」

「食堂車を含めた各部屋ごとに独立しています。ただし、二重扉のうち廊下側の電力を止めるには、本館一階のブレーカーを丸ごと落とすしかありません」

僕はそこであることに気付いた。

「その時、監視カメラはどうなりますか？」

「一階の室内のカメラだけ機能停止しますね。いいですか、落としますよ？」

「落ちますよ？」

パチン、とブレーカーを落とした。応接室はまだ窓があるからいいけれど、廊下は窓も無く緑色の非常口の灯りしか無い。

「暗いですな」

矢野警部は懐中電灯で足元を照らした。僕も羽黒さんと一緒にスマホライトで前方を照らしながら、応接室から廊下に出る。

「それでは、やってみましょう。那智さん、お願いします」

矢野警部は腕時計で時間を計測し、那智と呼ばれた若い鑑識官がドアに挑んだ。

「ぐっ……結構重いですね、これ」

ドアには一応取っ手はあるが、そもそもが電気での自動開閉を前提にしているものだ。手動で開けることはあまり考慮されておらず、那智鑑識官は腰を痛めそうな体勢で奮闘する羽目になった。

ややあつて、那智鑑識官はドアの開閉試験を終えた。

懐中電灯の灯りでも額にうつつすらと汗が浮かんでいるのが分かった。

「40秒でした、お疲れ様です。次は剣さん、そして羽黒さんも試してみてください。それが終わったらブレーカーを戻しに行きましょう、那智さん。剣さんと羽黒さんはここで待機してして下さい」

那智鑑識官は中肉中背なため、体格差も考慮するため僕と羽黒さんも試験に駆り出された。僕は力持ち枠、羽黒さんは非力枠だ。結果、僕は34秒、羽黒さんは55秒かかった。

「幌を接続する時間を省いても、結構時間がかかりましたね」

「幌？」

僕の言葉に羽黒さんが首を傾げた。

「この廊下と部屋を繋ぐ布製の通路ですよ。列車に乗っている時に車両と車両の間を行き来すると、布製の蛇腹で覆われた部分を通ると思うんですけど、分かりませ

んか？」

女子大生は少し考えて、曖昧に笑って誤魔化そうとした。瑞穂さんはこういう時に分からないとはつきり言うことが多いけど、こういう微妙な反応を示す人も多い。僕はネットで解説に使えそうな画像を探した。

「これは車内から連結部を撮った写真ですね（写真③参照）。内装からすると四国の特急かな、これは？ 暗くて分かりにくいですけど、下の方に六角形の板があるのがわかりますか？ これが歩み板です。その周囲に張り巡らされているギザギザしたものが、これが連結幌です。幌は布製でそのままでは渡れないので、こうやって歩み板を渡して通路にしているんです」

スマホの画面を羽黒さんに見せながら解説する。

「次はこれ、連結幌を車外の真横から見たものですね（写真④参照）。ホームから撮ったものです。逆光気味で分かりにくいですけど、ギザギザした蛇腹が列車の顔同士を繋いでいるのが分かります。これも四国の特急ですね」

解説している間に廊下の電気が点いた。



→写真③



→写真④

「じゃあ、こういう感じの幌が一階の各部屋と廊下を連結しているんですか？」

「ええ。羽黒さん、掃除していると気付くようなものですけど……」

「わ、私はこういうのに詳しくないので……普段から意識したことはありませんし」

鉄道に疎い一般人としてはそれくらいが普通の感覚なのかもしれない。でも、瑞穂さん相手の方がずっと話し甲斐がある。

「それに、この館だと部屋と廊下を繋ぐ幌を外から見ることなんてできないじゃないですか。ホームじゃないんですから。気付くわけじゃないですよ……」

少しおどおどしながら言う彼女の言葉に、僕は少なからず衝撃を受けた。この部屋と廊下を繋ぐ幌の向こう側は見えない。そこには何かがあるのだろうか？

「羽黒さん、ちょっとそこをよけて下さい」

僕は女子大生を下がらせ、人力で中途半端に開いたドアに顔を突っ込む。幌はまだ展開していない。今なら幌

の向こう側が見えるはずだ。そこがもしも空洞なら、人を隠せるかもしれない……水郷さんとか。

でも、幌の向こう側を覗いた僕は落胆した。そこには壁が広がっているだけで、とても人を一人隠すスペースはない。

「どうなっているんだ、この館は……？」

僕は頭を働かせようとしたけれど、ブレーカーを直した矢野警部が戻ってきて僕に話しかけた。

「とにかく、監視カメラが機能を停止している間に手動でドアを開閉し、山鳩氏を殺害することは不可能ですな」
しかしそうなる、にわかには信じられない事態であることを認めることになる。

「しかし警部、そうなるなら犯人はどうやって山鳩氏の部屋に入り込んだんですか？ 監視カメラには死亡推定時刻に人の移動は記録されていません。しかし、この廊下にはカメラの死角となる部分が踏切の間くらいしかありません。つまり、他の部屋から現場となった1号室への移動はできないということですよ」

「またこのパターンですか……10年前と同じだ」

僕の言葉に矢野警部は忌々しそうに呟いた。

「剣さん、どういうことなんですか？」

羽黒さんが小声で僕に聞いた。僕はシンプルに答えたが、内心の戸惑いは抑えきれなかった。

「これは密室殺人だということですよ」

*碓氷瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館「吉野川」

備え付けの電気ポットでお湯を沸かし、ティーバッグ

のほうじ茶を入れる。

「すみませんね、碓氷さん」

「いえいえ、どうぞ」

広縁で霧島さんと向かい合って座る。窓の外には、腐食して立入禁止になっているベランダが驟雨に打たれている。そのうち柵が朽ちて根元から折れそうだけど、そうすれば線路に真つ逆さまだ。

「こんな姿、剣さんに見られたら嫉妬されますかね」

霧島さんはケラケラと笑い、私も釣られて微笑んだ。

「ただお茶を飲んでいただけでしょう。礼士さんは子持ち相手に嫉妬しませんよ」

警察一行は一通り関係者全員からの聞き込みを終え、今はそれぞれの証言を突き合わせているみたいだ。暇を持って余していた私は霧島さんを部屋に誘い、お茶を飲むことにした。どうも朝からお茶ばかり飲んでる気がする。

「お子さんは元気ですか？」

「元気も元気、お転婆な年頃で嫁と一緒に手を焼いてばかりです」

「確か、娘さんが二人……？」

「ええ。上が小3，下が幼稚園の年長ですわね」

役人はそう言い、スマホのホーム画面を見せる。

「子供の成長は早いですよ。これ、長女の入学式の写真なんですが、この間まではあんなに小さかったのに……」

家族4人だけでなく、この宿の支配人と女将さんも一緒に映っている。

「昔の写真を見返すと、人の姿形が丸つきり変わってたりして驚いたりしますよね」

私には郷愁に浸るような写真が無い。故郷の出水は捨

てた。何枚か持っていた写真も、震災で全て流されてしまった。

「碓氷さんと剣さんの子供なら、きっと元気で可愛い子ですよ」

私はお茶を嘔きそうになった。

「ま、まだ気が早いですよ！」

「そうですか？ 僕から見れば時間の問題な気がしますけどね？」

霧島さんはニヤニヤ笑いながら私を見る。

「……」

正直、礼士さんと結婚して家庭を持つことに、何も実感が湧かない。蜃気楼に手を伸ばすように、儚く頼りない情景しか思い浮かばないのだ。

それは、今までの私の人生からあまりにもかけ離れているからかもしれない。

でも、あの人は今までの人生すら塗り替える力を持っている。私の過去を消しはせず、でも、救いの色を与えてくれた。

「何か気に障ることを言いましたか？」

相手の声に我に返った。霧島さんの表情からは笑みが消え、不安と少しばかりの申し訳なさが浮かんでいた。

「ああ、いえ、大丈夫です。……霧島さんのご両親は、警察について何か言っていましたか？」

「いや、特に何も」

話題を変えるためか、宿の関係者のアリバイを私達でも独自に調べようと霧島さんは言い出した。調べたところで私達にどういかなる話でもないと思うけど、乗っかることにした。

「じゃあ、まずは父さんからですね。昨日はずっとフロントか事務室にいて、それはアリバイが取れました。フ

ロントは監視カメラに映り込みますし、事務室では電話をしたりパソコンからメールをしたり、席を立っていたとしても10分に満たない時間でした」

「そんなにメールや電話を頻繁にしていたんですか？」

「いえ、実はうちの父さん、この旅館のホームページ運営をやりゆうんですよ。そのページの更新やブログの更新をやった履歴が、父さんのデスクトップから出たんです。親父のデスクトップは親父しか操作できないので、事務室にいたのは確実やろうという判断になりました」

こういう辺鄙な宿はインターネットでの情報発信が大事ですからね、と霧島さんは付け加えてお茶菓子代わりの芋けんびをかじった。

「それが何時くらいですか？」

「父さんは事務室で10時くらいまで仕事をしよって、それから事務室で寝ていました。昨晩は親父が当直やっ

たんですよ」

死亡推定時刻は午後9時から午前3時と警察は睨んでいる。鑑識が詳細に調べて更に絞り込んだら話は変わってくるかもしれないけど、現時点では支配人さんには完全にアリバイがあるわけではない。

「この旅館、監視カメラってフロントにある一台だけですか？」

「ええ。ロビーと玄関、二階に続く階段、それにフロントが見えます。父さんが警察と一緒に確認したみたいですが、何も変な物は映っていませんでした」

霧島さんはそこから女将さんに話を移した。

「母さんは昨日もいつも通り、部屋の掃除や食事の用意に追われよったみたいですよ。夕方に碓氷さんを部屋に案内してからは、ずっと厨房で夕食にかかりきりでした。6時40分くらいに津軽さんが宿を出てからは食堂の掃

除や碓氷さんの服の洗濯とかをずっと一人でやっていたので、特にアリバイはありません」

「えっ、私の服を洗濯したのって津軽さんじゃなかったんですか？」

「違いますよ。津軽さんは昨夜は6時40分くらいからこの宿を出て、お街の方におりました」

私の知らない情報を前に、軽い緊張で喉が渇くのを感じた。ぬるくなつたほうじ茶を飲み干して、そのまま津軽さんのアリバイを聞く。

「彼女はほら、そのベランダの柵を直すための建材とペンキを買いに行ったみたいなんです。元々、卸売市場で食材を調達するのは彼女の役目なわけです。普段は午前3時とかに車を出してそのまま市場まで往復するらしいんですけど、昨日は建材調達のために早めに山を下りて、建材を手に入れてから一泊したみたいなんです」

「一泊したって、どこに？」

「はりまや橋のすぐ近くの『元親』って簡易宿泊所らしいです。長宗我部元親から名前を取っちゃうんでしょうね」

スマホで調べると、何の変哲もない簡易宿泊所の外観が出てきた。はりまや橋電停から歩いて5分もかからないというところは、高知駅からだと路面電車と徒歩で15分くらいか。

「警察もじきに裏を取るでしょうけど、嘘なわけがないと思いますよ。すぐバレるような嘘をつくとは思えませんし。彼女がここに戻ってきたのは朝の7時くらいで、そのまま朝食の支度に取り掛かったみたいなんです。そういや、碓氷さんに服を返したのもそれくらいでしたね」

確かに。

「僕が把握しちゆうのはこれくらいですね。でも、追々

分かってくることも増えると思いますよ」

「今の話って、誰から聞いたんですか？」

「本人です。両親は当然として、津軽さんも答えてくれました。経営者の息子という立場はこういう時に便利ですね」

霧島さんは屈託なく笑った。

「……そういう霧島さん、あの女の刑事さんと顔見知りみたいでしたけど、面識でもあるんですか？」

霧島さんは笑顔を引つ込め、少し目を丸くした。

「見られていましたか。実は彼女、高校時代の部活の後輩なんですよ」

世間は狭いとはよく言ったものだ……全く同じことを、昨日は私と霧島さんの間で思った。

「それじゃあ、何か教えてくれたりしなかったんですか？」

霧島さんは一拍間を置いて、そして黒い笑みを浮かべた。

「碓氷さんも人が悪いですね、実は教えてもらいました。本当は口外厳禁なんですけど……まあ、碓氷さんなら大丈夫でしょう」

私は苦笑いした。でも、どうして私はこんなに情報を集めようとしているのだろうか？ 私が事件を解決したいわけでもないのに。

「とはいえ、教えてくれたのはゼミ生のアリバイくらいでした。そのどれも大したことは無くて、結論から言うとみんなアリバイがありません。常盤さんは食後すぐに眠くなってそのまま寝てしまい、朝まで爆睡。他のゼミ生は部屋で固まって、昨日テレビでやりよったエヴァを観よったそうです。部屋の外にはほとんど出歩かなかつたみたいです。夜から雨が降りよつたのもあるんですよ」

うね」

アリバイが無い……それはいいのだが、一つ引つかかる事がある。やはり常盤さんのことだ。

「霧島さん、私は昨日早々と夕食を切り上げたので分からないんですが、常盤さんって眠そうでしたか？」

霧島さんは真剣な目をして考え込んだ。

「……言われてみれば、終盤は少ししんどそうでしたね。島風教授が眠気を訴えていたので目立っていませんでしたが」

二人揃って眠気を覚えていた……なぜ？

「碓氷さんって、高校時代の部活って何だったんですか？」

霧島さんは特に深い疑問を抱かなかつたのか、全く関係ない話題を振ってきた。

私はどう答えたものか少し考え込んだ。高校を中退したことは話さないことにした。

「……帰宅部でした」

「あれ、意外ですね。碓氷さん、足速いやないですか。東京駅での助走付き右ストレートとか」

またその話か。でも、霧島さんは私の渾身の一撃を最も間近で見ている一人だ。嫌でも記憶に残るだろう。「てつきり陸上部か何かかと思っていましたよ。碓氷さん、体締まっていますし」

「ただ細いだけです！」

私は少しむきになって言い返した。そのせいかどうかわからないが、頭の奥底からある記憶が蘇った。

「あ、そうだ。警察に服を渡さない」と

思い出した私は用事を済ませることにして、お茶会は一旦お開きになった。

*

*

津軽さんから返却された服を持って階段を降りると、黒潮警部が私を出迎えてくれた。

「遅くなってすみません、さっき話した服を持ってきました」

「ああ、碓氷さん。丁度良かった、一つ聞きたいことがあります」

そのまま窓際のソファに案内された。

「まず、こちらの服はお預かりします。明日には返しませぬので」

達磨みたいな警部はそう言い、紙袋をテーブルの脇に置いた。そして、私をじっと見た。

「碓氷さん。何か、我々に話していないことがあるんじゃないですか？」

予想外の一言に呆気にとられた。

「話していないこと、ですか……？」

警部の目はバチバチと私を射貫く。

「ええ」

答えは教えてくれない。私は必死に頭を振り絞るけど、何も思いつかない。

「分からのやつたら塚があきませぬね。昨年末の秋田駅でのことです」

心臓が鷲掴みにされた。

「あなたは笠原を殺した。だが結果的には不起訴となり、無罪となった。それについては何も言いません。ですが、まさかそれに味をしめた……なんてことはないでしょうな？」

あの獣の顔が、狂ったような嘲笑が私の脳裏に蘇る。

「釘を刺しておきますが、次も不起訴になると思ったら大間違いですよ」

私の心に生まれたもの。それは、後悔と怒りだった。

「随分と失礼な物言いですね」

私はぎろりと目の前のフーセン親父を睨む。

「私が許されないことをしたのは事実です。ですが、それにとやこや言うのであれば、今すぐ私を牢屋に放り込んでくれますか？ 私だって、好きで殺したわけではありません。好きで罪を償うことができるのであれば、どんなにそっちの方がいいか！」

テーブルをなぎ倒してやろうかと思つたが、そのぶんの憤怒を声に詰め込む。

「私が島風さんを殺害したのではないかと疑われていることはよく分かりました。しかし、私も随分と舐められたものですね。私は殺したとしても、それを隠したりはしませんよ」

「殺人犯はみなそう言うんですよ」

フーセンは火に油を注ぎ、続ける。

「東京駅で警察の静止を振り切って犯人を殴り倒したこともあつたやないですか。秋田駅ではそれに磨きがかつたんやないですか？」

「あなたの言葉を借りると、私は無理矢理磨かれたことになりませぬ。直前に私があの男からどのような仕打ちを受けたか、既に知っているでしょう？ ここまで無礼な物言いをしていて、知らないとは言わせません」

私の胸中には悔しさが渦巻いている。あの時の私の疾走は、今に至るまで呪いとして私に向かって右ストレートをぶちかまし続けている。

「それに、私には帰りを待つ人がいます。その人を裏切って罪を重ねるなんて、そんな愚かな真似はしません」

私は立ち上がった。これ以上このメタボリックシンドロームに話をしても無駄だ。この男は、私の罪を理解し

ようとしていない。私の過去を理解しようとしていない。罪を暴き、裁くことしか考えていない。

「話は以上ですか、警部？」

「ええ、碓氷さん。あなたという人間がよく分かりましたよ」

あなたが何が分かるっていうのよ。私の鋭い一瞥を、警部は軽く受け流す。

「では最後に、一市民として一つだけ。今のあなたの態度、今後私が警察に任意協力するかどうかの指針にさせてもらいます。構いませんね？」

警部は少しだけ狼狽の色を見せ、顔を強張らせた。いい気味だ。私は返事も待たずに回れ右をして帰ろうとした。

「警部……わあっ！」

麻呂眉の刑事と正面衝突してひっくり返つた。

「すみません、大丈夫ですか？」

「痛た……いえ、そちらこそ怪我は？」

私を跳ね返したメリハリの利いた肉体を見上げながら、内心で悪態をついた。高知県警にはどうもまともな人材が足りないみたいだ。

「瀬戸、氣い付けや。どうした？」

「鑑識の結果が出ました」

瀬戸刑事は私を引っ張り上げながら報告する。

「死亡推定時刻は昨夜午後9時半から11時半に絞り込めました。胃の内容物を調べた結果だそうですね」

どさくさに紛れて私も報告を聞いていくことにした。

「それと、鑑識から妙な報告がありました。遺体から睡眠薬の成分が検出されたそうですね」

「睡眠薬？」

フーセン親父がオウム返しをした。そんなことしなく

とも聞こえるだろうに。

「ええ。かなり強いものです。分量は適量やったので、過剰摂取の線はありません。自ら服用したのか、それとも……」

「関係者全員に持ち物検査を行う。部屋の搜索もや。任意調査になるけれど、押し切れ。それと、鳥海先生については俺が調べちよく」

大事になってきた。いや、既に十分大事だけど。私は打ち合わせを続ける二人を後目に怒りを吐き出しきらないまま、やつとこきロビーを後にした。

この時、私は決心していた。
自分の疑いは自分で晴らす。
犯人を突き出して、絶対に秋田に帰る。

*大和叶 —— 秋田県横手市・『電車館』

事情聴取はつきり個別にやるものだと思っていたけど、犬塚刑事はここにいる全員に対して一括で事情聴取をすることにしたみたいだ。

「では敷島取締役、あなたはそもそもなぜここに？」

「えー、山鳩会長から前々から飲みに誘われていて、それがたまたま昨夜だったんです、ハイ」

「それでは、比叡さんたちによるインタビューや鳥海先生との対談については何も知らなかったんですね？」

「ええ。山鳩会長がダブルブッキングしたんだと思います、ハイ」

犬塚刑事はタブレットを軽快にタップしてメモを取る。「それでは、昨夜から今朝の行動を教えてください」

「えー、そうだな……昨日は午後6時前くらいにここに着いて、鹿島さんにこの食堂車に案内されました。元々

夜遅くまで飲む予定だったので、泊まりの準備をしました、ハイ。夕食が6時過ぎから始まって、終わったのが何時くらいでしたっけ？」

誰に対してでもなく質問する。

「8時くらいだったと思いますよ」

鳥海先生の助け舟を受けて話を再開する。

「ああ、そうでしたそうでした。そこから場所を山鳩会長の部屋に移して飲んでいました。鳥海先生に釜田さんも一緒でしたね。えー、そこからなんですが、実はあまりよく覚えていなくて……」

出っ歯の刑事はまず、釜田さんと鳥海先生に飲み会のことについて確認した。確認が取れてから質問を再開する。

「覚えていない、というのは？」

「えー、あまり酒が強くないのに飲み過ぎちゃって」

「飲み過ぎた、というか山鳩会長に半ば無理に飲まされたんだろ？」

釜田さんが横槍を入れた。

「まあ、そういう側面もあったかもしれませんが、ハイ」

敷島取締役は少し渋い顔をして認めた。

「山鳩会長と何かあったんですか？」

「夕食の席で少しな。10年前に敷島取締役の親方、誰つつったか？」

「三辺親方ですね、ハイ」

「それだ。三辺親方が工場ごと焼け死んだ事件の容疑者が山鳩会長だったって話を敷島取締役から聞いていたんだが、運悪くその話が山鳩会長に聞かれちゃってな、ヘソを曲げたんだよ、あの爺さん」

「へえ、それでせめてご機嫌を取ろうと頑張ったら少し無理し過ぎたみたいで、酔い潰れてしまっ

釜田さんのバックアップも伴って敷島取締役はスムーズに飲み会について話し終えた。

「飲み会がお開きになったのは？」

「23時過ぎだったはずですよ。私が図書室に上がったから、ちょうど大和さんがエヴァの映画のエンディングを観ているところでしたから」

犬塚刑事は鳥海先生の言葉を受け、昨夜の番組表をタブレットで確認する。

『『エヴァンゲリオン新劇場版：序』の放送終了時刻は23時20分となっていますね』

「それならやはり23時過ぎで間違いないでしょうね。私と釜田さんと酔い潰れた敷島取締役を8号室まで運んで寝かせました」

「いやあ、昨夜はすみませんでした……」

タコ社長は少し顔を赤くした。犬塚刑事はそれには反応を示さず、鳥海先生の証言をタイプしている。

「寝ている間に何か変な物音とかは聞きましたか？」

敷島取締役は申し訳なきように首を横に振った。

「いえ、何も。朝まで爆睡で、起きたら軽い二日酔いだったくらいなので」

起きてからの行動もぱっとしなかった。シャワーを浴びて階下に降りてみたら、既に山鳩会長の遺体が発見されて大騒ぎになっていたという。

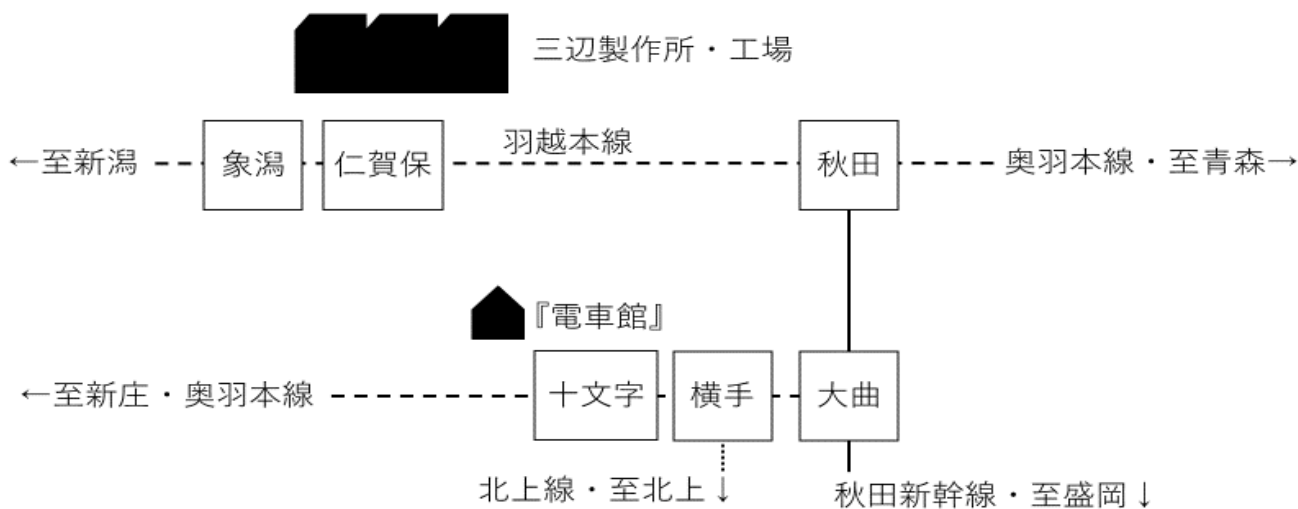
「なるほど……敷島さん、あなたは今回の事件に10年前の放火事件は絡んでいると思いますか？」

「え、そんなこと言われても……」

返事に詰まる。これで認めたら一気に怪しくなるんだ

「そういや、放火された工場ってどこにあったんだ？」

路線図



「えー、仁賀保です。今もそこに工場があります。再建したやつですけど、ハイ」

釜田さんの質問にも律儀に答える。

「ねえ、叶？ 仁賀保ってどこ？」

「秋田県と山形県の県境近くにある町で、日本海が近い所(図⑨参照)。トワイライトエクスプレスでも通過してたよ」

お姉ちゃんの耳打ちをよそに、犬塚刑事は続いて鳥海先生に事情聴取をすることにしたみたいだ。

「私は昨日、ここに17時半くらいに着きました。鹿島さんにここに案内されて、しばらく待たされました。比叡さんの雑誌の対談企画で山鳩会長とお話することになつたのですが、無理を言つて対談を今日にしてもらいました。本当なら今頃、白熱した対談を繰り広げていたはずですよ」

「無理を言つて今日にもらった、というのはどうしてですか？」

「空いている日が昨日と今日しか無かつたんです。この時期の大学講師は何かと新年度に向けた準備で忙しいんです。受験生の答案の採点を行っている間は他の業務ができないので猶更です。人によってはこの時期にゼミ合宿が入ったりしますし」

理路整然とした返答を犬塚刑事は手早くタブレットに打ち込んでいく。

「夕食から飲み会にかけての行動は敷島取締役と同じです。ただし、私はアルコールを嗜まないので酔っ払ったりはしませんでした」

「なるほど。では、昨夜の山鳩会長の部屋の様子や、食事や飲み会での会話の内容も覚えていたりしますか？」

「まあ、多少なら」

ポマードを髪に塗りたくった教授は少し考え込み、そして答える。

「夕食の時には私は山鳩会長、比叡さん、そして水郷さんと一緒に居ました。対談の打ち合わせを兼ねたものですが、特に変なことはありませんでした。打ち合わせと言つても、何時開始とか対談内容とかを確認するだけでした」

「なるほど。ちなみに、対談の内容は？」

「鉄道の将来です。人口がどんどん現象する中、大量交通機関である鉄道をどうやって維持していくのか、そもそも維持することそのものが妥当なのか、そういう方面に話を持っていくことになっていました。模型などについては山鳩会長の単独インタビューで話が終わっていたそうなので」

お姉ちゃんもその内容に間違いないと断言した。容疑者を一堂に集めて証言を聞くと、不用意に嘘をつけないというメリットがあるのかもしれない。

「打ち合わせそのものはメインの肉料理が出てくる頃には終わり、そこからは雑談でした。水郷さんの持つていたカメラが大きくて目を引いたので、それについて色々教えてもらっていました。最も、自分はカメラ音痴なのであまりよく分かりませんが」

「なるほど。水郷さんに何か変わった様子はない？」

これは先生だけでなくテーブルを一緒に囲っていたお姉ちゃんにも投げかけられた質問だった。二人仲良く首を傾げる。

「心当たりは無い、と……」

それにしても、本当に水郷さんはどこに行ったんだろう？

「それで食事は終わり、そこから私も飲み会に向かいま

した」

「なるほど。鳥海先生、部屋に何か変わった様子はありましたか？」

「そうですね……元々が変わった部屋なので、何とも。」

ですが、展示されていたコレクションについては特に不審な点は無かったと思います」

そういえば、凶器は部屋に展示されていたレールだった。どうしてそう思うのですか？」

犬塚刑事は踏み込んだ質問を繰り返す。

「興味があったので、許可を貰って間近で見させてもらっただけです」

「レールも見ましたか？」

核心に触れる問を投げかけた。

「ええ、見ましたよ。開業時の山陽新幹線のレールだと壁に固定されていましたが、それとも、何か細工をされていたりしましたか？」

刑事が妙にレールにこだわることに感付いたのか、鳥海先生は少し慎重な物言いになった。

「そうですね……レールの方にばかり目がいつていたのではつきりとは断言しかねますが、固定されていたと思いますよ。第一、固定されていなかったら危なくて近寄らせないはずですよ」

犬塚刑事は少し考えてから、黙って返答をメモに追加した。そこで矢野警部が剣さんと羽黒さん、鹿島さんに従って戻ってきた。

「お疲れさん、剣」

釜田さんの隣に剣さんは腰掛ける。何やら難しい顔をしている。

「今は何の話をしているんですか？」

「事情聴取の真っ最中だ。今は鳥海先生の番だ」

剣さんが釜田さんから小声で現状を教えてもらっている間にも、事情聴取は進んでいく。

「飲み会ではどのような話をしましたか？」

「山鳩会長はむしろ聞き役で、私達のことを聞きたがりました。私がJR北海道の問題で国交省の会議に参加した時の話や、さらにその前に運転士をやっていた頃の話などには興味津々でしたね」

「運転士？ ああ、営団の運転士だったんですよ」

私達は少し驚いた。でも、ここはただの館じゃない。

「電車館」だ。剣さんのような現役の運転士もいるくらいだから、元運転士がいてもおかしくない。

「失礼ながら、前もって分かる範囲で鳥海先生の経歴を調べさせてもらいました。鳥海先生だけでなく、今回の事件の容疑者全員についてです。あなたは営団を退職後に享保大学に入学して交通経済学を勉強し、そこから安政大学の教員になったんですよ？」

鳥海先生は硬い表情をして頷いた。

「あれ？ ですが先生、今は宝永大学で教えているんじゃないかったんじゃないですか？」

私は思い出して口を挟んだ。

「ええ。今はそうですね」

なぜか言葉少なに答える。

「スキヤンダルで安政大学を追われ、宝永大学に移籍したと聞いていますが」

「スキヤンダル？」

釜田さんが眉を吊り上げた。

「論文データの捏造と改竄疑惑、ですよ？」

矢野警部の挑発的な言葉に、先生は黄色い頬を赤く染めた。

「あなたが執筆した高速鉄道と航空路線の競合についての論文、それに掲載された比較データの改竄が明らかになったのは2009年のことでした。同じ大学の島風教授、この人も交通経済学の教授ですが、彼女が指摘したものでしたよね？ 結局、疑惑止まりレベルのものでしたが、事態を重く見た安政大学はあなたを解雇した」

「……よくご存じで」

鳥海先生は微かに青筋を立てながら皮肉っぽく言った。調べましたので」

警部はまともに取り合わない。

「私は何度も否定したのですが、大学当局が取り合ってくれません。今でも否定しています。現在お世話になっている宝永大学での職まで失ったらたまらないので、訴訟までは起こしていませんが」

それだけ聞くと、裁判で勝ち目がないことが分かって……捏造と改竄が事実であるように聞こえてしまう。

「それと、同じ時期に奥さんとも離婚していますね」

「それがこの事件に何か関係あるんですか？」

不愉快な話題を立て続けに突き付けられて、明らかに気分を害したようだ。犬塚刑事はこれ以上刺激するのはマズいと思ったみたいで、話題を昨夜の行動に戻した。

「飲み会を済ませて、敷島取締役を部屋に上げた後は剣さんと一緒に鉄道模型を走らせていました。廊下のものです。それが……ええと、1時前くらいまででしたかね？」

「ええ、それくらいでしたね」

剣さんも同調した。

「そこからシャワーを浴びて寝ました。翌日に対談を控えていたので、これ以上の夜遊びはしていません。朝は

7時過ぎに起きて食堂車に向かい、鹿島さんにコーヒ
をご馳走になりました。そして山鳩会長の騒ぎです」

証言を終えた鳥海先生は不愉快そうに椅子に座り直し
た。その時、誰かの携帯が鳴った。

「はい、矢野です」

みんなの視線が矢野警部に集中した。

「はい、ええ、そうです。秋田県警の矢野です。はい：

…高知県警？ はい、……ええ、鳥海先生なら今この場
にいますが……はい、……え？ 鳥風教授？ 殺害され
た？」

食堂車の空気が一気に張り詰めたものになるのを私は
肌で感じた。剣さんの視線は矢野警部と鳥海先生を往復
している。鳥海先生が一番驚いたような顔をしている。

「はい、はい、分かりました……え、彼女もいるんです
か？ はい、はい、いえ、彼女の知り合いがこちらにい
るものでして……はい、ええ、そうなのです……はい、
では」

矢野警部は当惑の表情を隠せないままに電話を切る。

「警部……鳥風教授が、どうしたと言いました？」

鳥海先生はおずおずと立ち上がり、聞いた。

「……殺害されたそうです。高知県の山奥で」

* 剣礼士 —— 秋田県横手市・『電車館』

鳥海先生の事情聴取が終わった所で、僕は矢野警部に
呼び出された。釜田さんに大和さんも一緒だ。

「皆さん、急に呼び出して申し訳ありません」

「どうしました？」

僕の胸の中に、何か悪い予感が立ち込めた。

さっき電話で言っていた「彼女」って、まさか……。

「端的に言います。碓氷さんと霧島さんが高知で殺人事
件に巻き込まれました」

目の前が真つ暗になった。

「……瑞穂さんは無事なんですか？」

「ええ、現場となった旅館に居合わせたようです」

良かった、とりあえず無事ならまだ安心だ。

「向こうの事件ってどんな事件なんだ？」

釜田さんが切羽詰まった口調で問い詰めるも、矢野警
部は首を横に振る。

「高知県警が殺害された鳥風教授の交友関係を調べてい
たところ、鳥海先生に行き当たったようです。それで調
べたら、この事件に巻き込まれていることが判明した
みたいです」

僕は居ても立っても居られなくなり、スマホを手を取
った。

「電話してみます」

でも、それには及ばなかった。僕のスマホが振動を始
めた。着信画面には、彼女の名前があった。

「もしもし、瑞穂さん？」

* 碓氷瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

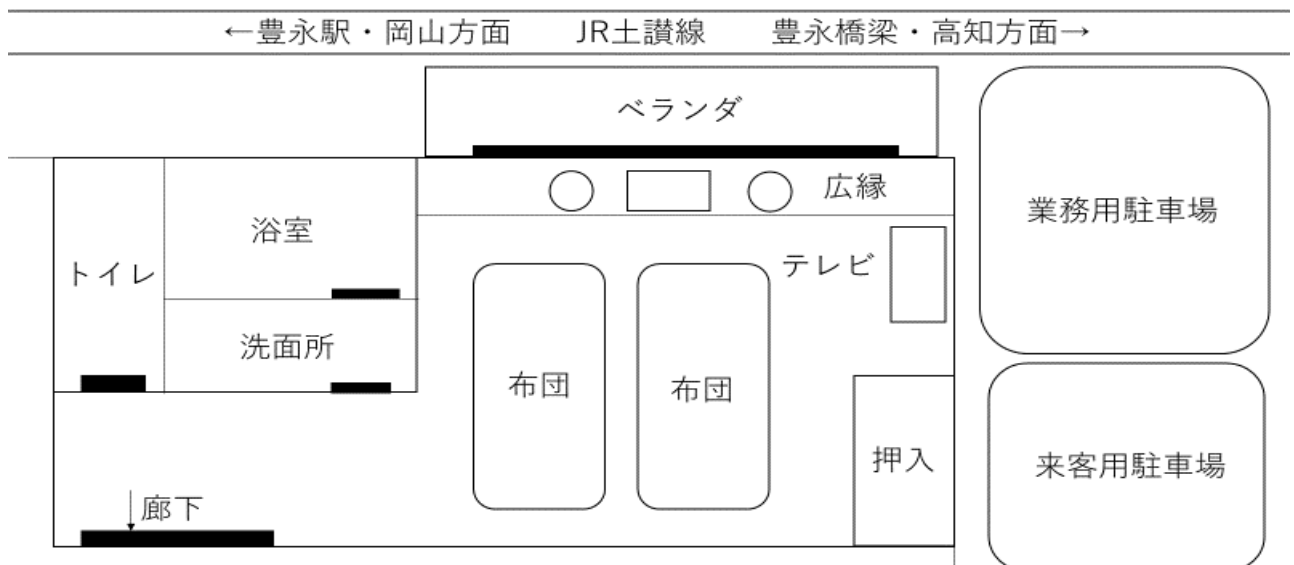
昼前になって、警察による家探しが開始された。霧島
さんにそのかさされて、私は廊下から1号室(図⑩参照)
の捜査に精を出す警官を覗き見ていた。すぐに大発見が
あった。

「警部！ 睡眠薬が発見されました！」

女刑事が中年太り著しい警部を呼び出した。

「どこにあった？」

鳥風・常盤の部屋 (1号室)



「常盤さんの荷物の中からです」

「見せてくれ」

黒潮警部は瀬戸刑事から物品を見せてもらう。指紋が付かないようにポリ袋に入れられていたのは、市販の睡眠薬のようだ。元は十錠くらい入っていたと思われる包装の中身は、四錠ぶんが空になっている。

「よし、彼女に聞き込みをもう一度行こう。お前は部屋の搜索を続けてくれ」

常盤さんって確か、あの気弱そうな女子大生だ。

「これは変な事になってきましたね……」

私の横で警察コンビを眺めていた霧島さんが言った。

「変な事？」

「ええ。僕が犯人やったら、証拠になり、そうな睡眠薬なんて、一刻も早く処分しますね」

言われてみればその通りだ。島風教授が眠気を訴えていたことと睡眠薬を結び付けることは私にもできる。

「それに、仮に常盤さんが犯人やとすれば、どうやって川に島風教授を運んだのか……その疑問が残ります」

「そういえば、フロントにある監視カメラで玄関や階段は録画されているのに、特に不審な動きは無かったんですよね？」

「ええ。島風教授の死亡推定時刻は9時半から11時半の間ですが、その間に玄関を通ったのは外で飲んでいただけです。僕は犯人やないので、誰もあの玄関を使っていないことになります」

霧島さんが犯人じゃない……？ 私の少しじつとりした視線に感付いたのか、霧島さんは苦笑した。

「さては僕を疑っていますね？ 横に剣さんがおらんからって、少し疑心暗鬼になりすぎですよ」

「すみません」

私は苦笑で誤魔化し、推論を続ける。

「そうなるよ、犯人は二階の非常階段を使ったことになりませう」

「僕もそう考えました、確氷さん。ですがそこは従業員専用で、一般客は鍵を手に入れない限り通ることはできません。そして、こじ開けられた痕跡はありませんでした」

「鍵はどこにあるんですか？」

「従業員、つまり僕の両親と津軽さんが肌身離さず持っています。他にはありません。そして、三人とも持っていることが確認されています」

「一度こつそり盗んでまたこつそり返す……そんな芸当、普通はできませんね」

「しかも鍵束の中の一つの鍵です、猶のこと困難を極めるでしょうね」

そうなるよ、常盤さんが島風教授を移動させることは不可能だ。窓から投げ捨てたとしても、この建物から川までは数十メートルある。

「とりあえず部屋に戻りましょう。このまま廊下にいるも仕方ないですし、却って邪魔になります」

私は後ろ髪を引かれるようにゆくりと1号室横の廊下を去り、自室に戻る。お茶会の続きをすることになった。本当に今日は朝からお茶を飲んでばかりだ。

「お茶に飽きたのなら、コーヒーでも貰ってきましょうか？」

霧島さんの好意に甘えることにした私は、広縁の椅子に座り込んだ。そのまま思考の海に深く潜っていく。

常盤さん、あのセミロングの気弱そうな女子大生が犯人なの？

正直なところ、私にはそこから疑わしかった。あんな気弱そうな人に、殺人なんて大それたことができるのだろうか？

あの様子が演技だとすれば？ 本性はとんでもない冷酷な悪女だったら？

その考えはすぐに打ち消された。潮路君も彼女の自己紹介の時にシャイであることをフオーロしていた。それに、彼女がこの宿を宿泊先に選び、ここを春休みのゼミ合宿の舞台に選んだことも珍しがついていた。ゼミに入った当初から演技を貫き通していない限り、彼女の恥ずかしがり屋は本物だろう。

ん？ 常盤さんがここをゼミ合宿の場所に選んだ？

それも私には引つかかった。自分から希望した場所に合宿に行くことになったのなら、もう少しガツガツした態度を見せてもよさそうだ。普段から内向的な彼女に一番を与える意味を込めて、ゼミの誰かが常盤さんに圧力をかけて強制的に場所の候補を出させた？

どうもちぐはぐだ。でも、これ以上考えてもちぐはぐなこと以上は分からなさそうだ。

とりあえず、常盤さんがここで合宿することにした経緯は脇に置いておこう。他に考えることができるテーマは何だろうか？

睡眠薬。睡眠薬が常盤さんの荷物から発見されたと警察は言っていた。島風教授の遺体からも睡眠薬の成分が検出されたということは、恐らく常盤さんが飲ませただろう。何のために？ 殺害する時に抵抗されないように。

でも、普通なら一刻も早く睡眠薬を捨ててしまいうだろう。宿の目の前には吉野川がある。証拠を捨てるには絶好の場所なのに、彼女はそれを捨てなかった。どうして？

捨てるのを忘れていた？ まさか、そんなわけがない。捨てるだけでも捨てられなかった？ でも、そもそも常盤さんは宿の外に出していない。それなのに島風教授を外に放り出すことができたのに、睡眠薬を外に捨てることは楽勝はずだ。

分らない。あんなのを置いてあるなんて、まるで自分が犯人だと言わんばかりだ。

考えても結論が出なかった。仕方ない、これも横に置いておこう。次に、常盤さんが島風教授を川に放り込んだ方法を考えてみる。

この建物から遺体の発見現場までは数十メートル離れている。常盤さんは小柄で、島風教授は太り気味だ。運動系のサークルに入っていたりするなら変わってくるかもしれないけど、普通は眠らせた中年太りの女性をあの場所まで背負うのはしんどいだろう。

そもそも、常盤さんはこの宿を出していない。正確に述べると、この宿を出入りしている様子が監視カメラに捉えられていない。監視カメラの目を逃れて外に出るには二階から非常階段を使うしかないけれど、関係者以外の何者かが使った形跡は無い。

ということは、常盤さんはどこからも出入りしていないことになる。

つまり、密室。

何ということだろう、私にはとても敵わない。

「どうしたんですか、難しい顔をして」

「わあっ！」

いつの間にか霧島さんが湯気の立つコーヒーを両手に戻ってきていた。

「確氷さん、ミルクと砂糖は？」

「いえ、いいです」

少し薄めのアメリカンコーヒーを一口啜り、円卓に置く。霧島さんはミルクだけ入れて飲み始めた。

「常盤さんのことを考えていたんです」

「ああ、彼女ですか……ロビーで黒潮警部に話を聞かれていますよ。どうも警察は彼女を本命に絞ったみたいですね」

あのいけ好かない達磨が相手なのには内心で少し同情した。

「確氷さん、あの警部のこと嫌いなんでしょう？」

はっとして霧島さんを見る。

「凶星ですか。確氷さん、そういうところ分かりやすいですもんね」

「そうですか？」

「というのは冗談で、実はせとつち……ああ、いや、瀬戸刑事から少し聞いたんですよ」

霧島さんはいたずらっぽく笑い、私は少し脱力した。

「人が悪いですよ、霧島さん」

「ははは、すいません。あの警部、容疑者をわざと怒らせて本音を引き出すのが得意らしくて」

じゃあ、私を怒らせたのも計算づくだったってことか。

掌の上で踊らされたような気がして、私は口を尖らせた。

「いるんですよ、ああいう手を使う人。国交省にもいます。どうやって黙らせるか知ってますか？」

「え？」

そんなうまい方法があるとは思えないけど。

「先に向こうを怒らせるか、相手が受け止めきれぬ怒りのキヤパをオーバーするくらいに激怒すりゃええんですよ。そうすれば向こうから近寄ってこなくなります。要するに、相手は出方を窺っているんです。冷静に出方を分析させんか、分析するのは危険だと思わせるか、その

違いです」

したり顔で言っているけど、そんな真似ができたら苦労しない。私は少し呆れてコーヒーカップを手に取ろうとした。すると、手も触れていないのに中の黒い液体が細かく波紋を描き始めた。

次の瞬間、真下の線路を勢いよく『南風』が駆け抜けていった。列車が鉄橋をけたたましく踏み鳴らす音が消える頃には、コーヒーカップの中身も静まり返っていた。

「ん？」

「へ？」

霧島さんが喉の奥で何かに引つかかるような声を上げ、つられて私も思わず変な声を出した。

「いや……でも、まさか……」

霧島さんはブツブツと何か呟きながら、窓を開けてベランダに出ようとした。

「ちよ、危ないですよ！」

「手すりに近寄らんかったら大丈夫です。床は最近補修したばかりなんで」

そのまま役人は外に出てしまった。私も気になって、恐る恐る窓の外に身を乗り出す。

「あの、霧島さん？ どうかしたんですか？」

「……確氷さん、分かったかもしれない」

霧島さんはゆっくりと私の方を振り返った。

「分かったって、何が？」

「島風教授を川に捨てた方法ですよ」

* *

霧島さんはそのまま瀬戸刑事の元に向かった。私も霧島さんの考えが気になって、そのまま後ろをついていく。

「せとつち、ちよつとかまん？」

「先輩、どうしました？」

「分かったかもしれん、常盤さんが島風教授を川に捨てたトリック」

「……本当ですか!？」

一拍空いて、瀬戸刑事は驚きの声を上げた。

「とりあえず、黒潮警部の所に」

お団子へアアの女刑事はそのまま霧島さんを引き連れて一階のロビーに向かった。私は行くかどうか迷ったけど、吹き抜けを通して二階から話を聞くことにした。

「本当に私、何も知らないんです……」

「何度も言わせんなや。それやったら、あの睡眠薬はどうやって説明するがよえ、ええ? あんたの荷物の中から出てきたがぜ?」

「だ、だから、何も知らないんです……!」

ロビーのソファでは黒潮警部が土佐弁全開で常盤さんに凄んでいる。あれだどどつちが悪者なのか分からない。でも、土佐弁で素でかなり語気強く聞こえるから、相手に凄む時は便利だ。

「黒潮警部、霧島さんがお話ししたいことがあるそうです」

「今は忙しいんや、後にしてもらえ」

「島風教授を川に捨てたトリックが分かったそうです」

警部の動きが止まり、そして緩慢に霧島さんを見上げた。

「そういうことやったら話は別やね。霧島さん、聞かせてもらえますか?」

「ええ。とりあえず、1号室に案内してもらえますか?」

「……すみませんが、部外者を入れるのはちょっと」

「それやったら2号室で構いません」

私が構うわよ。階上から覗みつける私にはまるで気付かず、霧島さんは事もなげに警察コンビの承諾を取り

つけた。

「分かりました、向かいましょう」

結局、押し切られるようにして私は部屋にみんなを案内した。霧島さんは真つ直ぐに広縁に向かい、窓を開ける。

「皆さん、下にJ.Rの線路があるんですけど、見えます?」

霧島さんは説明を始めた。礼士さんはいつも「さて……」から謎解きを始めていたことにふと気付き、何だか違和感を覚えた。

「あつちが現場の方ですね。カーブしゆう鉄道の橋が見えます」

霧島さんは右の方を腕で示す。

「それで、霧島さん。常盤さんはどうやって島風教授を川へ?」

黒潮警部は先を急かした。横では不安ではち切れそうな表情をした常盤さんがいる。

「汽車の屋根を使ったがですよ」

「……汽車の屋根?」

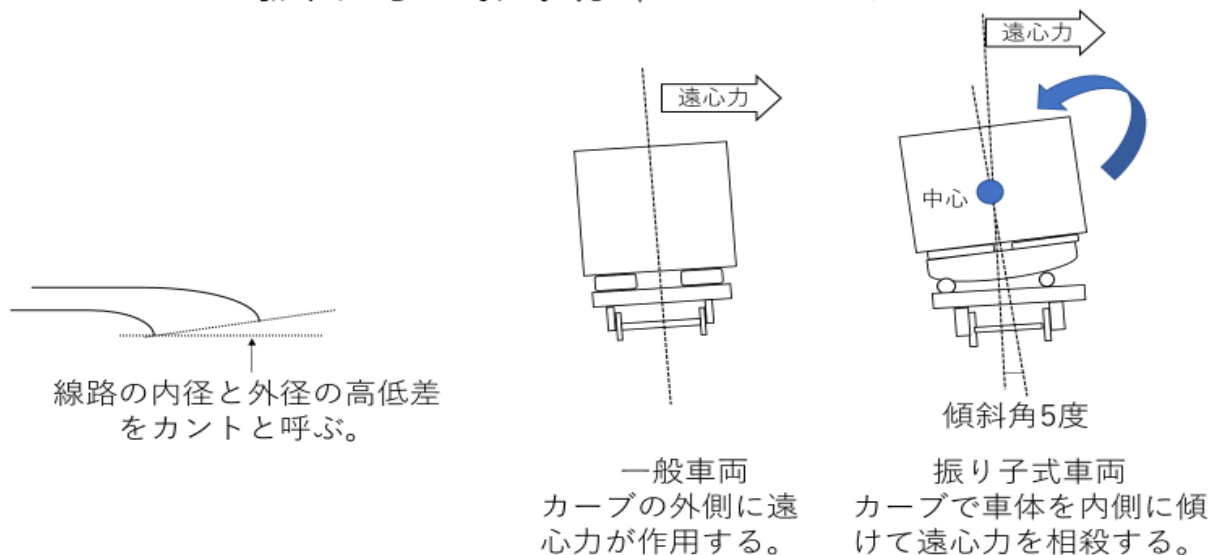
「ええ。使い古されたトリックです」

霧島さんはベランダから室内に戻った。

「この土讃線を走りゆう特急『南風』に使われる2000系つてのは、振り子式気動車つて言うんです(写真①・②参照)」

なぜだろう、礼士さん以外の人の口からこういう鉄道知識を聞くのは物凄く新鮮で、悪く言うと強烈に似合っていない。単に私が礼士さんの口から語られることにしか慣れていないのかもしれない。

振り子式気動車とカント



「振り子式気動車つてのは、カーブに差し掛かると車体をカーブの内側に傾けて、車体にかかる遠心力を相殺する仕組みを搭載した列車のことです。遠心力を相殺することで乗り心地を損なわずに曲線を高速で通過することができるとですよ(図⑩右側参照)」

礼士さん以外の人の口から聞く鉄道ネタは、私の耳を右から左に通る過ぎるばかりだ。それでも、あの急カーブの鉄橋に高速で突っ込む『南風』の姿を思い出すことはできた。

「車体をカーブの内側に傾けるんですか?」

「そうです。2000系の場合やと、最大で5度内側に傾けます。カーブのカント……曲線のレールでは外側のレールが盛り上がり、内側のレールが下に落ち窪んでいるんですが、その高低差をカントと呼ぶがです(図⑩左側参照)。そのカントと合わせると、車体の傾きはもつと大きいはずですよ。さて、あの川を渡る橋の形を思い出してみましょう。ここからやと右側に急カーブを描いています。半径300メートルくらいかな、あれやと。そして、島風教授の遺体は鉄道橋の右側に落ちていました(図⑦参照)」

瀬戸刑事がパンと手を叩いた。

「常盤さんは島風教授に睡眠薬を飲ませて抵抗できんようにして、1号室のベランダから眠っている彼女を高知方面に向かう『南風』の屋根に捨てた。そうしたら後は『南風』が自動的に島風教授を川に振り落とす、……そう言いたいんですね?」

「ええ。この旅館の客室はベランダが線路のほぼ真上にあります。1号室のベランダから島風教授を落とすこと

も可能です(図⑩参照)。島風教授の死亡推定時刻は9時半から11時半、その時間やったらまだ高知方面に向かう『南風』もここを通ります。部屋の中からベランダまで眠っている教授を引きずるのは、いくら小柄な彼女でもできるでしょう」

そういうえば昨夜、テレビで映画を観終えた頃に最終の『南風』が通り過ぎて行ったのを思い出した。

私は霧島さんが推理を披露する間、ずっと常盤さんの様子を見ていた。彼女の顔はますます青ざめ、四肢は小刻みに震えていた。

「しかし、車体をたった5度傾けるだけでそんなことができるんですか?」

黒潮警部が疑問を呈する。私も同感だ。

「たかが5度、されど5度。半径600メートルの曲線では、普通の列車よりも30キロ速く走れます。甘く見ない方がええと思いますよ。実際に乗れば車体の傾きがいかにきついか分かります」

そう言われると、威力は理解できるけど……それよりも、霧島さんがここまで鉄道について力説するのを初めて見た。

「常盤さんがこの宿を現場に選んだのも、『南風』の屋根に教授を捨てられる宿の立地条件と、急カーブで川を渡るという路線条件を満たしたからやと思いますよ」

「だが、島風教授の死因は転落死やったでしょう? それはどう説明するんですか?」

「鉄道車両って、あれで線路からの高さが3メートル近くあるんですよ。橋はあの高さやと川から5メートルはあります。合わせると8メートル、転落死させるには十分やないですか。犯人にしてみれば、教授の死因は転落死でも溺死でも構わなかったと思いますけどね」

犯人、という言葉に黒潮警部と瀬戸刑事は揃って常盤さんの方に向かい合った。

「ち……違います! 私はそんなことしてません、全部言いがかりです!」

「ええ加減にせえや! 今の話で筋は通っちゅうやろ! それに、おまんの部屋から見つかった睡眠薬はどう説明するがよえ!」

「だから知りませんってば!」

霧島さんは少し慌てた様子で仲裁に入る。

「ま、まあまあ黒潮警部、僕は常盤さんには犯行が可能だ、ということを示しただけです。彼女が犯人である証拠は何も示していません」

でも、石頭の警部は聞く耳を持たない。方法が割れた以上、彼女を捻り上げた方が早計だと考えたみたいだ。

「そうは言うても、この睡眠薬の存在を無視するわけにはいかんやろ。さあ来い、常盤涼香! 続きは警察でたつぷり聞いちゃるわえ!」

「違います! 本当に私じゃないんです! ここを合宿場所を選んだのも、脅されてそうしたんです!」

キンキン声で訴える常盤さんの口から、今までに無かった単語が飛び出した。

「……脅された?」

黒潮警部もさすがに動きを止めた。

「え、ええ……本当なんです! 私の秘密をばらされたくなかったら言う通りにしろって、匿名のメールが来て、その指示に従ってここで合宿をするようにして……」

「それやったら、その秘密とやらもまとめてじっくり聞いちゃうわえ! どうせろくな秘密やないやろ、さあ来い!」

泣き喚く彼女を黒潮警部はズルズルと引きずっていつ

た。

「……えーと、振り子ナントカでしたっけ？ それについてまた後で詳しく聞かせてもらってもいいですか？」

「ええよ。その代わり、常盤さんのことも教えてくれん？」

僕の実家を現場にした理由が合っちゃったか知りたいいき頼んで、せとつち」

瀬戸刑事は霧島さんと二言三言会話をし、そして黒潮警部の後を追った。

「一件落着ですね、碓氷さん」

霧島さんは大仕事を終えたような疲れの表情で広縁の椅子に戻り、ミルクを溶かしたコーヒーの残りを飲み干した。

霧島さんの表情とは対照的に、私の気持ちは晴れなかった。何か色々引つかかっている。でも、それら全てに満足な答えが見つからない。

私は部屋を駆け出した。霧島さんの制止も聞かず、階段を駆け下りてロビーを抜ける。常盤さんを後部座席に押し込んだ。パトカーが、水溜りを跳ね飛ばしながら国道を走り去っていくのが見えた。

私にはどうすればいいのか分からなかった。常盤さんが本当に犯人なのか、霧島さんが暴いたトリックは正しいのか。さつきまで私が散々頭を絞っていたことに答えを与えてくれたはずなのに、そのどれもに疑問符が蠅のようにたかっている。

私は自分のスマホに手をかけた。慣れ切った操作で、見慣れた番号を呼び出す。コールすること数回。

『もしもし、瑞穂さん？』

最愛の人の声は、今はもはや懐かしい。心が緩み、涙腺の緩みと入り混じり、私の口を突いて出た。

「助けて、礼士さん……！」

降りしきる雨に打たれながら、私は救いを求めた。

〈最終話につづく〉

*次回『南風に吹かれながら(後編)』は三文分集202

1年夏号に掲載予定です。ご期待下さい。